

356
512

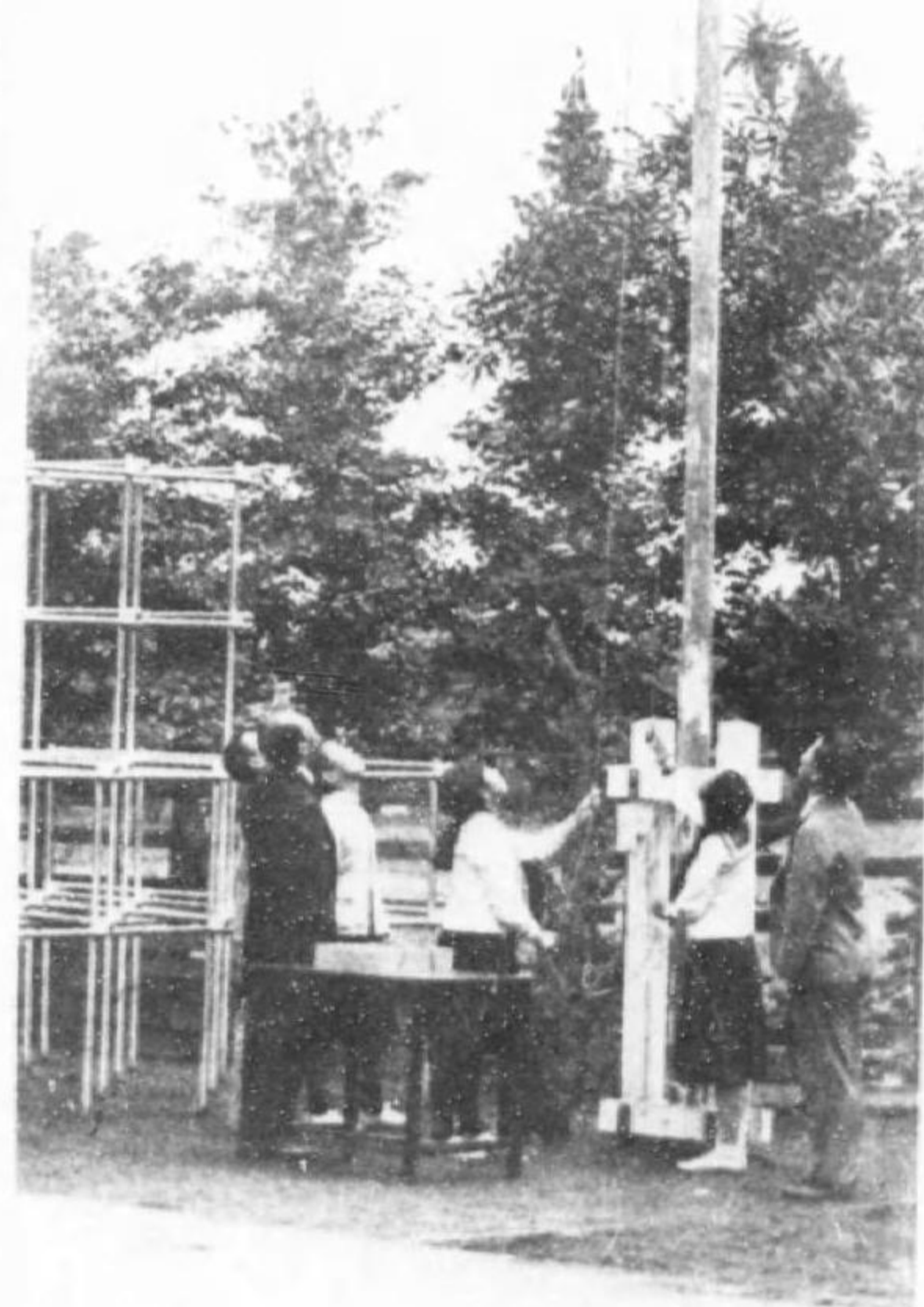
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸
70 1 2 3 4 5

始





念紀年週十立創





校長 池田 菅 先生



知



體



徳

誕生の地・日比谷



校 旗

校 訓

- 1 勉 勵
- 2 親 切
- 3 儉 約



光 榮

校長大池菅根謹記

私たちの學校は、ほんとうに名譽な學校です。昨年十一月二十日、高松宮並びに妃殿下が、今年の一月十六日に賀陽宮殿下が、又同三月十四日には、賀陽宮妃殿下がそれら、台臨になりました。皆さんの勉強してゐるところを御覽下さいました。ほんとうに、ありがたいことでありました。皆さんは、この光榮をよろこぶと共に一生懸命勉強して、よい東京市民、そしてよ



い日本人となり、世の中の役にたつ人にならねばなりません。皆さんは、此の學校に入學したからには、此の決心がなくてはなりません。

(御台臨記念御寫眞帖の一節)

(右) 講堂にて御台臨記念學藝會を御台覽中の高松宮並びに妃殿下。右より大池校長、一人おいて藤井教育局長、永田市長

(左) 教室にて手工自由製作を御台覽中の賀陽宮殿下(中央)右の軍服は御附武官、その間は武部普通學務局長、その後は藤井教育局長



話 童



話 發・音 發



話 觸



縫 裁



すまいざごうよほお



記 日 繪



ム ズ リ

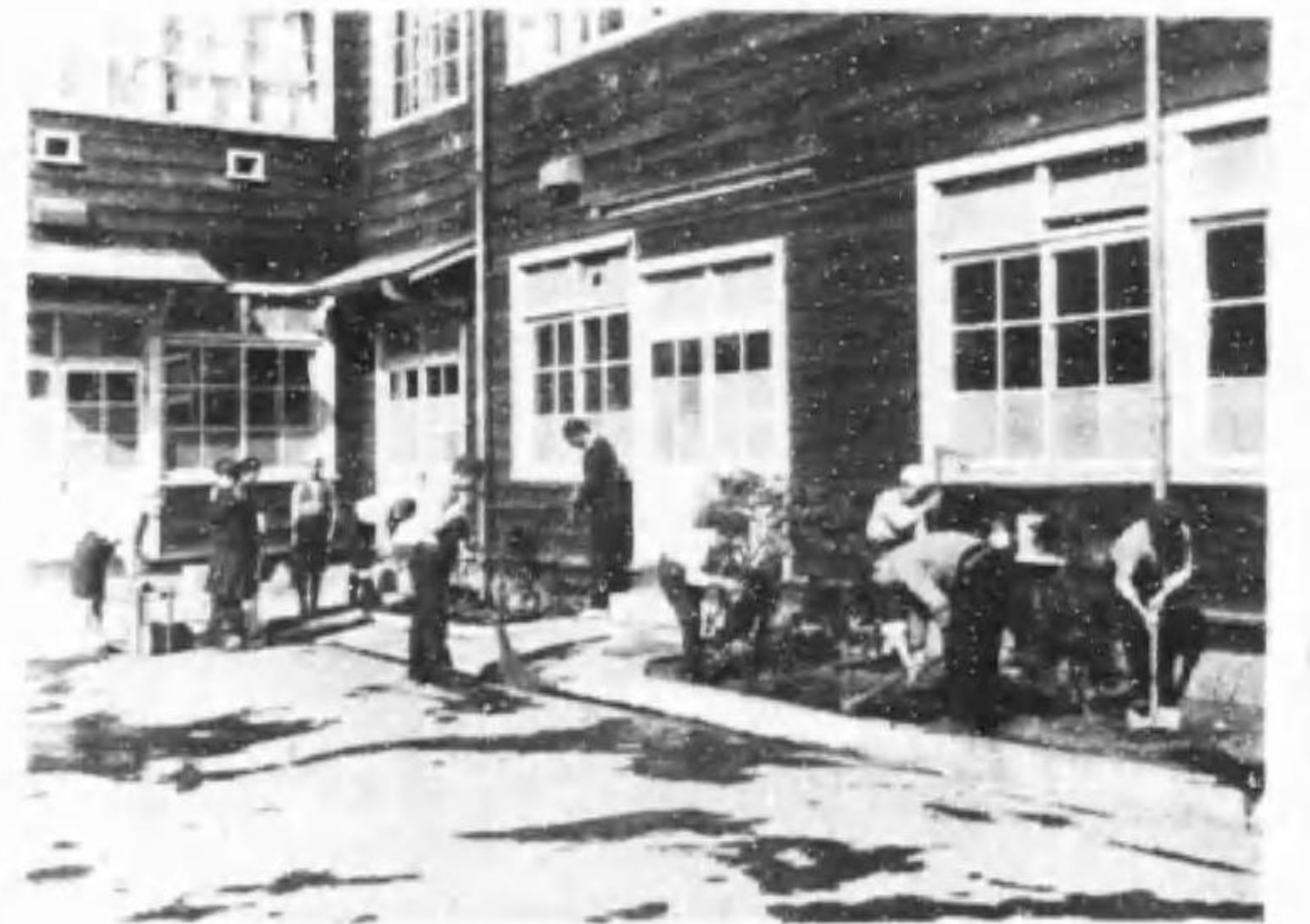
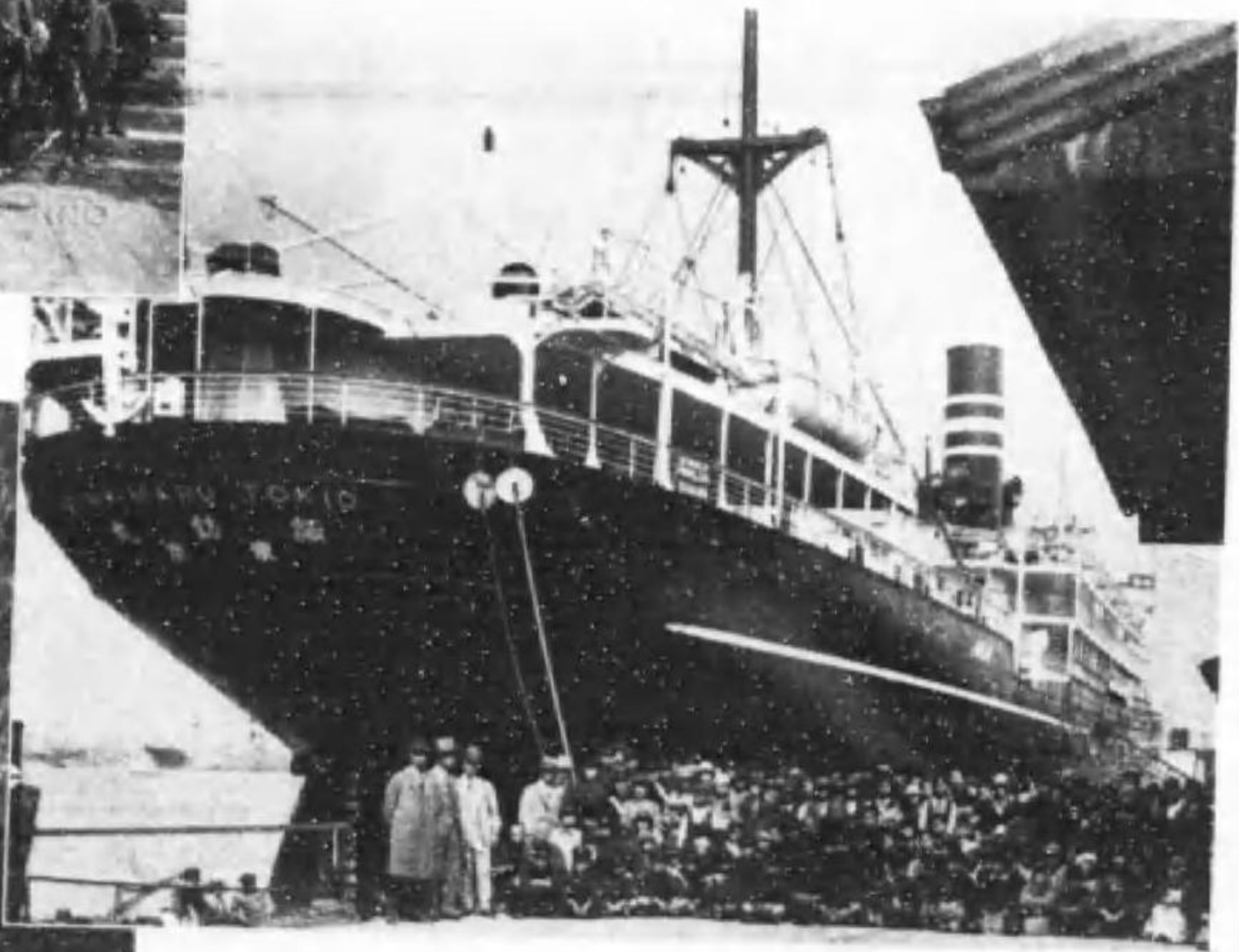


操 體



吾等が學校生活

一日のクロツキ



學 校 行 事

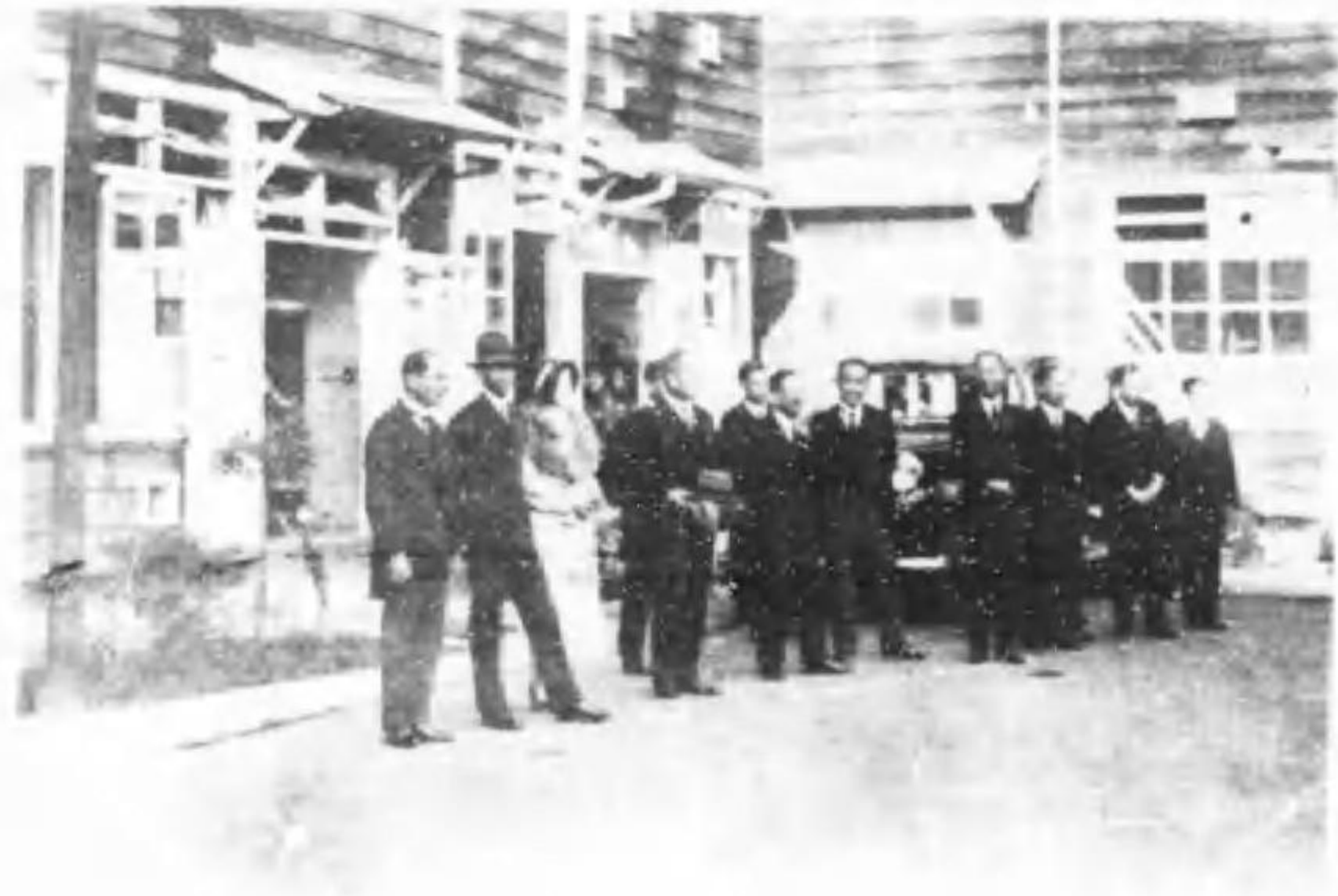
1 學 藝 會
2 美 化 作 業
3 臨 海 學 舍
4 校 內 運 動 會

5 兒 童 座 談 會
6 沙 子 狩
7 月 例 身 體 檢 查

8 遠 足 (鎌 倉)
9 見 學 (橫 濱)
10 旅 行 (日 光)

光榮 はつやく ● ● ●

「體操」「遊戯」の指導を御台覽中の
高松宮並びに妃殿下



「會話」の指導を御台覽中の
高松宮並びに妃殿下



「木工」の指導を御台覽中の
賀陽宮殿下



「讀話」の指導を御台覽中の
賀陽宮妃殿下



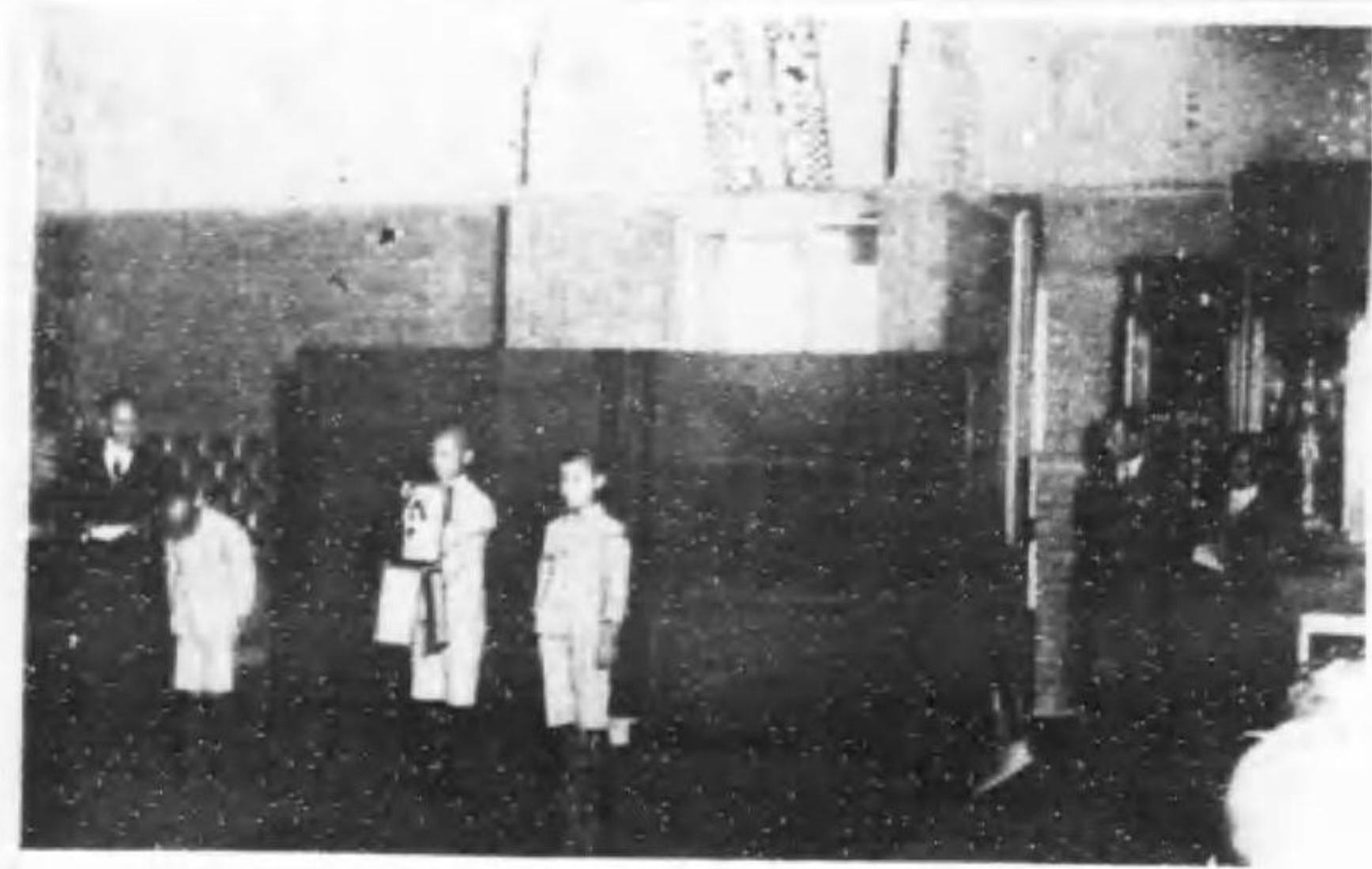
天覽寫眞



徳川侯を迎へて
右より川本、石黒、西川諸先生
今西女史、徳川侯、相原先生、
大池校長

直觀教授





兒童を世に問ふ



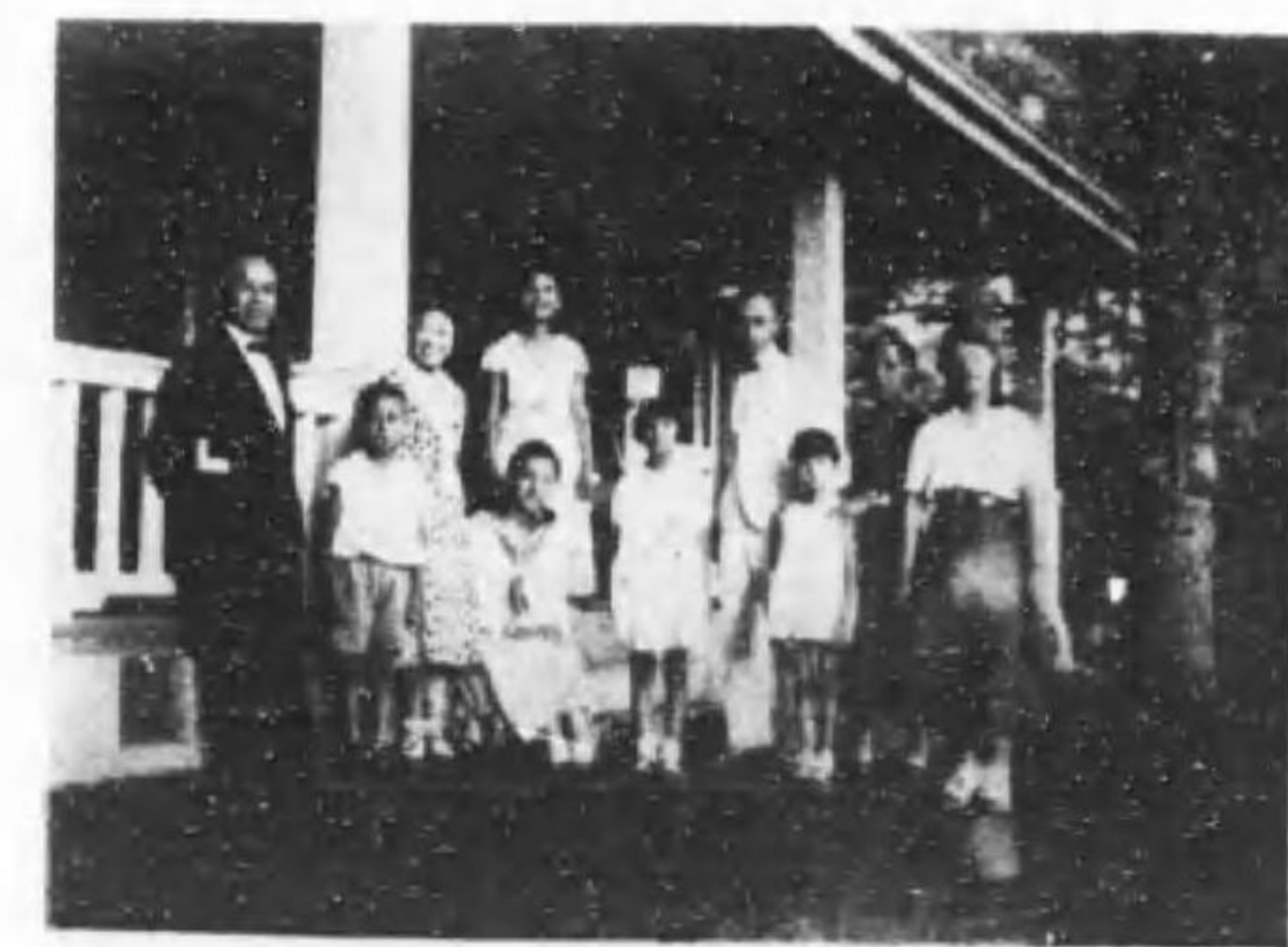
説明は「寫眞目次」を参照

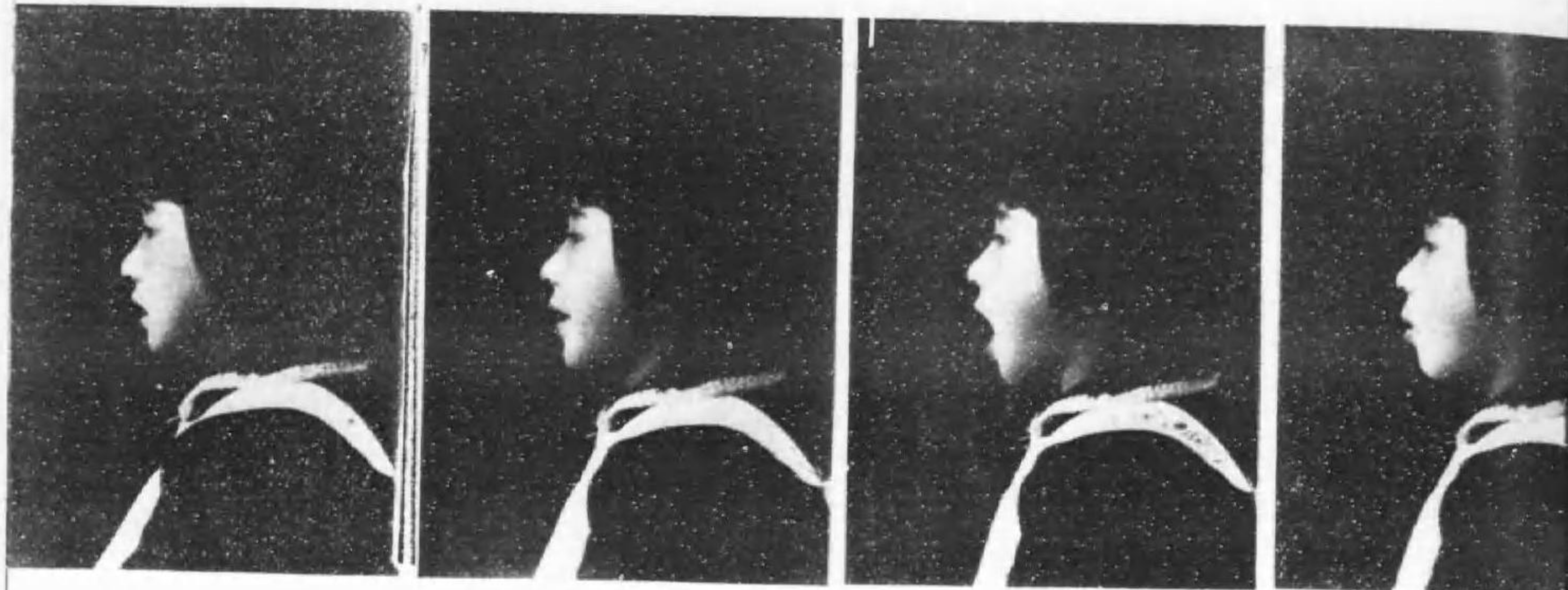
〔右頁〕

- 1 マイクを通して
- 2 華族會館演會を了へて
- 3 輕井澤にて

〔左頁〕

- 1 首相官邸にて
- 2 帝國教育會館にて
- 3 華族會館にて
- 4 田中文相を中心に
- 5 鈴木内相を迎へて





〔ウ〕
〔オ〕
〔ア〕
〔エ〕
〔イ〕

口形母韻圖譜



會部東關×會總國全
〔左〕 〔下〕



研究の集ひ

〔右頁〕

- 1 分團研究会
- 2 第一回國語調査會
- 3 研究座談會
- 4 關東部會
- 5 日費總會

〔左頁〕



校史を緋く

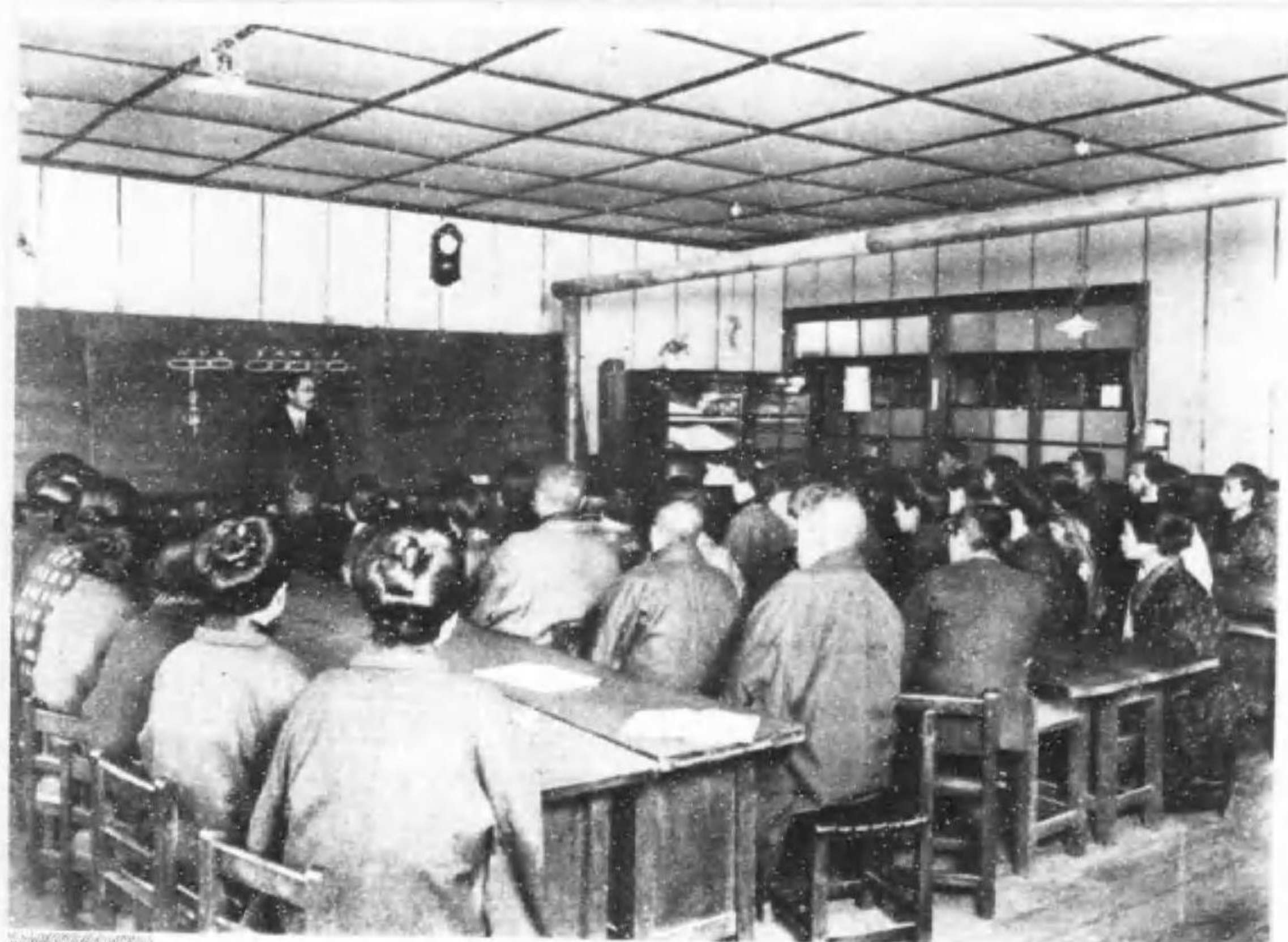


上・上野時代
日比谷校分教場に
第一回新入生を
迎へて

中・
日比谷時代
日比谷小學校體部
に第一回新入生を
迎へて

下・
大塚時代へ
日比谷、上野兩校
合併して大塚時代
を劃す

父兄を中心として



1 父兄講習 上
2 父兄指導 中
3 父兄座談會 下



拾年を語る



昭和九年
新井校
守贈本

清遊點景



箱根に憩ふ



大洗に上るきを浴びて



水郷に遊ぶ



椋名山の背景に
榛名湖畔にて



われ等の道
われ等の流
われ等の學校



卷頭に序す

開校以來十年、學則の初等部六年と中等部四年が一先づ完成し、今や第一回の入學兒童は、中等部の最上級となり、來年第一回卒業生として愈社會に一步をふみ出さうとしてゐる。之れを機として、第一期完成記念祝賀式を擧げ、過去を顧み、現在を凝視し、第二期の目標を樹立して、更に倍舊の教育活動を試みんとするのが、此の『十年を語る』の一卷である。

過去十年の歩みの間には、途を求めて、叢林に鉞を入れ、荆棘を切り開いたことも幾度かあつた。今漸くにして丘陵の頂上に立つを得、出發點を俯瞰しつゝ、今迄の経過を記録に留めて、一里塚とし、次ぎの旅路の發足點とする。

此書成るに當り私は校長として、學校の成績向上の爲め、寢食を忘れて研究や指導

に従事した同僚諸君の勞を多とし、我が子弟の爲めとは言へ、長く兒童と共に登校して、その誘掖指導に力められ、又力めて居らるゝ附添諸氏に敬意を表し、同時に特殊教育の必要を理解し、學校の經營に出来る限り便宜を與へられた市當局に感謝し、又學校の精神をよく理解し、常に學校の發展を助成された後援會に對して深く感謝する次第である。

校長 大池 菅 根

童話	〔第四時限の童話タイム〕(かき學級)	7
發聲指導	(さくら學級)	7
觸話指導	(すゞかけ學級)	7
裁縫指導	(中等部裁縫科)	7
學校行事	本文 (吾等が學校生活・十年の點景)の項參照	7
學藝會	〔指の家〕 右上より下へ	7
美化作業	1	8
臨海學舎	2	8
校內運動會	3	8
兒童座談會	4	8
羽田海岸にて潮干狩	左上	8
月例身體檢査	右上より左下へ	8
録倉八幡宮	1	9
横濱港へ汽船見學	2	9
華嚴の瀧の前にて	3	9
	4	9
	5	9
光榮はつゞく	本文の〔春秋十年〕の項參照	9
高松宮並妃兩殿下を迎へて	(遊戯及體操を御台覽中)	10
高松宮並妃兩殿下を迎へて	(讀話指導を御台覽中)	10

德川義親侯爵を迎へて	(昭和七年五月十二日應接室にて)	11
賀陽宮殿下を迎へて	(中等部工藝科作業を御台覽中)	11
賀陽宮妃殿下を迎へて	(讀話練習を御台覽中)	11
天覽寫	眞(運動場の一隅にて直觀教授)	11
兒童を世に問ふ	本文〔春秋十年〕の項參照	11
マイクを通して	(中央は德川侯)	12
華族會館にて實演會を了へて		12
輕井澤にて	(德川侯別邸にて)	12
濱口首相官邸にて實演	(左より)山茶花學級の『だれだよ』(昭和五年六月六日)	12
御下賜金奉戴記念實演會	(帝國教育會館にて)	12
帝國教育會館にて	2) 鈴懸學級の『鯛つり』(昭和九年一月廿六日)	13
華族會館にて實演	3) 葡萄學級の『虎ときつね』(昭和四年十一月四日)	13
雙教育促進懇談會實演會	4) 鈴懸學級の『大東京』(昭和七年五月十二日)	13
鈴木内相を迎へて		13
首相官邸にて實演	(圓内) 柘學級の『正直な樵夫』(昭和五年六月六日)	13
田中文相を中心に		13
研究の集ひ		14
口形母音圖譜	上段右よりウ、オ、ア、エ、イ	14
分團研究會	(校內研究五分團の一つ) 應接室にて	14
國語調査會	(雙教育振興會主催第一回)	14
雙教育研究座談會		14

本校主催關東部會 (昭和四年十月十二、十三日本校講堂にて) (右は座長大池先生)	15
本校主催日豐總會 (昭和八年七月廿九、卅日市立一中講堂にて) (議長席は大池先生)	15
校史を編く	

上野校時代 (日比谷小學校分教場)	上	16
日比谷校時代 (日比谷小學校雙部)	中	16
大塚校時代に移る (日比谷、上野兩校合併、移轉記念) (職員、後援會幹事一同)	下	16
父兄を中心として		

父兄講習 (一年、二年の附添父兄に講習中の大池校長)	17
父兄指導	17
父兄座談會	17
清遊點景 T.O.S.I.R.O親睦會主催職員旅行	

箱根 (八千代橋にて)	昭和三年十月	18
水郷	昭和四年九月	18
榛名湖	昭和六年十月	18
大洗海岸にて	昭和七年九月	18
三原山	昭和八年十一月	18
みかへし	5	18
生命の頌歌		18

本文・目次

卷頭に序す	校長 大池 菅根
吾等の一里塚	東京市立雙學校
十年を語る	校長 大池 先生 (三)
春秋十年	
1 再び参たび御台臨の光榮に浴す	(二五)
一 高松宮並妃兩殿下の台臨を仰ぎて	
二 賀陽宮恒憲王殿下の台臨を仰ぎて	
三 賀陽宮妃殿下の台臨を仰ぎて	
2 本校誕生のまへあと	(三二)
3 本校兒童を世に問ふ	(三四)
一 マイクを通して全日本へ	
二 首相官邸へ	
三 華族會館に於ける實演會	
四 再び華族會館へ臨む	
五 雙教育促進懇談會へ	

十年の兒童

東京市立雙學校後援會その他

1	現在兒童通學區域(地圖)	………	(一八三)
2	在學生名簿	………	(一八四)
3	卒業生名簿とその動靜	………	(一九一)
4	兒童轉退亡簿	………	(一九四)
東京市立雙學校後援會その他			
1	後援會沿革及び規約と事業概要	………	(二〇一)
2	父兄職業別統計	………	(二〇五)
3	寄贈者芳名簿	………	(二〇七)

命題・題字
装 幀

大池先生
石黒先生

十年を語る

春風・秋雨、桃栗三年柿八年
(僱 証)

拾年を語る

校長 大池菅根先生



本邦聾教育史の横顔を描くつもりで筆をとる。

顧ると、私が本校々長の交渉を受けたのは昭和二年の十二月であつた。一日市視學山内太一君が、當時私の在職してゐた第二東京市立中學校へ來て、市の聾學校も出來てから三年、もう専任の校長が必要だから私に引受けて貰ひたいといふことであつた。

其の當時私の聾啞者に對する智識が極めて貧弱であつたことは致方がない。私の遠い親戚に加藤達君といふ聾啞者がゐた。京都の盲啞學校の日本畫科を卒業し、大阪の「みのや」といふ扇店に勤めてゐたが、明治四十二年頃病死した。此の加藤君とは親しくしてゐたし、特に大阪在職中は、よく私の宅へ遊びに來たこともあるので、聾啞者の心理は多少解かつてゐたし、その無邪氣で愛すべきことも知つてゐたが、同時に手眞似の不便なことも、筆談の甚だ厄介なことも充分承知してゐた。

私は、一度加藤君の在學中に、京都の盲啞學校の授業を參觀したことがある。(明治三十七年か)國史の時間であつたと思ふ。先生が左手に教科書を持ち右手を挙げ、目にも止まらぬ速さで五本の指をいろ／＼に屈伸すると、生徒はその意味を理解し、「よく解りました」といふやうな表情をするのを見て、無條件に感服したことを記憶してゐる。聾學校長の交渉を受けた時、先づ第一に腦裡に浮んだことは、聾啞者は嫌ひではないが今からあの手眞似や、指文

字を覚えることは大變である。手眞似、指文字に熟達して聾啞者に遺憾なく思想感情を傳へ得るやうになる迄には幾年を要するかわからない。之れは御斷りをする外はない。さう考へたので速座に辭退すると、山内視學は笑つて、否其心配は無用である。現在は「口話法」が採用されて、手眞似の必要はないのであると言はれ、私は始めて口話法なるものゝ存在を知つた譯である。

次に私の知りたかつたことは、市が何故此の仕事を私に振り向けたかといふことであつた。私は、世には、長い經驗を有するもつと適任者がある筈と思ふと述べる、山内君の言はるゝには、長く聾啞教育に従事してゐる人よりは素人の方がよい理由がある。それと君は英語部の出身だから、外國の事情を調査研究するに都合がよい。今一つ、君は大阪に十三年も辛抱してゐたし、東京では飛騨學寮の世話をしてゐるさうだから、聾學校を腰掛けにする心配は先づないと思つたからだといふことであつた。後になつて、市の銓衡方針の正しかつたことを發見して當時の市當局に敬意を表するものである。

山内視學に對しては、暫時猶豫を願つて置いて、高藤二中校長を始め、先輩や友人の五六に相談し、其の意見を參酌した結果、引受けることに決心した。其の當時の私の考は、聾啞者の生活問題を論じ、其の救済に全力を注ぐには別に人がある。私は、只私の從來學んで來た外國語の智識、心理學、教育學、音聲學等の智識を以つて、聾教育特に國語教授の改善進歩に微力を盡くさうといふのであつた。併し愈々就任して見れば、單なる學究を以て終始し得るものでないことが解つた今日、考がすつかり變つて來てゐることは勿論である。

東京聾啞學校へ就任の挨拶に行つて、始めて川本氏、山岡氏、石川(文平)氏、石川(七五三)氏、録田氏等に紹介され、種々啓發されるころがあつた。そして發令前ではあつたが、昭和三年一月の校長協會の會合に出席、橋村先

輩から始めて「聽話」といふ仕事のあることを聞かされ、骨傳導といふ言葉も此の時始めて教へられたことを覚えてゐる。

「日比谷」に行つて中澤前校長から引継ぎを受けたのは、昭和三年一月三十日であつた。

當時聾學校は七學級で、三年二學級(擔任伊東、阿部)、二年二學級(擔任石黒、岡本)、一年三學級(擔任相原、横田、橋本)であつたが、別に上野小學校内聾學級として二學級あつた。(擔任三年大塚、二年小松)各學級擔任は上記の通りであつたが外に専科としては「日比谷」の方で、水谷(音樂)、永井、小丸(圖畫、手工)、森岡(體操)の諸訓導に教授を願ひ、「上野」では福澤(手工)、市川(裁縫)の兩訓導を煩はしてゐた。

教室は、玄關脇の現在の衛生室を一年相原學級が使用し、他は全部二階で、一教室を二つに仕切つて使用してゐた。困つたのは職員室がなかつたことで、従つて終日職員同志顔を合はさぬことさへあつた。

私の最初の仕事は、兒童を早く覺えることゝ、教育の方法を知ることであつた。兒童を知ること、すぐに出來たが、教育の方法を知ること、甚だ容易でないことを之れ亦すぐに發見した。何となれば、當時の聾教育は、その全般に亘つて、單に「手眞似をするな」といふ標語が掲げられてあつたばかりで、口話法の具體の方法に關しては、名古屋市立盲聾學校に於ける多年の經驗と、その經驗に基づいた二三の原則——然も甚だ多義的な原則(讀唇先進主義、發語自然主義等)が、全國の聾教育を指導してゐるに過ぎず、その他の一切は全く暗中摸索の状態であつて、我が石黒君すら、博く讀んではゐたが、未だ二ヶ年の研究では、漸く教授法の端緒を發見した程度で、明快な説明をなし得るところには達してゐなかつた。

此の時、私の研究の參考となつたものは、邦文では川本氏著聾教育概説、橋村氏著聾教育概論及名古屋市立盲聾學校内聾部研究會著聾兒國語教授法及雜誌聾啞教育及口話式聾教育(聾口話教育普及會發行、大正十四年二月創刊)、外

國語では米國ボルタ・ビュロウ刊行及取次の聾教育關係の十數種の書物であつた。

「口話式聾教育」を創刊號から取揃へるについて便宜を圖つて下さつた橋村君、石黒君に又至念外國書をまとめて取寄せ惠贈して下さつた渡邊四郎兄に深く感謝の意を表します。

私は此れ等の文獻を片端から耽讀した。併し得るところは、聾教育の過去と現在とのみで、明日の聾教育に就いては、種々の示唆は得たけれども、直ちに採つて我が物となし得る何物をも得なかつたと言つてよい。

私は、極めて狭く且つ浅い見聞の上に、勝手な抽象的な空想的な方法を考へて見る外はなかつた、併し兒童の實際を見る毎に文字通り打ひしがれて、之れは大事業を引受けたのだとしみじみ感ぜさせられた。併しその頃、發音だとか、語調アクセントとか、種々器械的な技巧を用ひずとも、讀話萬遍、自然に息移しで出來さうなものと思つた空想の一部が、今日單文主義の中に活かされて來たのを見て今更今昔の感に堪えない。

話は前後するが、私が自分の學校を視察して、第一に感じたことは、讀唇といふことは成程可能であるが、併しそれには、教師の口形が正しく、讀み易くなくてはならぬ。その意味で相原訓導の口形は非常に良い。あれを學ばなければならぬ。それからナヤタを發音する時、舌端を少し出すのは、止むを得ない、ンの時、唇を閉ちてムとすることも、止むを得ざる必要である。ナ行の時鼻を指し、サ行の時手の甲を額に添へるのは、うまく考へたものだ等、今日から考へて甚だ非常識なことを、無條件に肯定したものである。又聾學校特有の妙な言ひ廻しも、甚だ氣になつたが之れは低學年では、言葉が足りないのだから仕方がない。漸次改めたらよいと考へた。

發語は甚だ拙くて聞き苦しかつた。之れは何とか矯正の方法を講じなくてはならぬと思つた。併しまだ卒業には、後三年もあることであるから、徐々に矯正を施せばよいと思つて、ひどく悲觀もしなかつたものである。

其の頃の聾學校の仕事で一番骨の折れたことは、教材の選擇であつた。當時未だ「國語初歩」は編纂されてゐな

つた。名古屋市立盲聾學校の國語教本はあつたが、豫料のない本校には、そのまゝ使用が出來なかつた。それに一つは兒童の入學年齢がいろいろであつたのと、一つは、現在の單文主義と言つたやうな一貫した主義方針がなかつた、め、教材選擇の標準もなく、従つて打合會を開いても、極めて大體の話合ひしか出來ず、日々の教材は、各教師の主観によつて定められ、然も無標準であつた爲め、自由と言ひつゝ、却つて甚だ不自由を感じてゐたことであつた。

上野小學校は教室には恵まれてゐた。(萬年小學校時代はバラックであつたが)鐵筋コンクリートの大校舎で、完全に一教室つゝ與へられてゐた。併し教員には不幸であつた。一番手話に熟達してゐる上に口話法の經驗もある相原訓導が、學校の統制上日比谷の方へ來る必要が生じた爲め、手話には興味は有つてゐたが、元來は口話の研究をした大塚訓導が之れに代つたし、今一人の小松訓導も手話は得意でなかつたので、主として文字を使用して指導してゐた。手話、口話、文字のコンバインド、システムでうまく行く筈はなかつた。

後援會は、當時保護者會と言つてゐた。兒童數も日比谷が約九十、上野が約四十位で、微々たるものであつたが、共通の悩みを有し、又創立當時から苦樂を共にし、學校の建設に對して協力一致猛運動をして來た父兄達の團體だけに、非常に熱のある頼もしい會であつた。その頃役員として非常に盡力された人々の多くは、その子弟の退學の爲め、現在後援會々員ではないが、學校今日の發展を喜んで下さること、思ふ。

私が就任する以前現在の假校舎は既に出來上つて居り、こゝに移轉することに内定してはゐたが、公式の通知はなく、多少の不安はあつた。一時震災後の復興基金で建築されたもの(大塚病院附屬看護婦養成所として)を新設の學校に使用してはならぬといふやうな話もあつて心配してゐる中、移轉の命令が出て始めて安堵した。

現在の校舎は、今でも保健局のもので、只増築の部分だけが教育局のものである。以前大塚病院がまだ養育院であつた頃は敷地全部畑で、一部炭團製造場であつたやうに記憶してゐる。

運動場は、舗装前は、畑土そのままで、五六月の風の強い日は、土畑が凹字形の校舎に添って渦を巻き、窓戸を閉しても教室の中へ舞ひ込んで何もかも眞黄になつた。最初の暑中休暇あけに来て見ると、運動場の一面に尺餘の草が茂つてゐた。秋になつたらバツタも出やう。踏みつけたら、その上に寝ころんでも着物が汚れないでよからうと、そのまゝにして置いたが、何分土が軟いので、草はすぐ倒れ、秋にはもう地肌が現はれてだめになつた。

大塚（實は巢鴨であるが、巢鴨と言ふては聯想がよくないので、人は大塚と言つてくれる）へ移る前、昭和三年度の入學考査を行つた。此の年は東京聾啞學校の石川（七五三二）教諭の考査によるテストを用ひ、採點及處理も同氏の指導によつた。今年初等部を卒業した椿學級、葡萄學級の生徒はその時、入學したのであつた。年齢の差が大きいので、年長組と幼少組とに別けざるを得なかつた。此の二組は新任の小川君と大野君が擔任することゝなつた。

愈々大塚へ移轉することゝなつて、上野小學校内の聾學級を新校舎に收容するか、しないかといふことが問題であつた。收容を非とする理由は、手話組があると、手眞似が忽ち傳染するので、折角口話で養成して來た苦心が無駄になるからである。當時の私は、まだ聾教育には經驗が浅かつたので、大した苦惱もなく、等しく聾學校の児童である以上、織兒扱ひをすべきでないと考えて、引取ることに決定した。そして、從來の手話組を出来るだけ口話化することに努力することゝし、新三年の一組は、風間訓導に預けて、新に口話學級として出發することにした。

手話學級を併せた冒険は、豫期された通り手眞似の傳染となつたが、併し次の理由で、その悪影響が比較的軽く済んだことは幸であつた。

(一) 手話學級と言つても、純粹の手話學級ではなく、口話をも取入れてあつたこと。

(二) 日比谷から來た口話組七に對し、上野から來たのは二組で、始めから口話組に壓倒されてゐた形であつたこと。

(三) 多少口話を知つてゐただけに、口話の出來ることを羨望思ふと同時に、手眞似を恥かしく思ふ様子もあつた。

(四) 其年の學藝會に、手話組が何もすることが出来なかつたことが、非常な刺激となり、進取的な生徒は、口話に精進するやうになつた。

五月四日移轉披露式を舉行した。市來市長、藤井局長を始め來賓十數名、式後簡単な實演をして、成績の一端をお目につけた。翌日市長室へ挨拶に行くと、市來市長は、聾教育の困難に同情し、教員諸君の勞を多とするが、あの發音は、もう少しどうかならぬものか、折角發音を教へても、あれでは聞く人に涙を催させるか、たしなみのない人なら笑つてしまふであらう。もつと普通人の發音に近づかせる必要があると語られた。

此の激勵の言葉は、深く腦裡に刻まれて、忘れることの出來ないものである。當時ではそれはたしかに無理な注文であつた。私は一言、聾兒に對する發音教授が至難である理由を述べようと思はぬでもなかつたが、この高い理想がなくてはと感じて、難有くこの鞭撻を甘受した。

昭和三年度の重なる出來事としては

一、訓導橋本イッ氏が川上姓となつて退職した。その後任に伊東富子さんを迎へたが、長く續かなかつたので、暫くの間を私が手傳つたが、今から考へると無理な點もあつたが、併し私にとつては大切な體驗となつた。

二、文部省に於いて聾學校用「國語初歩」を編纂することゝなり、川本氏の推舉で石黒訓導もその委員の一人に選ばれたが、委員中唯一の實際家として重大な役割に當ることゝなつた。

三、函館に於いて開催の日本聾啞教育會總會に私と相原、石黒の二君が出席した、此の會で、私は全國の多くの聾教育關係者と語る機會を得たが、不幸にして卓抜清新な意見を聞くことを得なかつた。却つて藤井君から聞かされた

大阪市立聾啞學校の手話の論據に啓發されるところが多かつたのは皮肉であつた。そして多くの人々の間に口話に對して一種の疑懼を懷いてゐるやうな空氣を感得して、どうしても理論と實績とを以つて、口話の優越を示し、手話論者に止めをさすことの必要を痛感した。之れが總會に於ける私の收穫であつた。

四、石黒君に頼んで、五十音の研究を始め、毎週日を定めて協同研究を開いた。此の研究は、當時研究らしい研究として非常に有益であつた。

五、二月十九日、日本聾口話普及會々々長徳川義親侯が「啞の子のものを言ふ迄」といふ題でラヂオ放送をされ、その後で實演二三を紹介した際、本校児童東條允子と千葉利夫の二人が對話「ただだよ」を、倉持利平、佐藤太郎の二人が對話「考へもの」を放送した。

此の放送は、聾口話教育の宣傳紹介には非常に有効であつた。その後今日でも、あの時に放送したのは、こちらの生徒でしたかと尋ねる人によく出會ふ。

保護者會は「日比谷」、「上野」の二つが合併した結果、後援會と改稱、會則も改正され馬場幸七氏が、最初の會長に就任した。

昭和四年度

大石、小竹、吉信の三君が新に來り加はつた。小竹訓導獨特の教授法は、當時未だ理論の洗練を受けてゐなかつたが、當時としては型を破つたものとして注意をひき、幾多の暗示を與へた。

大塚、小松兩訓導の退職によつて、神林、高島の二人が加はつた。

今日でも依然さうであるが、困るのは教員の補充である。東聾の師範部卒業者と、名古屋の講習修了者だけでは、四月の始めに手が揃つたと思つても突然の事情で缺員が出來たときその補充には相當の無理がとれない勝ちである。

今年始めて「國語初歩」が聾學校用教科書として使用されることゝなつた。本校では、生徒全部に卷一から之れを使用せしめ、既授の教材を之れによつて整理したり、又復習教材として活用することに力めた。

昭和四年度は、當校にとつては、蛻伏の時代であつたと言つてよい。名古屋の學校を手近の目標とし、速にその域に達しようとして同僚一同鋭意研究に従事した。

此の年は大和の吉野で總會が開かれた。私の外石黒、小松、横田、大野の四人が出席した。石黒君は研究題「語調指導の適當なる方法」に就いて發表し、横田君は、私共が前年の暮から鋭意調査を續けて來た國語讀本卷一から卷六迄の語彙に就いて、研究の一部を發表した。

昭和五年度

此年新しく來たものは、若生、佐々木、三上(裁縫)の三訓導で、慣例によつて二人は一年を擔任した。まだ入學志願者の年齢が揃はないので、矢張り年長組と年少組とに別けざるを得なかつた。

此年始めて初等部六年が出來、來年は愈々第一回の卒業生が出るといふので、一層緊張の度が加はつたことは言ふ迄もない。

その現れとしての重なる事は

- 一、高學年用讀話テスト、讀方テスト、算術テストの制定及印刷
- 二、學校經營案の起草
- 三、中等部新設の準備として、學則の改訂と教室の増築等であつた。

學校經營案は、日躰總會の兼題であつたが、此の機會に本校でも根本的なものを作つて置くことが適當と感じたので、六月の末か七月の始めになつて急に着手、職員一同それ／＼調査を分擔はしたが、何分日がないので、主として私と石黒の二人が之れに當り、辛ふじて熊本の會に間に合はせることが出来た。その爲め大切な目次を入れることをすつかり忘れてゐた位であつた。

此の研究は「躰教育の基調」と題し、本校躰教育研究叢書の第一輯とした。三百部刷つたが、その費用百二十圓ばかりは、東條會長及木村幹事の盡力によつて後援會で引受けて貰ふことを得た。

教室の増築は、暑中休暇中に都合よく進捗した。運動場の舗装も此の時出来た。

學則の方は、中等部を五年とする希望であつたことは勿論であるが、當時市の財政は頗る窮迫の状態であつて、四年制とすれば、市會を通過するが、五年を固守しては、成立困難とのことであつたのと、最上級の生徒は、年齢も随分長じてゐるので、早く卒業するを可と考へたので、學則は他日改訂する豫定の下に、四年制とした。

第三學期に六年生の父兄の登校を求めて、中等部の内容を説明し、入學を勸説した。

父兄の中二三の人から、中等部に普通科の設置を熱望されたが、普通科も生徒三四人では成立せず、且つ又無理に設けても、四年五年迄在學の見込がないので、之れは斷念して貰ふこととした。その代り、午前中の學科を出来るだけ多くし、午後の木工、和裁縫を希望せぬものは、帰宅して希望の職業を學ぶことを許すこととした。

此の外此の機會に豫科三年を設け、初等部六年を初等部三年に引き下げよと言ふ人もあつた。思ひきつた案として傾聴はしたが、之れに従ふ譯にはいかなかつた。

尙職業科としては、木工科と、和服裁縫科の二つに止めた。そして和服裁縫科は、和服裁縫に全力をそそぎ編物、刺繡等に多くの時間を割かぬこととした。

職業科を二種目に限つた理由は、(一)現在の校舍には、それ以上餘地がないため、(二)此等の二種目以外に、適當であると信するものが見當らなかつたため、(三)生徒又は父兄をしてそれ／＼最も適當と認むるものを眞剣に求めしめるため(學校に設けてあるが故に、適不適を考へず盲目的に入れようとする無自覺な人もある。)であつた。

三月二十二日第一回の卒業式を舉行した。

式の次第には、別に變つたこともないが、卒業生一同に記念として、證書を納める黒漆塗の木箱を與へることとしたが、之れは一つの慣例となつた。その他在學生は、送別學藝會を行つて、來賓にも見て貰ふこととしてゐる。式後生徒を指導して、謝恩會を開かせることも吉例となつた。

此年七月二日 皇后陛下には長くも東京躰學校と東京盲學校とに行啓あらせられ、親しく生徒の成績を御覽遊ばされたが、その際私始め職員一同講堂に於いて陪觀の御許しを賜つたことは無上の光榮として永久に記念すべきことであつた。

後援會の事業として、六年の兒童には、日光へ卒業旅行をさせることとした。此れは其後毎年續けてゐる。

昭和六年度

昭和六年度は、愈々本格の活躍を始めた想出の多い年である。

先づ第一に中等部が芽生えた。初等部卒業生五十一名中、三十名が進んで入學した。中等部の新設に伴つて、相原、石黒、吉信の三人が最初の教諭となり、裁縫科受持として井手囃託を迎へた。本年から府立代用を委託された結果として初等部三學級を收容することゝなつたので、前記三教諭の補充を兼ねて、新に清水、佐藤、奥田、小室の四人が來り、定員外に廣田囃託と芳賀囃託とが加はつた。一度に六人も増員を見るが如きは餘り類のない景氣のよい話で、大に發展氣分を味ふことを得た。そこで、今年から校務分掌の組織を改め(別項参照)、又別に研究部を置き、組織を立て研究の題目を校長から指定することゝした(別項参照)。

因みに聾口話普及會は、本年から財團法人聾教育振興會と改稱、本部を文部省内に置くことゝなつた爲め、從來名古屋で編輯されてゐた雑誌「聾口話教育」も亦東京で編輯されることゝなり、川本氏が編輯を主宰、石黒君始め數人が、編纂員として働くことゝなつたので、自然本校の意見や研究が、雑誌を通して發表される機会が多くなつて來た。(現在は、東京聾啞學校と三ヶ月交代で引受けてゐる。)

研究方面では、特筆すべきものが三つあつた。

第一は、此年の第一學年には、讀話先進を徹底的に行ふことゝし、其の研究と實施を擔任佐藤、伊東、阿部の三訓導に要求した。之れは、今で言ふ單語主義と單文主義の過渡期をなすもので、其の實績としては、未だ單語主義を脱してはゐなかつたし、讀話先進にも徹し得なかつたとは言へ、從來の發語偏重に對し、讀話の價値を高め、同時に發語の基礎工作としての讀話の機能に關する實驗となつた。

之れは又私の口話に對する認識の一大進歩を示すものとして、まことに愉快的想出である。

私は、始め讀話力は、學年の進むに伴つて自然に進歩し、六年にもなれば餘程自由になると豫想した。そして發語も、日々矯正されて、不斷仕上げを怠らないなら、二年三年の後には、著しく進歩するものと楽しんでゐた。然るに、就任以來、生徒の讀話發語の成績を眺めてゐるのに、私の豫想は見事にはづれ、何一つ満足すべきものを發見し得なかつた。そしていろいろ考へた揚句聾教育の基礎は讀話力の養成であり、讀話力の養成には、先づ初學年に於いて十二分の練習をしなくてはならぬ。讀話に全力をそゝげば勢、發語に費す時間が少くなる。併し發語を急ぐのでなければ心配することはない。父兄の發語偏重に引摺られない決心があれば一年間を讀話に費しても悔ひはないと考へた。勿論その時は、私に發語に關する見通しがついてゐた譯ではない。讀話のための讀話と、發語誘導を目的とする讀話と二つの態度が入用だ等いふ智識があつた譯でないが、何か良い考が出て來さうに思はれてならなかつた。

其の時である。石黒君が或る打合せの日、一學年に専ら讀話を指導して見る氣はないかと三人に提案した時、私は躊躇するところなく直ちに賛成し、三君を激勵したのであつた。三君にとつては、之れは始めての試みで大仕事であり、それだけ一方ならぬ苦勞であつたと思ふ。不幸、此の時は未だ機が熟してゐなかつた爲め、豫期の結果を齎らさなかつたが、單文主義の前驅をしたことは、大に意義のあることであつた。

第二に石黒君の語調練習表が完成したことである。

引續き之れによる同君の「發語練習の方法」と私が書いた「讀話練習に就いて」と題する一篇とを集めてパンフレットを作り、之れを聾教育研究叢書の第二輯とし、父兄全體に配布した。

此の「語調練習表」は、音聲學に本づき、機能主義によつて作製したもので、今日では、多くの聾學校に於いて採用せられ、好評を博してゐることは、實に悦ばしい。

第三は、聾教育振興會の委託によつて「綴方指導の具體的方案」を研究し發表したことであつた。此の研究は、ま

だ文字を知らない一二年の頃から繪日誌を以つて指導を始め思想の啓發につとめ、漸次學年の進むに従つて文に發展する具體案として頗る價値のあるものであつた。

昭和七年度

昭和七年度は、昨年の活躍に引續き全面的活動に入つた年で、本校の發展上最も意義のある一年であつた。最初特筆に價することは、所謂『單文主義』への出發である。此の始めての試に當つて、第一線の陣頭に立つたのは清水、風間、廣田の三人であつた。石黒教諭は、單文主義の研究主任となり、その指導者として殆んど一年間を通じて連日、おそくまで研究会を批評會を開きつゝ進んだ。それについても都合のよかつたことは、石黒教諭がこの年から中等部を受持つこととなり午後の授業がなくなつたこと、此年の入學兒童は年齢の開きが餘程狭くなつて、三組に等分することが出来、横の連絡が容易となつたことである。一方、名古屋市立から轉任して來た竹内訓導も、横田君と共に尊い経験と自己の教授上の意見とを以つて此の新しい試みを援けた。

此年、再び振興會から、「讀話成績向上方案」といふ題目に就いて研究を委託されたのを好機として、竹内、横田、清水が中心となり他に大野、大石、若生、鈴木、廣田、風間、阿部が参加し、私と石黒が總括して、命題に答へると共に、一方「雙啞教育」及び「雙口話教育」の誌上に於て『單文主義』を提唱した。

實は、其の當時は、單文主義は我が校に於いても未だ一つのモットーで、學校全體のものにはなつてゐなかつた。學校全部のものとなりきらないものを、急いで發表したことに對しての非難は謹んで甘受する。只私は、速に從來の單語主義を脱却し、發語偏重の惡弊から開放されなくては、口話の發達は到底望まれないと固く信じたので、この事

を一日も早く同志に傳へ、出来るだけ早く教授法の改善に取りかゝつて貰ひたいと念願したからのことである。發表を急いだ動機は、決して新奇を衒つたのでもなければ、先驅けの功名を争つた譯でもない。只教授法の改善のために警鐘を亂打したに止まる。實際單語主義の弊と、發語偏重の害は一日も之れを放置するに忍びなかつたのである。

岡山に於ける横田教諭の發表は、幸に同志の共鳴を得、やがて廣く全國的問題となつたことは愉快であつた。

上述の如く、突如として單文主義を提唱した結果、私共は、之れに對して共同責任を負はなくてはならぬこととなつた。そこで私共は、今年始めて試みた全校生徒讀話校長テストの成績に就いて深く反省し、之れが對策を研究することによつて「讀話成績向上方案」の再検討を數日間に亘つて行つた。

此の單文主義の提唱は本校の教育活動中、いろいろの意味で最も有意義であり、最も價値のあるものであつた。その第一としては、從來本校の教授法には、全體を統一し得る強力な指導原理を缺いてゐた。之れ迄の各自の教授法は長い間に互に接近して、餘程統一が見られるやうになつてゐたものゝ、前述の如く明確な統一原理がなかつた爲め、細かい點になると、各自、自分の経験と主觀とに支配せられ、根本的に考へなほすことも出来なければ、他の長を見ても、自己の組織に採り入れるに骨が折れ、従つて全體の進歩は、甚だ遅々たるもので、時には足踏みをしてゐるのではないかとさへ思はれたこともあつた。然るに單文主義が提唱されたからは、此れが一切の批判の標準となり、從來の教授法は再吟味されて、その功過得失が判然とわかつて來た。聽話も、リズムも新しい色彩を以つて、この組織の中に生きて來た。

兎も角、此の原理を見出したことは、本校躍進の原因として、特記しなければならぬことである。

第二としては、單文主義の提唱を機として高學年の改造が試みられたことである。單文主義で養はれた生徒を、一朝にして單文主義に改造することは不可能である。併し如何にして、單文主義の長所を採り入れるかといふことは、

獨り本校の事ばかりでなく、全国的に價値のある當面の問題であるが故に、私共は、今尙その研究に力めてゐる、中等部の生徒を、學年に關せず讀話能力によつて組わけすることにしたのも、その一つの現れである。

第三には、單文主義の研究は、やがて授業の相互參觀や、批評授業の必要を痛感せしむるに至つた。從來、同僚間に餘り喜ばれなかつた相互參觀や、研究授業も、それ以來當然のこととなり、何のこだはりなく行はれるやうになつた事は、研究上の一大進歩と言はねばならぬ。

因に兵庫の後藤巖夫君も地を距てつゝも偶然時を同うし揆を一つにして單文主義に出發し、六月以降再三の上京參觀などあつて歩調を一つにしつゝ進み、實に見事な實績を擧げた。

此の外七年度の收穫として擧げてよいものは、

一、「聽話練習教程」の翻譯 (研究叢書第三輯)

二、サイレント・リーディングの紹介(大池)(聾口話教育)

三、タドマ法とエナ法の吟味 (大池)(同上)

等であつた。

十一月三十日に、高松宮並妃兩殿下が、又一月十六日に 賀陽宮殿下が、又三月十四日に賀陽宮妃殿下が、それぞれ本校に台臨を賜はつたことは、眞に光榮の至りであつて、本校が帝都の聾學校として、其の面目を全うし得たことを衷心の喜びとしてゐる次第である。

私共は、高松宮殿下の御台臨を記念する爲め御下賜金を本として

一、記念マークを造り、之れを佩用することによつて、職員としての一體意識を高めること。

二、晝食後十分間童話を授けて、讀話力の向上を図ることを決議した。

昭和八年度

昭和八年度の仕事は、讀話單文主義の發展として、發語單文主義の研究に進み、此等の二つを併せ、「入學後第一年の學級經營案」として發表したことである。(之れは振興會委託問題の第三回目である。此の研究に主として當つた者は二學年擔任の清水、一學年擔任の竹内、それに横田が中心となり上田其他數名が加はり石黒君が之れを總括した。

此年六月末、振興會の委囑によつて私は東叟の白井君と本校の横田君とを伴ひ、東北各地の聾學校に出張して、協同研究會を開き、多少の貢獻をなすことを得た。至るところ非常の歓迎を受けたばかりでなく、私共の意見に傾聴して下さる人の尠くなかつたことは、非常に悦ばしく、又心強く感じたことであつた。之れ全く同僚諸君の不斷の努力によつて、校運が隆昌し、その背景を負ふてゐる御蔭だと眞に難有く感じたことであつた。

此年青森盲聾學校の委託により、一ヶ年間に亘り、研究員嘉瀬敏子女史を指導した。

昭和七八年に亘つて、私の頭を痛めたことは、職員の健康に就いてはあつた。聾教育は非常な努力を必要とする。病氣の時、聾兒と十分間話して見たら、ひどく疲労を感じるであらう。健康體だとして、決して樂な仕事でない。特に低學年を擔任し、日夜その指導に心血を濺いでゐては、餘程頑健な人でなくては、やがて疲労を感じ、その疲労のすきから病氣にならぬことを誰が保證出來やう。實際健康を損する人の少くないのに一番頭を痛めてゐる。

併し研究は一日も忽せにすることは出来ない。遅進児の爲めには、課外の指導もしなくてはならない。先づお互に氣を朗にもち、相戒しめあひ、つまらぬ心配をしないやう、出来るだけ必要のない事に頭を悩まさないで、専ら精神力の節約に力める外はない。

父兄方にもお願いする。教師の全力を児童の爲めに使はせて下さい。その他の事で、教師の頭を痛めないやうにして下さいと。

昭和九年度

多年要望の東京府立が漸く開設の運びになつた。市内に今一つの仲間の學校の出來たことは心強くもあり、將來の協同研究の上に大なる便利が加はつたことで、慶賀の至りであつたが、一面本校の竹内若生の兩君を割愛しなければならなかつたことは、小さからぬ痛手であつた。その補充としての中野、指原の兩君の來る迄には二ヶ月を要した。こゝでも又教員の拂底に悩まされたのであつた。

併し今や陣容も全く整ひ、児童二百六十、職員三十五といふ大學校となつた。

帝都の雙學校としてその眞價を發揮するのは之れからである。

私共は、此の記念祝賀式を以つて第一期工作の完了の道標とし、明日からは新らたなる第二期の活動にかゝらうと意氣込んでゐる。

第二期の目標として、今私の考へてゐることは

一 教育の實用化

二 發語指導法の研究

三 雙學校に於ける各科教授法の研究

四 常識の養成

五 職業科の研究

六 豫科の設置

七 校舍新築の促進

等である。元來雙教育は氣長な教育である。桃栗三年柿八年、樹木の成熟にも一定の年數は必要である。ゆつくり構へて、粘り強くやつて行きたい。

春
秋
十
年

- 1 再びみたび御台臨の光榮に浴す
- 2 本校誕生のまへあと
- 3 本校兒童を世に問ふ
- 4 研究十年

高松宮並同妃兩殿下の台臨を仰ぎて

東京市立聾學校長 大池 菅 根 謹 記

すめらぎのいろとのみことおほけなく
吾がもる子等をみそなはしけり

こと終へておのづから目になみだいづ
今日の生日はうれしきかもよ

昭和七年十一月二十八日午後五時近く、藤井教育局長からの電話によつて、思ひもかけず、三十日の午後、高松宮並に同妃殿下が當校へ御台臨の由を承つた。

高松宮兩殿下には、去る十一月十八日、身體發育異常児のみを收容教育してゐる東京市立光明小學校へ台臨遊ばされた。此の事を知つた私共一同は、或は他日當校も同じ光榮に浴することが出来はしまいかと、心ひそかに祈らないではなかつたが、早くも此の恩命に接して感激措くところを知らなかつた。

間もなく打合せの爲來校された藤井局長の話によれば殿下には、當日、殿下の特別の御思召を體し、水上協會が、水上生活者の子弟の義務教育のために設立した東京水上小學校を御視察遊ばされ、更に遠路御厭ひなく、果鴨の當校を御視察遊ばされる由

で、殿下が御日常國民教育に深く御心を注がせられることは洵に感激に堪えない次第である。
二十九日、始業に先ちて職員會を開き、先づ此の光榮を一同に傳へて喜びを新にすると共に、各自の分擔を定めて奉迎の準備に遺漏なきを期した。

私は正午一切の計畫をまとめて、教育局に出頭、更に芝區伊皿子なる宮邸に參上、石川別當に面會して、諸種の打合せを致せし際、平常のまゝの授業を御台覽願ひたき爲、日々熱心に附添ひ來る父兄はそのまゝ、教室に居る事を、特にお許を乞ひ、川本氏著「聾者と其の教育」他に「聾兒をもてる父兄へ」及「聾教育振興會事業概要」を奉呈して、豫め御覽を御願申上げて置いた。此の間學校に於ける準備は、職員一同及附添ひ父兄たちの努力によつて着々進められた。兒童、生徒は、手足のやうに働いて、日頃の訓練の結果を示したことは、是れ亦喜ばしいことの一つであつた。

十一月三十日は、殿下の御成を奉迎するに適はしい快晴であつた。小石川、豊島兩區役所の好意によつて、辻町からの御通路はすつかり手入れされ、狭いながらも、敷きつめられた豆砂利に面目を一新した。

午後二時を過ぐる十五分、兩殿下には、職員、兒童、父兄、其他市當局者の奉迎裡に、校庭に御着、直ちに階上の御休憩室に御案内申上げた。菊池市助役、府學務部長、市學務委員長、市學務課長それら、拜謁後、私も亦拜謁を賜はり、且つ御菓子料御下賜の恩命を拜したので、謹んで御禮を言上し、且つ此の恩寵は、獨り我が校の光榮に止まらず、我が國聾教育全體の光榮である旨を申上げ、續いて聾教育一般及當校の概況に就いて御話申上げた。

此の時、侍立してゐた永田市長は、振興會の事業と會長徳川侯爵の熱心について、申上ぐるところがあつた。

右終つて、中等部裁縫科教室から始めて、順次中等部工藝科教室、參考品陳列室、二學年遊戯、五六學年合同體操一二學年讀話、三學年發語、手工、四學年話方、算術、五學年書方、六學年地理及中等部一學年讀方の授業を各二三分づつ御覽に入れ、最後に、講堂に於て學藝會(三種)の台覽をお願ひした。

兩殿下には、始終、熱心に御覽になり、御案内の道すがら、次から次へと種々の御下問があり、一々御説明申上げたことであるが、特に單文主義に出發した一學年の讀話の自由さと、中等部一年の口形を被ふての讀話及タドマ法の實際を御覽になつた時には、殿下には聾兒の讀話の力に頗る御感深くあらせられた。そうして聾兒は讀唇に當つて、如何にして聲の有無を判別し得るかといふ御尋ねがあつた。

最後に、聾兒等が御豫想に反して、一般に明るく朗かであることに就いて御満足の旨仰せられ、畏れ多くも「ありがたう」といふ勿體ない御言葉を賜つて、御機嫌麗しく、三時半御歸還になつた。御歸還の折、別當に託し當校の研究叢書三種及「綴方指導方案」を奉呈した。

此の日兒童の歡喜は、非常なもので、翌日課した綴方の中に「今迄こんなには有りがたく嬉しい事はありませんでした」「とても嬉しかった」「本當に涙が出る程ありがたいと思ひます」「僕は『名譽なことだ』と言つて其晩はいつもよりもうんと勉強しました」「本當に名譽なことで、私達は幸福者です」「此の御恩を忘れてはならないと思ひました」等、とりぐにそのうれしさを披瀝してゐた。

まことに光榮の一日であつた。

賀陽宮恒憲王殿下の台臨を仰ぎて

大池 菅 根 謹 記

昭和七年十一月、畏くも高松宮並同妃殿下の台臨を仰いだ我が校は、新春劈頭、(昭和八年一月十六日)更に賀陽宮

殿下御視察の光榮を荷ふことゝなつた。

もれ承るところによれば、賀陽宮殿下には來る三月末外國に於ける教育狀況御視察の爲御渡歐遊ばさるゝ御豫定の由、之れに先だち府下及近縣の特色ある諸學校を御覽遊ばされたく御希望にて、其の選擇を文部省に御命じになつたとのことであつた。文部省に於ては、東京市内では、女子師範學校、府立工藝學校、第一東京市立中學校、窪町小學校、大宮小學校及當校を選定して御視察を願ふことゝなつた。上記女子師範、窪町小學校及當校は互に數町を距て、同じ町筋に並んでゐるので、御視察の便宜が考慮せられたことゝ察せられた。

當日の御豫定は、午前九時御出門、先づ當校に成らせられ、十時迄御視察のことであつた。それで當校に御止りの時間は、僅に四十五分であるので種々御覽に供し、又御説明申上げたいこともあつたが、割愛して、左記の次第により御視察を仰ぐことゝした。

- 一、中等部和服裁縫科實習
- 二、中等部工藝科實習
- 三、初等部第五、六學年（體操）
- 四、初等部第二學年（遊戲）
- 五、初等部第一學年（繪日誌、積木、油土、手工）
- 六、同 上 （數觀念、リズムの指導）
- 七、同 上 （普通授業）
- 八、初等部第二學年（發語指導……手鏡使用）
- 九、初等部第六學年（圖畫）

- 一〇、初等部第四學年（發語矯正指導……大鏡使用）
- 一一、同 上 （讀方……卷六 鮭について問答）
- 一二、中等部第一學年（口形を被ふて讀話、タドマ法）
- 一三、學藝會

- 1 私達の學校 第二學年以上見童七名
- 2 ダンス 中等部女生徒五名

尙聾教育の詳細は、到底申上ぐる時間の餘裕がないので、此度も宮邸へ參上、川本氏の『聾者と其の教育』及『聾兒を持つ家庭へ』を奉呈、豫め御覽置きを御願ひ申上げ、當日は、上記のパンフレットに述べてないことで海外に於ける聾聾教育御視察上御參考となるべき點のみ申上ぐるに止めることゝした。

扱て愈台臨の前日となつて、私共は思ひもよらず悲しいことを耳にした。それは妃殿下の御父君九條道實公かねて御病氣の處、遽に重態となられた爲、妃殿下の台臨は急に御取止めとなつたことであつた。そうして宮殿下御着の時刻も豫定より一時間遅れることゝなつた。殿下が深き御憂慮の中にも拘らせられず、又御疲労をも厭はせられず、御豫定に従はせられた御事は、眞に恐懼に堪へない次第であつた。

光榮の當日は、まことに麗かな好晴であつた。殿下には先着の武部普通學務局長、藤井東京市教育局長、篠山東京府學務課長を始め職員、生徒一同奉迎裡に十時二十分御着、武部局長、安原學務部長、藤井市教育局長、篠山府學務課長、二階視學官拜謁後、校長より聾教育に就き簡單に言上、直ちに御巡覽を御願ひ申上げた。

殿下には一昨年、大阪聾口話學校に台臨あらせられたので、斯の教育に關しては、既に御承知の御事と拜察した次第である。それで各教室に於ける兒童の發語については、特に御注意遊ばされ、音聲の明瞭なものに對しては、甚だ

御満足の御様子を拜し、不明瞭なものに對しては、御憐愍の眼を注がせられたのは、まことにありがたい極みであつた。又當校の高學年には、多數學齡超過の生徒があるので、此の點嘗つて御覽になつた大阪聾口話學校と様子が異つてゐるのに御氣付き遊ばされた爲か、生徒の年齢について特に御尋ねになつた。

御豫定の短い時間に、御巡覽が終るやう苦心した甲斐があつて、各教室僅に二三分づつではあつたが、御覽に入りたいと思つたことは、全部御覽に入れることを得たのは、大なるよろこびであつた。

かくて御視察は、無事終了、十一時御發、一同奉送裡に窪町小學校へ向はせられた。

此の日の御視察は、御外遊に先立ち、我が國の教育の狀態を御覽置きになる爲と拜承した時、私共はその責任の大なることを痛感した。殿下の御視察を賜つたことは、之れを單なる光榮として喜ぶに止つてはならぬ。眞に有難い御鞭撻として更に一層眞剣な努力を以つて、之れに對へまづらなくてはならぬ次第である。

賀陽宮妃殿下の台臨を仰ぎて

大 池 菅 根 謹 記

一月十六日、賀陽宮殿下が、當校に台臨遊ばされた折、妃殿下にも御成りの豫定であらせられたのが、圖らずも御父君九條公爵の御病氣が重態であつた爲、遂に御取止めとなつたことは、私共一同の深い失望であつた。

然るに二月二十八日、突然市教育局を通して、賀陽宮妃殿下には、かねての御思召通り、三月十四日本校及び東京府立第一高等女學校、東京市常盤尋常小學校、同大富尋常小學校の御視察を仰せ出された趣を拜聽して、私共は我が

校の重ねの光榮を感佩すると共に、不幸なる兒童に對する皇室の深い御恩寵に感奮措くところを知らなかつた。

當日の御豫定は、午前九時三十分御出門、九時五十分本校御着、十時四十分の御發であつた。時間は充分とは申し兼ねるので、出来るだけ割愛し、左の順序によつて台覽を仰ぐこととした。

- 一、 中等部裁縫科實習
- 二、 中等部工藝科實習
- 三、 初等部第一學年讀話（清水訓導）
- 四、 同 第二學年發音練習（伊東訓導）
- 五、 同 第三學年サイレントリーディング（若生訓導）
- 六、 同 第四學年算術（大石教諭）
- 七、 同 第五學年口頭綴方（大野教諭）
- 八、 同 第六學年聯想テスト（横田教諭）
- 九、 中等部第一學年讀話、讀話——口形を被つて讀話、觸話法（石黒教諭）

當日は、前日の兩名残りなく齊れて、風稍寒むかつたが、春光駘蕩、御台臨に適はしい日であつた。先着の武部普通學務局長、藤井市教育局長始め一同校庭に整列して御待ち申し上げてゐると、豫定の時刻より稍早く御着になつた直ちに御休憩所に御案内申上げ、簡單に躰教育一般に就いて御説明申し上げ、詳細は各教室に於て申上ぐることにした。かねて皇族御附の人から、宮様方に對しては餘り聞かないで、進んで詳細に申上ぐる方が良いと承つてゐたこともあるので、此の日は、御尋ねを待たず、其の場其の場で委細御説明申し上げた。従つて、殿下の御感想を拜聽する機會はなかつたが、中等部の裁縫實習、一學年の讀話、中等部一學年の讀話、觸話には、特に長く御止りになり兒童成績品中一學年兒童一同の描いた高松宮殿下及賀陽宮殿下台臨の記憶畫は御氣に召したやうに拜見した。

本校の誕生のまへあと

1

〔東京朝日新聞〕 大正十四年三月二十七日記事

東京市で今度をはじめ開設する聾啞學校は明日中に公告されるはずであるが、東京市がこの學校を日比谷と萬年町に開く事が、地方に知れると、各地方から續々と移住する聾啞兒童を持つ家族があり、如何にこの種の教育機關が缺けてゐるかを語つてゐる。

即ち東京市へは毎日聾啞兒童の入學申込みがあり、一學級二十人の豫定の所へ八十人からの申込みがある。

大體、聾啞者は醫學上の統計に依ると一萬人に七人あり、東京市に千四百人はある見込みであるが、兒童はその一割の百四十人なるべきに地方からの移住者の爲め既に満員となつてゐる。

しかし、この世にも氣の毒な不具者の矯正は十分可能なので、東京市學務課ではなるべく多數を入學させる豫

定であると

2

〔東京朝日新聞〕 大正十四年四月二十日記事

既報の如く市では聾啞兒童の爲めに特殊教育を施すこととなつたが、いよいよ五月一日から麹町日比谷小學校内に聾啞學級二學級を男兒三十一名女兒二十五名を收容する筈である。

現在市内の聾啞兒童は、三百以上に達する見込であるが、東京聾啞學校の外教育するところがなく、然もこゝでは十四歳以上の者と制限されてゐるので不便が多かつた。市では藤井學務課長就任以來、特殊教育の改善を圖る事となり、取あへず今年度から聾啞兒の爲め學級を編成したが、行く行くは獨立した聾啞學校盲人學校をはじめ、不具者の特殊學校をも始める事になつてゐる。

五月に入學する聾啞兒童中には七八歳のものもあれば十五六歳の者もあるが、年とつた者には視話法では教へにくいので、手まね足まねで教へねばならぬといふ。

教師には小松伊四郎氏外一名が任命されるはずであるが、来る二十三日午前九時から入學兒の身體検査を行ふ事になつてゐる。

3

〔東京朝日新聞〕 (誕生してより十ヶ月目の記事)

大正十五年一月(實地授業の寫眞入)

一切の音から隔てられた氣の毒な聾の子供は、出産兒一萬人に對し七人も居る。それが殆んど續く遺傳で、一生物言ふ事を許されなくて暗い人生を送つてゐるが、聾は絶對的に不治なものでなく、適當の矯正法さへ行へば發音する事が出来る。

x

ところが、この矯正教育機關としては東京聾啞學校一つあるだけなので、入學の希望者全部を收容することが出来なかつた。

そこで日比谷小學校では、昨年五月から初めて、同校管内の聾の兒三十八人——八歳から十四歳まで——を收容して同校の一部で矯正教育を行つてゐるが、その成績は非常によく、入學十ヶ月後の今日では、日常使用する「お早やう、さよなら」から身邊の雜事を辯ずる品物の名詞は言へる様になつたので、いよいよ四月から現在の學級を獨立して、別に學校を設けることになつた。

同校は豫科二年、初等科六年、中等科五年で、之だけやれば一語も言へなかつた者も普通人と少しも變る所なく話せるばかりでなく、中等學校卒業と同等の常識を得られる。

新校舎の設立地はまだ決定してゐないが、當分は日比谷小學校の一部で授業するさうで

『入學期はなるべく子供の時がよろしい。十ヶ月前に一語も言へなかつた三十八人が、今は五十音の發音が出来、内三人ばかり母音だけは聴く事が出来ます。』

『本校は月謝無料で、来る四月には更に四十人を收容出来ると思ひます』云々と。

本校児童を世に問ふ

賜 天 覽

寫眞 一點 山茶花學級〔直觀教授〕
圖畫 一點 終學級〔靜物寫生〕

辱けなくも昭和三年十一月二日、聖上陛下御大典の際、本校第四學年ひいらぎ學級遠藤理夫の圖畫成績品「ピンとコップ」の靜物寫生一點及び、第三學年さぐんか學級児童が校庭の一隅で直觀科の指導をうけてゐる寫眞（口繪寫眞十頁参照）一點、天覽を賜ふ。この光榮は永く吾校の青史を飾るものである。

マイクを通して全日本へ 昭和四年二月十九日 JOAKより

十九日の晩、東京中央放送局より全国のラジオ・ファンへ、東京市立聾學校と東京聾啞學校の愛らしい小供達が日本の聾啞教育とはどんなものか紹介する——と云ふ實に涙ぐましい世界の最初の實演放送をやると云ふので、十六日の午後二時から聾口話普及會長の徳川侯爵邸で、その豫習が行はれた。

美しい廣い應接間に通された可憐な啞の子達は、一人々々侯爵の前に出では「コンニチワ」と輝きに充ちた顔から本當にアツクない聲で挨拶をした。氣輕な侯爵は絶えず慈父の如く、暖かい笑を浮べてはうなづいてゐられたのは眞に麗はしい情景であつた。

受持の石黒先生が速席に「今日は」と話し出すと一人の少年が後をついで「學校を了へてから」と繼げば、一少女が「徳川さんのお邸へ来ました」とすら／＼と答へる……扱四人目の少年は何と結ぶかと思つたら「龍宮の様に美くしいお家です」と結んだ。期せずして侯爵はじめ人々の口から涙ぐましい昂奮と笑ひ聲が涌き起つた。何と云ふ純な表現であらう。

この啞の子達は、もとより耳では言葉が聞えないので話す人の唇に最も注意して、何んと云つたかを知らうと努力するのである。言葉を聞くのでなく見るのであるから、その努力はほんとうに眞綿なもので、見て居る人々の心は知らず／＼緊張して来る。一年生ぐらひの子供は、ミミとかメとかクチとか云ふ單語はよく覚えて極く簡単な會話は誰とでも出来る。さきほど自由會話をやつた子達には、石黒先生が自身の口を本で隠してしまつてさへも頬の極く僅かな動きを見ただけで判るではないか。その神技にも近い、この子供達の努力の前には誰も讃嘆を惜まなかつた（都新聞掲載）

都下の大新聞である東京日々新聞、東京朝日新聞、時事新報、報知新聞、國民新聞、讀賣新聞、中外商業新聞等は、一齊に、その豫行演習の寫眞を載せ、その模様を詳しく報道して——世の不幸な啞の親よ、子よ、なげく勿れと呼びかけて、無明の世界に一道の光りを點すべく、徳川侯爵は、マイクの前に『啞の子が物を言ふまで』と云ふ題名のも

とに十五分間講演される旨が掲載された。
當日、本校よりは第三學年ひいらぎ學級の生徒四名が、學校を代表して出演した（當時は未だ最高學年が四年生までであった）

だれだよ（對話劇）

東條 九子

千葉利夫

考へもの（對話）

倉持利平

佐藤太郎

午後七時二十五分。スイッチ。「私は只今紹介をうけました徳川で御座います。暫く皆様方のお耳をお借り致しまして……………」と流れ出る言葉。

大成功裡に放送も終つて記念撮影（口繪寫眞参照）

首相官邸へ

昭和五年六月六日

「先生、こんな大きな家に何人住んでゐるのですか」

「先生、運動場はみんな芝生ですね」

「先生、この家賃はいくらですか」

「濱口さんはこゝに一人居るのですか」

「夜、戸を締めるとき何時間かゝりますか」

別室で開催中の定例閣議が了るのを待ちつゝ無理もない四年生の子供達の矢張り早やの質問である。首相官邸大ホールを、廻廊を、物珍らしげにあち、こち眺めまはつてゐる子供達。

x

その日の市内の大新聞の夕刊に又翌朝の新聞には一齊に詳細な記事が掲載され、又本書口繪寫眞（十三頁）が載つた。

社會から見棄てられ一滴の涙すら注がれてゐない數萬の不幸な學齡兒童を就學せしめ、教育を施し、學業を授けたい一念で徳川侯爵、田中文相、阪谷芳郎男等が發起となり、首相官邸の大ホールで、本日午後二時より朝野の名士を招いて雙口話の實演が行はれた。

その主なる出席者は、田中文相、徳川侯、阪谷男、吉岡、嘉悦兩女史、土方日銀總裁、有賀長文氏、服部時計翁等政界財界の名士八十餘名の盛大なる會合であつた。先づ、篠原普通學務局長の開會の挨拶がすむと愈々兒童の實演に移つた。

東京聾啞學校の幼稚園の生徒の勉強状態を皮切りに、東京市立聾學校の三年生の對話『だれだよ』と云ふ考へものがあり、次で同校四年生の兒童劇『正直な樵夫』があつた。お互ひに耳の聽へぬ聾兒同志が、相手の唇の動きを見つけて斯くまで自由にそして又かくまで明瞭な會話が交換出来るものと列席者を感じさせた。なほ此の日、永年家庭で聾教育を授けられた西川吉之助氏に連られて、目下普通の女學校に勉強中の濱子さんが、『女學校に入つてから今日まで』と題して、感想を何の淀みもなくすらすらと述べられると、田中文相はハンカチを出してそつと眼鏡をふく。來賓の婦人達はもう眼を眞ッ赤にしてたゞらつむいてしまつた。

感激の拍手の中に會が終りに近づいた頃、上背の安達内相がつかくと『正直な樵夫』をやつた吾が校兒童の傍に來られて、「大層上手に出来ました。しつかり勉強して、立派な日本人になつて下さい」と懇ろに訓され、又、受持

先生に向つて「不幸な子供達のため、献身的な努力を感謝する。どうか折角體を大事にして呉れたまへ」と述べられた。

因みに出演児童は

「だれだよう」
「正直の樵夫」

山茶花學級 廣田 章
終學級 千葉 利夫

戸邊 眞一
遠藤 理夫

東條 允子

x

〔別記〕 同月の終り、三井本館にて三井合名會社長三井八郎右衛門男、團琢磨男をはじめ三井の同族多數の前で吾校児童は指ヶ谷校児童と共に實演會を開催した。

華族會館に於ける實演會へ

昭和四年十一月四日午後六時半より華族會館に於て、振興會主催の嬰兒の實演會が行はれました。

當日、吾が東京市立聖學校のほか大阪(聖口話校) 名古屋、東京(官立)二校の児童生徒並に西川瀧子嬢出演、朝野各方面よりの多數の來會者があり、盛會裏に一同に對して多大の感銘を與へました。

我が校よりの實演は、二年の葡萄學級童話劇「狐と虎」で十一名の出場それと四年終學級の兒童劇「朝から晩まで」でこれ又十名の多數出場でありました。それに案内として出場した児童もあり、その實演振り、その案内振り、とも

に／＼朗らかにして、又お辨當をいたゞく時の態度、閉會後徳川家よりのお茶の饗應を受ける際の無邪氣さ、又侯爵夫人御自身で御出掛けになつて求められたといふ記念品をいたゞいて喜ぶ時の様子、これが不幸な嬰兒かと、今更來會者の中には、教育の力の大なるに驚かれた方々もありました。

實演會終つて、記念撮影をして散會となつたのでありますが、本實演會は、貴族院議員田所美治氏の開會の辭、徳川義親侯爵の閉會の辭、その間西川吉之助氏の「本邦聖教育の現状」と題する講演等、振興會創立の準備工作としてのそれであつたので、日本聖教育上少くとも歴史的或る意味を持つ相當社會的に反響を及ぼした會でありました。

再び華族會館へ臨む

聖教育振興會發會式の兒童實演會

昭和六年 四月 廿七日

我が國に於ける學齡中の嬰兒數は三萬餘を數へると云ふに、現在就學嬰兒數は四千名餘、その學校數は五十二校で未だ聖教育の徹底を期し難い状態にある。そこで聖教育の振興及口話法の普及發達を圖るため、徳川義親侯を會長とする財團法人聖教育振興會が組織され、その發會式は四月廿七日午後二時半から熾葉さゆらぐ華族會館で舉行された。午後一時、先づ車を寄せた東京市立聖學校の兒童のうち、初等部六年生の女兒數名が應接の位置につき、さうして續々來會される賓客を迎へて『よくおいで下さいました、どうぞこちらへ』と案内する。その應接振りは今日の發會式に本當に相應しい最初の印象を與へるのであつた。徳川侯のお出になつた時などは『徳川さんが——』と走り寄つ

て「今日は」「ごきげんよろしう御座います」などと懐しさうに挨拶する子供たちの喜び、それにまた、その子供たちが全く可愛い面持で應ぜられる侯爵の様子、傍に見る目でさへも嬉しくてたまらなかつた。

來賓の中には、元文部大臣水野練太郎、同夫人、徳川侯夫人、侯爵大久保利武、前日本女子大學校長藤生正蔵、貴族院議員阪本彰之助、文部次官中川健三、東京女子高等師範學校長吉岡郷甫、帝國大學醫學部長森春雄、文部省圖書局長芝田徹心、文部省實業學務局長木村正義、内務大臣代理山崎巖、宮内大臣代理川西文夫、慶應醫科大學教授醫學博士藤浪剛一、文部政務次官横山金太郎、その他評議員會出席の名流夫人等數十氏に及んだ。

會は徳川會長の辭によつて開かれ、次いで宮内大臣、文部大臣、内務大臣の祝辭があつた。

さて兒童實演會にうつり東京聾啞學校豫科第一學年の入學當初教授實況、同校初等部三年の兒童劇「舌切雀」、同校初等部五、六年の對話「おもひやり」日本聾話學校初等科第二學年のピアノに依る音律練習、西川濱子さんの感想「あるお伽話を讀んで」と東京市立聾學校の左の二つであつた。

1 初等部第三學年兒童の算術教授 (擔任 大石先生)

讀話により一兒童の出題に應ずるのであるが、加減乗除の事實算を自由に解答しました。最後の加法練習で、華族會館の上り口から式場へ入る迄の階段を計算して「皆さん、今の答へがよろしいか、いけませんか、お歸りのとき階段を數へてみて下さい」と言つたときは流石に満場は拍手と笑ひで賑はつた。

2 初等部第六學年兒童の對話 (擔任 石黒先生)

「樵夫と狐」の兒童劇を實演する筈だつたのであるが、生憎兒童に缺席があつたので豫定を變更して考へ物の對話となつたわけである。唐突の實演にも拘はらず無理もなく、本當に氣持の良い出來であつた。友達から「考へ物」に困らされる。そして今度はその復讐をする。ある友達から教へられた通りを試みて見事仇は報いたものゝ、さて兎を脱

いだ相手から答は？ と聞かれて「しまった、それは聞かなかつた」と大慌てに先の友を追つて駆け出すその滑稽さはとても人々を悦ばせた。

閉會の辭は篠原副會長。一同は記念撮影を終つて、別室に茶菓を喫し乍ら盛んに兒童實演の感想を洩らされ、感歎する者もあれば、又教師の努力を歎賞する聲で非常に賑やかであつた。

聾教育促進懇談會へ

鈴木内相、鳩山文相、藤沼東京府知事を中心として
昭和七年五月十二日華族會館にて

青葉の青さに五月の雨は煙る。

茲は高壯なる華族會館の二階の廣間——その窓に收められた眺めはあのブラマンクの描いた風景畫の様な靜かさ。

今日の來賓、鈴木内相、鳩山文相をはじめ藤沼東京府知事、富田社會部長、東京府學務部長、藤井東京市教育局長、武部普通學務局長等の朝野の貴賓、大池校長も交へて二十三名。懇談の内容は標題の通り、聾教育の促進を中心に就學、東京府立の設立の件などに就て隔意のない意見が交換されました。

會後、兒童實演會があり、本校のほか、東京聾啞學校兒童も參加しました。

來賓一同は「あゝ骨の折れる、努力を要する教育だ」「成程こうして教へるのか」と始めて知る聾教育への得心の言葉を洩らされました。殊に今日の實演プログラムの最後を引きうけて吾校の鈴懸學級の兒童五名が、十月一日から實施される「大東京」に就て自由會話を試みました。五名の兒童が負けず劣らずの五分間——「こゝまで出来る様になると占めたものではなア」と無意識のうちに發せられたのは確か安藤政務次官と見受けました。之は等しく來賓の心にも涌き出した思ひだつたでせう。話つゞけて來た一人が後をふりむいて「石黒先生！ もつと何かお話しませうか」と問ひかけた。そのほゝえましい情景に釣り出された田所閣下が、子供達の前に近づき、一人一人に色々と熱心な質問バツ／＼と答へる子供達。

先程から正面のテーブルに兩腕を載せて、まるで胸像かと思はれるまでにちつと話を傾聴して居られた鈴木内務大臣の拍手に、涌き起つた満場の拍手とどよめきは今だに髣髴として居ます。

斯くして、今日の會は終りを告げ、出演の兒童達は夫々土産にお菓子を戴いたほかに、もう一つ徳川侯、武部普通學務局長から「御苦勞さまでした」「大變上手に出來ました」「もつと勉強して下さいよ」といつに變らぬ御言葉を戴いて外に出ました。

外は雨も晴れ上らうとする氣配を雲間に見せて、心地よい五月の微風が青葉の雫を揺りおとして居ました。

聾 兒 座 談 會

1 東京朝日新聞社主催

昭和七年六月の末であつた。突然に、東京朝日新聞社の記者數名が來校されて、何とか聾兒の座談會を行つてみて呉れませんかと云ふ注文である。早速に「ひいらぎ學級」のクラスで、石黒先生を中心に所謂『聾兒座談會』が試みられた。傍で速記してゐる記者までが遂釣り込まれて、話は盡きず、興味は昂まりゆき、果ては新聞記者の質問攻めは聾兒からの總攻撃と變り「映畫の中で俳優がお互ひに話し合つてゐるのが解るか」「それちあ省線電車の向ふ側に腰掛けて話し合つてゐる、その話がこちら側の席からわかるか」「ではあなた達は硝子戸越しに話が出るか」……と巨弾が飛んで新聞記者の方から、この邊で幕の要求。

2 聾教育振興會主催

明日は（昭和八年二月十六日）座談會が聾啞會館であると云ふ日の朝だつた。朝刊を擴げると『聾啞教育に一新紀元を畫す』と二號活字の大見出しではないか。（何か又わけのわからぬ聴覺刺戟器のハナシかな）と。……次の四號の見出しを注視すれば、可憐なる聾啞生ばかりで談話會を開くとある。

その日、本校よりは、六年生が代表して「もくせい學級」より加藤ふみえ、「ひいらぎ學級」よりは倉持利平、遠藤理夫、佐藤太郎、國廣通子の四名が出席、その他、指ヶ谷校より數名出席して傍聽者大勢に圍れた中で圓座となり『お正月』を中心として數時間を夢中で大いに談ず（聾口話教育昭和八年三月號の内容記事及び本書口繪寫眞參照）後で、蓄音器吹込み等ありて、ミカン、オシルコ、センベイ等の御馳走ありて盛會裡に夕景になつて散會。

3

第二回目の座談會はその年の九月廿四日午後二時より「夏の休みのお話」と云ふ題で大賑ひ。（東京朝日新聞に寫眞

と共に記事掲載)

聾兒の爲めの集ひ

聾教育振興會後援會主催で、第一回の『聾兒の爲めの集ひ』が六月三日(昭和八年)午後六時から丸の内仁壽講堂で催された。

會するもの實に一千餘名、満場立錫の餘地は更らにない大盛會。會なかばに徳川侯爵は自から壇上に立つて、嘔と云はれた薄倅の聾兒を教育するのに口話法を以つてせよ。嘔と考へられ、物言はざる子と見做されてゐた聾兒は斯く語り斯く話すことが出来るのであると強調され、兒童の實演をもつて立證された。

この夜本校よりは初等三年高田かつゑ、が挨拶した。

音聲學協會へ 昭和八年六月十日

吾が國に於ける唯一の然も權威ある『音聲學協會』より、豫ねて研究發表を依頼を受けて居りました當校は、第二十九回研究例會が帝國大學の山上御殿で開かれた折、石黒先生にその發表を願ひました。

當日、出席された名士は小倉進平氏、神保格氏、石黒魯平氏、東條操氏、松坂忠則氏、三宅武郎氏、石黒修氏、外山高一氏、伊地知純正氏、大西雅雄氏等の専門家を始めとし、斯道專攻の學徒も加へての集りで、歐米視察より歸朝された伊地知早稻田大

學教授の「言葉と旅行」と云ふ御講演にひきつゞき、石黒先生の發表がありました。
今、その發表内容の抜萃を「音聲學協會會報」より轉載すれば、

x

現在我が國には聾啞兒を教育する學校が七十一あり、收容員数はほぼ四千人。その九分九厘迄は談話法により、手眞似でしてゐるのは一、二校に過ぎない。

東京市立聾學校は八年目で、現在二百五十四名を收容してゐる。統計によると聾啞者は一萬に四、五人との事だが實際は七十名位ありはせぬかと思ふ。本校毎年の應募者は百を超へるが、四十名位しか入學させられない。この兒童たちは第二第三の學校といふのが無いから、落ちると翌年迄は入學出来なくなる。

今はこの子達に特別な教科書が1—6巻あつて、四年位から普通の小學校一年に準じた教育をする。

文字の成績は良い。カナモジよりも象形的な漢字の方が尙良い。發音はカサハ三行が最も難かしい。餘事乍ら、聾者で畫家になつてゐる者の言によると、靜物なら人に負けないで描けるが、風景は駄目で、風韻とでも言ふものが少しも感じられない相である。又この子たちに映畫を見せると、田中絹代の言ふ事が最もよく分つて、言葉と動作と一致してゐる。及川道子、川崎弘子などこれに次ぎ、栗島すみ子は他の事を口にし、市川右太衛門の發音が最も悪いとの事である。

x

解説かたがた色々な實驗をせられ、聾兒と會員との會話などがあつた。口から顎などを掩うても諒解し、普通の言葉と囁きとも判別し、顔面だけを見て有聲音無聲音を識別するなど、音聲學上にも考へさせられる事どもが尠くなかつた。

なほ大塚からわざわざ来て下さつた三人のお子さんは、たまたま一つ家に寄宿してゐる便宜上から選に當つたので、特別な優等兒と云ふ意味ではないとの事、然もあれ程の成績を示されたのである。

某氏は、かの實演に接して言ひ知れぬあはれを感じたといふ。言葉なき人生——想ふだにも陰慘の極み。言語の學に携はる者

の同情は一入である。或る者は彼らの人相に一種の僻みを豫想してゐたといふ。然もかの三人の面影には、一點の陰翳を認めなかつた。

吾らは茲に、かの愛らしき子らの世に、明るき光のいやましに惹きまむ事を祈り、併せてこの尊き事業に身命を捧げらるる麗暁教育者の代表としての石黒階氏に、心からなる敬意と感謝の意を表するものである。

自由學園に 昭和八年六月二十日

『婦人の友』の讀者層と云ふものが、婦人公論などと異つて氣品のあるインテリ婦人の間に求められてゐることは人のよく知るところであるが、この婦人の友の經營者は女子教育に於て是亦夙に独自の學風を樹てゐる『自由學園』の學園長羽仁女史である。

豫ねてより徳川侯爵は、是非この教育に就て學園の全生徒及び卒業生に御講演をと懇請をうけてゐられたところ、日を得て茲にその六月二十日、本校生徒東條允子、國廣通子は伴はれて蕭洒な學園に向つた。

侯爵は、折りしも上京中の滋賀縣西川校長、大阪府加藤校長も出席されましたが、吾が大池校長は重要な職員會議の日に當り出席出来兼ねたのは残念なことであつた。

侯爵の熱烈なる講話に満場はたゞ感激と興奮に盛りあげられ、吾が校生徒の淀みなき明朗な自由會話に驚異と感激——閉會後卒然として卒業後この身をこの至難な教育に捧げたいと決意を申し出た一女性が表はれたほどで、その反響が如何に大きく、又本日のが如何に有意義なものであつたかを充分に知悉することが出来る。會後も尙、その場

をさりやらす二生徒を中心に夕刻近くまでお話がはづんだ。

輕井澤講演及び實演會 昭和八年八月十一日

徳川侯爵夫人、大炊御門侯爵及同夫人等の眞摯なる努力により生れ出でた本會後援會は、曩に東京仁壽講堂に於て音樂映畫の夕を催し、其の利益金を以て、宛名印刷器を本會に寄附し、其他陰に陽に本會の爲盡せる處多大であるが今回八月十五日智識有産階級は云ふ迄も無く基督教信仰に満てる青年子女が清潔なる避暑地として近來特に著名になつた、輕井澤に於て講演實演會を同地集會堂に於て主催せられた。

開會に先づ數日、和英兩様の招待狀は、避暑中の内外名士に發せられ、街頭到る處、邦歐二種のホスターを見受け、先着の聲兒兩三輩は、行人の目に聳つた。當日は連日小雨續きの空も朝來少し晴れ、テニスに、ゴルフに、野球に、ハイキングに行樂の客の往來繁く、夕の出足も望多く思はれしも、當日は、丁度同地開拓の初期よりの行事となり居る音樂會の當夜とて、既に切符を買得せし人等は、當然ユニオンチオルチの音樂會へ赴くべしとの消息通の話に聽衆の有無大に疑はれ、當事者は一方ならず心を憫した。

定刻前、避暑中の會長夫妻令息を始め、大炊御門侯爵夫妻、其他同侯邸にある人々は殆んど全員を擧げて來場、幹旋到らざる處無かつた。

輕井澤の夏の夕は、尙暮るゝに遅く、定刻七時には、鎌田樞密顧問官や、最近爵位を嗣子に譲つて、平人の境地を樂みつゝある益田孝老大人等が、家族を同伴して、三々五々來會せられ、一般來會も、定刻を過ぐる約四半時間にし

て漸く場の大半に満ち、爰に左の順序により、講演會は開會せられた。

- 一、開會の辭 侯爵 徳川 義親
- 二、挨拶 榑 鎌田榮吉閣下
- 三、實演

讀話動作及發語初歩

- 東京市立聾學校 初等部二年生 香坂 英一
- 同 新木 房枝
- 同 松浦 ふみ
- 同 ミセス・ライシヤワー
- 通譯 西川吉之助

- 四、アメリカに於ける現下の聾教育
- 五、實演

對話 (學校及家庭生活に就いて)

- 東京市立聾學校 中等部二年生 東條 允子
- 同 國廣 道子
- 西川吉之助

- 六、聾教育概説
- 七、實演

女學校在學時を顧みて

(附英字親聞朗讀及同翻譯)

- 八、實演 趣味を語る 西川 濱子

九、余の眼に映じたる聾教育及閉會の辭 侯爵 徳川 義親

日本聾話學校中等部五年生 伊東 伊都子

目次漸く進みて、會長の講演に移り、説いて半に到るや、輕井澤名物の大雷雨急激に襲來し、はためく電光雷雨と共に電燈は悉く消えて闇黒咫尺を辨せず、漸く懐中電燈の力を借りて講演を終り、來聽者の質問に應じ、尙來聽者が親く聾兒等と會話を試みられん事を望みたるに、來會者の半数は、聾兒を取巻き、種々の質問應答に時の立つを忘れ何時果つるとも覺えざるものから、終に十時を以て散會を告げ、各自雨中を家路につかれた。來聽者約百名、内、外國人十數人を算せしは、同地方の講演會として非常の成功なりとは、同地故老の話にて、聽講者が皆熱心に聽講せられしは、主催者の最も喜ばれし處であつた。和かなる氣分の裡に散會し得たのは嬉しい事であつた。(口繪寫眞十二頁参照) (滋賀縣立聾話學校長西川吉之助先生執筆記事)

徳川侯邸名士座談會に 昭和八年十一月二十一日

侯爵の秘書役である今西女史がお迎への自動車で來られた。待ち構へてゐた子供達がドヤ／＼と乗り込んだが、一臺に乗り切れぬので二臺に分乗して肅酒な新築の侯爵邸へ。

「やあ、よく來て呉れたね……あゝ、こんにちわ、……こんにちわ」と、何日に變らぬ侯爵のほゞえみ。

待ちくたびれた千葉利夫、倉持利平、岡澤貞、佐藤太郎、秋田寛二、加藤富美江、東條允子、國廣通子は大勢なのでなか／＼元氣がいい。はしやぐ。

大池校長代理の石黒先生「おい！ おい、みんなお客様達の前でも、その元氣だよ」

「先生！ 僕等も今日はお客様ではありませんか」……成程、それもさうだ。

「どうも、かなひませんね。石黒先生」と今西さんが、多勢に無勢とみて味方して掩護射撃。

何日も病院で子供達がお世話になつてゐる颯田博士、曰く女子大學の誰、曰く誰と名士ばかりの集りである。八名の子供を中心に話は飛び交ふ。成程、「子供がこちらを見て居ないと話が判ぬはずですなア」とやつと氣づかれた名士もある。盛んに質問が出て来て子供達もいつの間にか静肅味を感じて来る。どこかで見た事のある顔だがと記憶を辿つてゐると隣席の利夫君が「岡本さんですか」と小聲で先生に尋ねて来るのを速くも盗み見た太郎君が「さうだ。イツベイ！ イツベイ」と大聲を出して背づけば、満座に忽ち起る爆笑。……石黒先生は思はず顔をそめて、ケゲンな顔をしてゐる瞳の中へ「漫畫家の岡本一平さん」ですよとの時ばかり呼び慣はさぬ『さん』づけで御説明の様子。すかさず、受持先生のピンチとばかりに救援投手として允子さんが「そのお隣は岡本かの子さんでせう」と鋒先を轉じた。「允子さんはどうして知つて居ります」と、侯爵の言葉に、「さきほどの様子で御夫婦の様にみえました」……で又、哄笑が湧き起る。

此度は今西さんが「允子さんは、どうしてそのお名前を知つて居るの？」ときたが、あつさりとピツチャー・ゴロだ。「有名な歌人ですから」。

今度は歌人かの子女史が顔を精める番とまはつて来た。話は盡きず夕景も迫つたので、『それではまた今度』と云ふ名残の言葉と共にお土産を夫々いたゞいて、庭前の銀杏の落葉を踏んで帰宅した。

聾兒の爲めの集ひ

〔第二回〕

昭和八年十二月十六日 仁壽講堂にて

まん圓い月に、コバルトの海、椰子の葉おひ繁る島々。白く塗つたテラスは棕櫚の葉蔭の微風に夢みる——こうした豊かなる南國の情緒を背景として「ハワイ音楽の夕」が丸の内の仁壽講堂で催された。

演奏は、日本でも著名なハワイ音楽團モアナ・グリーククラブの若人達。奏でて唄ふはハワイアン・ソング。満場の人々は次の様な『趣意書』に心ひかるゝまゝ集つて来たのだつた。

聾兒達が手眞似による對話法をやめて、新しい口話法の教育を受ける様になつてから十年餘りになります。

口話法を充分に習得した聾兒は常人と少しも變りなく普通人の言葉を解し、普通人の言葉を自由に使つてゐます。

既に普通中等教育を相當の成績で修了したものです。

之に依つて、聾兒の日常生活は今迄よりも遙かに明るく期かになりました。

聾教育振興會を後援して官公私立各聾學校に於けるこの口話法による教育の一層の進歩を蔭ながら促し度いのが、私共の念願です。

去る六月初旬當會は第一回の試みとして「聾兒の爲めの集ひ」を催しました節は理解ある方々の多大の御同情と御援助とを得まして豫想外の好成績を挙げ、その純利益を以つて今夏聾兒を連れて輕井澤に参り講演會を開き、又聾教育振興會に對して事業上必要な印刷機を寄附致す等多少の寄與を致すことが出来ました。

今回、第二回の聾兒のための集ひとして「ハワイ音楽の夕」を計畫致しましたから、どうぞ前回にも勝る御理解と御好意とを

以つて、雙兒の爲め、この催しを御後援下さいまして同時に私共にお力添へを賜はらん事をお願ひ申しあげます。
曲目も次第に進み、丁度プログラムの中程だつた、満場の拍手に迎へられて、當校中等部二年鈴懸學級の東條允子が登場した。この間の様子は「婦女界」の編輯長正富氏が同誌本年(昭和九年)二月號に『聖教育の大進歩』と題して自から、執筆された記事から抜萃する事にしよう。

(前省) 東京市立聾學校中等科の二年生東條允子(一五)さんが、述べた一場の挨拶は、聞くもの目頭を熱くさせた。

「わたし達は耳が聞こえません。みなさんがハワイ音楽をきかれて、本當に楽しさうにみられるのを見ると、一生に一度でも、さうした喜びに浸つてみたいと思ひます。

けれども今晚の會がわたし達、耳の聞えない者にとつて本當に有難い、温かい御同情から催され、又お集り下さいましたのを知つて、心から厚く御禮を申しあげます」

わるびれず、にこやかに、云つてのけた允子さんに百雷の拍手は鳴り止まなかつた。

記者は卒然と心に行つてみよう。東京市立聾學校へ行つてみよう。と思つたそして大池校長先生へ刺を通じたのは、その翌日であつた。

海上ビルへ

於東京瓦斯會社重役會

昭和八年十一月四日

日さかりの暑さ。セダンはお濠端の垂れ下つた柳の姿體を亂して迂るが様に走る……ストップ。

支關口に立つて思はずぐつと見上げた海上ビル。エレベーターはルン……ルン……ルンと心地よい音をたて、昇つてゆく……7階まで直行だ。

先づ庶務課長の應接室に迎へられて、受取つた名刺はとみれば元某縣知事閣下。

「このお嬢さん達が雙兒ですか?」「はア!」……と思はず答へてしまつたが——「閣下!」と瞬間に感じたらこそ……今の返事はかたくなつたと思ひつゝ重役會議室へ。

居並ぶ重役十數名。教育に理解の深い岡本社長より石黒先生、今西女史、千葉利夫、東條允子、國廣通子の紹介あり。

石黒先生は先づ聖教育のアウトラインを三十分ほどにわたつて平易に説明、つゞいて徳川侯の代理として今西女史が聖教育振興會の沿革とその活動に就て述べられて後、生徒三人を中心に雑談。

窓の純白のカーテン越しに、赤レンガの大東京驛が浮んで見える。

「吾々の會議よりも、斯うした集りの方が遙かに人生的だね」「自分の子供の教育と云ふことをしみじみ今日は考へさせられた」と交はされた私語がピンと耳にはいつた。

ベル……ドアが開いてブルシヤン・ブリウに銀ボタンのボーイが運び來たコーヒーの冷えびえさ。扇風器の風に鉢植の赤いカンナの花弁が息づく。

大都會の心臓! この高層建築の一室。

フトまるでメトロ・ボリスだ——と感じた。

御下賜金拜戴式並びに記念講演・實演會へ

昭和九年一月二十六日午後一時半より
 神田區一橋帝國教育會館大講堂にて

辱くも、常に聖者の教育とその幸福とに御軫念を垂れ給ひ、今茲に御内帑金を下賜され給ふ聖慮の廣大無邊に感泣し恐懼に堪へず、日を卜して拜戴式を舉行し、徳川侯の御沙汰書奉讀ありてより文相、内相をはじめ夫々の代表の祝辭があつた。

閉會後引き続き記念講演會に移り、次で實演會を行ふ。本校よりは鈴懸學級の佐藤太郎「鯛つり」の仕舞（口繪寫眞十三頁）を演じて満場の絶讃を受け、四時半盛會裡に終りを告げ、全員大食堂にて徳川侯の「お茶の會」に招かる。

研究十年

吾が東京市立聖學校の創立以來、今日まで十年に亘る各先生方の校内、校外に於ての御研究發表を通して、私どもはこの眞摯なこの不斷の御研究の結果が、直接に將亦間接に私どもの子女の上に齎らされたのである事を思ふにつけたゞ々々感謝感激、申し上げるに適當な言葉が御座いません。

研究發表

和二年度

大正十四年度

- 一、 語彙の研究 石黒先生
- 一、 圖書指導について 石黒先生

大正十五年度

- 一、 音韻法則に就て 石黒先生
- 一、 聲教育上より觀た音聲學上の用語 石黒先生
- 一、 音群と渉り音に就ての一考察 石黒先生
- 一、 同行變化と同列變化 石黒先生

- 一、 母音考 石黒先生
- 一、 促音考 石黒先生
- 一、 子音考 石黒先生
- 一、 マ行音考 石黒先生
- 一、 バ行音考 石黒先生
- 一、 サ行音考 石黒先生
- 一、 ラ行音考 石黒先生
- 一、 ハ行音考 石黒先生
- 一、 カ行音考 石黒先生
- 一、 ヲ行音考 石黒先生

一、母音系に就いて
石黒先生

一、ナ行音考
石黒先生

昭和三年度

一、所謂「五十音圖による」音聲學上の機能主義的取扱
石黒先生

一、讀方教授に關する考察
石黒先生

一、ン音の一考察
石黒先生

一、ババマ音の比較研究
石黒先生

一、母音の教順に就て
石黒先生

一、國語彙調査
全校先生

一、音韻變化に就て
大塚先生

一、手話と口話について
吉永先生

昭和四年度

一、國語初步卷三取扱
石黒先生

一、讀話アクセント
石黒先生

一、國語讀本語彙調査(第一回)
横田先生

一、國語初步卷四取扱
石黒先生

一、語調指導
石黒先生

一、直觀教授に就て(主として言語教授の立場より)
石黒先生

一、母音に就て
石黒先生

一、國語讀本語彙調査(第二回)
横田先生

一、家庭との聯絡を如何に計るか
相原先生

一、發聲に就て
小竹先生

一、聾兒の體育に就て
大石先生

一、學年經營案に就て
大池先生

昭和五年度

一、高學年讀方標準テスト
石黒先生

一、高學年算術標準テスト
石黒先生

一、高學年讀話テスト
石黒先生

一、聾教育の基調(本校研究叢書第一輯)
東京市立聾學校

一、現今勞作教育主張の紹介とそれの歴史性
より見た批判
小川先生

一、誤音矯正の方法
大石先生

一、感情語に就て考察
石黒先生

一、夏季課題の研究
大池先生

一、讀話力に就ての一考察
石黒先生

一、遊びの善導について
横田先生

一、マナカ行音比較考
石黒先生

一、タダナ行音比較考
石黒先生

一、カガカ行音比較考
石黒先生

一、讀方科教材の選擇と研究の領域
石黒先生

昭和六年度

一、母韻の定義について
石黒先生

一、職業指導に就て
相原先生

一、聾學校に於ける低學年の話方會話教授の具體的考案
若生先生

一、疑問詞の取扱法如何
奥田先生

一、職業指導に就て
吉信先生

一、郷土を中心とした地理的教材及び取扱ひ
風間先生

一、綴方指導の具體案
石黒先生

一、裁縫教材の配當
井手先生

昭和七年度

一、音韻法則
石黒先生

一、數圖に就て
小川先生

一、植物名に關する調査
横田奥田兩先生

一、讀話力の養成
横田先生

一、修身教授に就て
大池先生

一、國語初步卷三を如何に取扱つたか
大石先生

一、圖畫教育に於ての概念的の事及び圖案學習指導の事
小室先生

一、讀話練習に就て
大池先生

一、聾啞兒に口話法による助詞テニナハを了得せしむる適當なる法如何
大野先生

一、國語初步卷一を顧みて卷二に及ぶ
若生先生

一、一年の問題
風間先生

- 一、讀話單文主義に就て 大池先生
- 一、國語初步に就て 大石先生
- 一、兒童の學習態度の養成 小竹先生
- 一、國語初步卷六取扱概要 石黒先生
- 一、語音を不明瞭にする原因並びに之に對する豫防法 竹内先生
- 一、同 大石先生
- 一、褒賞に關する研究 大池先生
- 一、文字教授の始期及び其方法 若生先生
- 一、同 阿部先生
- 一、綴方指導に就て 佐藤先生
- 一、夏期休暇課豫定案 清水先生
- 一、誤音矯正と其指導 竹内先生
- 一、書式に就て 美素先生
- 一、話方指導に關する方案 清水先生
- 一、入學當初十日間の取扱 東京市立雙學校
- 一、初等科に於ける理科教育の具體案なるパンフレットに就て 大石先生
- 一、學校教育から見た紙芝居。影繪人形劇
- 一、讀話單文主義に就て 小川先生
- 一、綴方について 大池先生
- 一、讀話成績向上方案 清水先生
- 一、國史教授に就て 横田先生
- 一、地 理 田引先生
- 一、讀話成績向上方案 鈴木先生
- 一、雙兒の思考に關する研究 大池先生
- 一、聽話練習に就て 石黒先生
- 一、常識語に就て 伊東先生
- 一、圖畫科指導の方針と教材配當 小室先生
- 一、理科の疑問に就て 横田先生
- 一、書法及書方教授の概要 美素先生
- 一、自由研究發表 若生先生
- 一、擬聲語擬體語に就て 清水先生
- 一、手工教材の選擇と指導の實際 吉信先生
- 一、聽話練習教程 東京市立雙學校
- 一、自由研究發表 石黒先生
- 一、初等一年の指導要項 清水先生

昭和八年度

- 一、聽 話 竹内先生
- 一、唐代の書風と書方手本に就て 美素先生
- 一、サイレント・リーディング 大池先生
- 一、計算テストより見たる練習 大石先生
- 一、個性。其他 大石先生
- 一、裁縫の時間について 三上先生
- 一、再び讀話單文主義に就て 大池先生
- 一、學藝會の目的方法に對する吟味とその實際指導に就て 小川先生
- 一、綴方指導の様式 横田先生
- 一、タドマ法 大池先生
- 一、口語學級に於ける劣等兒の取扱 鈴木先生
- 一、適切なる發音調査の方法 若生先生
- 一、口語初步を通して讀話基本形式の研究 小竹先生
- 一、綴方指導 兵藤先生
- 一、讀話成績を向上せしめつゝ、文字を指導する方法の研究 廣田先生
- 一、雙啞學校低學年(豫科を含む)に於ける課外遊戯の適切なる指導法 芳賀先生
- 一、發音指導上に於ける「いき」の問題 石黒先生
- 一、發音指導上に於ける基本練習について 清水先生
- 一、同 廣田先生
- 一、國史教授の困難なる點と其解決法 小室先生
- 一、入學第一學年の經營案 東京市立雙學校
- 一、國語初步に於ける形容詞に就て 大石先生
- 一、動詞及び副詞の研究 佐々木先生
- 一、自由研究發表 竹内先生
- 一、國語初步取扱に就て 清水先生
- 一、發語誤音矯正 田引先生
- 一、掛算九々に就て 小川先生
- 一、算 術 佐藤先生
- 一、自由研究發表 兵藤先生

- 一、國語讀本の教材及びその取扱に就いての一考案
大野先生
- 一、平均運動と三半規管
芳賀先生
- 一、圖畫教育
百瀬先生
- 一、口話教育の地平線
大池先生
- 一、手工科の教材の配當表
百瀬先生
- 一、全話讀解と全文讀解との關係
小西先生
- 一、改正國定書方本の批判
美素先生
- 一、直觀科の概念に就て
小川先生
- 一、グラフの取扱に就て
清水先生
- 一、ホシノフォンに就て
大石先生
- 一、發音テスト成績一覽表に就て
伊東先生
- 一、聽話に就て
竹内先生
- 一、各科指導要項
大池先生

(以上、四月末日現在調)

昭和九年度

- 一、用筆の研究と書方教授法に就て
美素先生
- 一、口話教育の地平線
大池先生

研究會

豐教育關東部會

昭和四年十月十二、十三日 本校講堂にて

X日本聾啞教育關東部聯合研究會を本校講堂にて二日間に亘りて開催、出席者七十八名、議長大池校長。協同研究問題は「直觀教授に就て」「聾兒の體育に就て」。他に醫學博士西村庚子女史を聘して「邦人聽器の形態學的研究」と題する講演あり。(口繪寫眞十五頁參照)

第一回發音教授座談會

昭和六年三月二十八日、始めて共同研究座談會なるものが設立され、その第一回の研究題目として先づ、發音を如何にして教授すべきかと云ふ問題が當然に對象となり、それに就て石黒先生の原案を中心として共同研究會が開催されましたが、洵に意義の深い集りであつた。

第二回發音教授座談會

(昭和六年四月十一日)

前回にひきつゞき、大池校長の座長のもとに、第二回の發音教授研究座談會が當校に於て開かれました。四校から

三十餘名の集りで一時より六時まで五時間に亘つて熱心に研究討議された。

第三回發音教授座談會

初夏の微風が開放された窓から純白なカーテンにたはむれて訪れ来る、爽涼なる會議室で四十餘名の者が、参らば、ひきつゞきさまに發音教授に就て共同研究会を開く事になつた。回を重ねる毎に集るものが増加し來たつた。石黒先生の原案に據り主としてバ行音、マ行音、ヤ行音に就て、一時半より六時まで文字通り殆んど休憩と云ふものなしに行はれた。(昭和六年五月二十三日)

親の座談會

昭和六年六月十七日 本校にて

集るもの百名を數へ、横濱校より、北澤校より、千葉校より、指ヶ谷校より。本校を加へて五校の父兄の集りである。大懇親會の感あり。大池校長、座長席に着き「夏期休暇を迎へるに當つて」その暑中休暇の重要性、意義より話は切り出され、復習のさせ方、子供の睡眠について、躰について論議され、更らに話は進んで避暑の效罪に及び、理想的の休暇生活が説かれて拍手盛會裡に散會。

第四回發音教授座談會

漸く暑さが迫り白扇を日蔭を求めるとなつた。本校に於て大池校長座長となり、石黒先生の原案に據つてタ・ダ・ナ行音を中心とする研究座談會を開催(昭和六年六月二十七日)

學習態度養成法座談會

兒童の心は白紙にも等しい。教師は、この白紙にむかつて如何なる心構へをもつか。片時もちつとしてゐない動的な子供等を、如何に導くべきか。

明朗なる兒童の學習態度こそは、全學習の基礎であり、出發である。考へれば考へるほど問題は大きい。四十餘五名の先生が本校に参集して共同研究を行つた。(昭和六年九月十二日)

初歩より讀本への聯絡に関する座談會

國語初歩が卷一より卷を追ふて六卷まですゝみ、次いで國語讀本に移るその聯絡の橋渡し迄には、其處に色々の問題を胎してゐるだけ教授者の人知れぬ悩みがある。之を如何に打開すべきやと云ふ問題について昭和七年一月二十三日本校に於て研究会が開かれた。

「入學當初の一週間の指導」座談會

共同研究会主催第十一回研究座談會が、本校にて開始されたのは、昭和七年三月五日である。二十八名出席。大池

校長座長のもとに本校案を中心として忌憚のない談合が行はれて有意義な集りであつた。

(昭和六年九月十二日聾口話教育八卷四號記事参照)

研究授業と其の批評會

昭和七年四月十六日

入學したばかり、丁度十二日目(授業日數九日目)の兒童十四名を清水先生が授業された。教室の關係で參觀者を二十名(滋賀校、東京聾啞學校、日本聾話學校、横濱校と吾が校)に制限しなければならなかつた。一時間の授業が終つてから批評會に移つたが、所謂公開批評授業で、入學當初の取扱ひを行つたと云ふことは前例のない事として非常に緊張裡に熱心に夕刻まで時の過ぐるのを忘れてつゞけられた。

(聾口話教育八卷五號の記事参照)

「家庭に於ける夏休の心得」座談會

昭和七年六月四日本校に於て右の題名のもとに本校案に據り第十三回の共同研究會開催され、三十名ほどの集りであつた。

綴方指導座談會

昭和七年十二月十二日

どうしたならば、無理なく而も平易に、而も興味をもつて、出来るだけ早くから綴方を指導する事が出来るかと云ふ實際案が、本校發表の「綴方成績向上方案」である。

これに就ての共同研究座談會が開かれたが只單に批判であつてはならない。要するに、この案は實際の理論化であるから、吾々は再び本に返へしてこの理論を實際化して兒童の上に移して行く問題が残された仕事である。そこに次ぎの發展性を思考すべきである。

讀話成績向上方案座談會

本校が讀話單文主義の提唱した研究發表物を中心として、昭和八年五月二十日共同研究座談會が開かれた。大池先生、横田先生等が主として之に應答せられた。

「失敗を語る」座談會

昭和八年六月十八日、横須賀校で開催。座長大池校長。本校よりは他に大野大石兩先生出席。

日本聾啞教育會總會

昭和八年七月廿九、三十日

日本聾啞教育會第九回總會を吾が校が當番校として主催したのは、夏期休暇に入りて間もない事であつた。全國より二百十五名の出席者を迎へて本校の講堂では手狭で到底會場に當てる事が出来兼ねる状態だったので、第一東京市立中學校の大講堂を借用して會場とした。

第一日は二十九日午前九時より開會式。ついで會務報告及び議事に入り「聾啞學校の學科課程に關し留意すべき事項如何」と云ふ文部省の諮問案の説明を倉林督學官がされて委員附託となつた。次いで建議題四項、協議題二項、談話題三項ありて後、明年度の總會開催地を和歌山校と決定して、午後一時より研究會に移り、滿場拍手の中に大池先生が座長席につかれて本日の協同研究問題「口話學級に於ける劣等兒の取扱法如何」について各校より貴重なる發表があつた。最後に本校案を鈴木先生が代表して充分に説述された。第二日は「適切なる發音調査の方法如何」と云ふ研究問題に始まり吾校の學校案は若生先生が説明された。次の協同研究問題「綴方成績の向上方案」は各校の發表の最後をひきうけて、本校案を兵藤先生が説明された。暫時休憩後自由研究發表に移り丸山良二氏の「統率性の發達」が述べられてゐるとき記念撮影（口繪寫眞十五頁參照）最後に文部省諮問事項答申案上案、山岡委員の説明ありて原案可決。閉會式が宣せられたのは五時三十分、二日間に亘る總會も目出度く散會した。

白日の下に語る〔聾教育診斷〕

昭和八年八月の初め文部省主催の夏期講習會が東京聾啞學校で開催され全国各地から先生方が集つた機會に、講習内容についての疑點や刻下の教育問題を中心に大座談會が大池校長の座長のもとに開かれた。

〔聾口話教育九卷九號參照〕

研究座談會〔落葉にきく〕

昭和九年八月三十日、日本聾話學校にて、大池先生座長となり、色々な聾教育上の問題に就て座談會をした。

〔同前十一月號參照〕

十年の階梯

刻みゆく階梯、登りゆく十年、
吾等こゝに來り十年を顧みて
その年々の横顔を描く

拾年前の想出

伊東先生

此學校が産聲を擧げたのが拾年前の卯月も末の廿三日でした。優しいすんなりと垂れ下つた日比谷の糸柳には若人の心のその様な可愛い、晴れやかな芽をふいて、それがそよ風にゆらいでる時なのでした。

「オシの先生方、あなた方の教室は二階の角で少し暗いがね。それからこれが机で、あれが先生方の居られる場所です。」

指定された教室は長方形の薄暗い所。私共の机は職員室の片隅。

教室には何の設備も無い。準備等は勿論出来よう筈がない。天にも地にもたゞ一つの毬。フレーベル館にも走つて見た。繪カードも作つてみた。自分のあり合せの物も持ち出してもみた。出来る丈けの努力を盡してみた。

授業が済むと川本先生宅へ急ぐ。明日の打合せ。三人三様な物思ひを持つては出かける。言ひ様もない不安さがひし／＼と萬べんに込み上げて来るのでした。

時は流れた。拾年間は夢の様に……………

『懐古』を焚く

石黒先生

赴任の日の第一印象、校長室にて

さて、「冠」は選ばねばならぬものだ………」と

同僚の云ふ

君が来て呉れたからなア

賽の目は一から六までだ。七を出すには、どうしても二度振らなければなア」と答へた事を覚えてゐる。

発見

先人が一度摘んで棄て、行つた昨日の茸だとも知らず、自分が発見した様に欣びもし得意にもなつてゐた………恥かしさ。

或る謙遜家

ナマケモノが往々に「謙遜」と云ふ手を使ふ——と云ふ事を知つた。

(自分の事を吹聴する様な世間知らずはナマケモノにはなれぬ)正直だ、あつさりしてゐると云へば、さうだとも云へるが………

又知つた——「謙遜」は努力家にとつても高慢なる含羞である事を。

薄暗い二階へのあがりおり

或る人々にとつて一日、一日は境界であり、或る人々にとつては梯子である」としみじみ感じた。

日比谷公園の噴水

あの大銀杏の黄ばむ頃、鶴の噴水のしぶきを浴び乍ら、ボカンと清澄な大空を見上げてゐるのがムシヨウに好きだつた(その頃は、皆がほがらかだつたなア………)

お濠の柳・ブラタナスの路

今日も歩いて歸らう」と、ゾルフ獨逸大使が世界一と折紙つけた今の「青葉通り」を、よく同僚と歩いた。獨りで歩いた。

禁酒・禁煙・二食主義

を断行したのも、その頃だつた。

寫眞

これは先生ですか

(さうです)

こんなに若かつたんですか

(………)

この教育門に入りてはや十年。十年前の吾が姿を、獨り懐しむ。

一瞬の豊教育史

これがみんなの一年生の時の寫眞だよ。覚えてゐるかね………と差し出せば、のぞき込む子供達の顔が、あどけない九年前に返る——その一瞬に、自分は春秋九年の「吾が豊教育史」をはつきり讀んだ。

昭和十一年を省みて

横田先生

電報で呼びよせられた私は雨のどしや降りの日、日比谷の中澤校長の前で頭を下げてゐた。赴任の挨拶だ。今八ヶ年前を回顧すると、日比谷公園、お濠、府立一中、裁判所などを背景にして、児童、父兄、同僚、小學校の先生方等々が走馬燈の様に去來する。

〔百合の樹の花〕「おい石黒君！あれは花かい」と意外な奇問に驚いたであらう、同君と小松君とが思はず釣られて私の指さす方向を仰いだ。そこにはうす緑の中にボカッと赤い所のある花らしくないものが、五月雨に打たれてゐる。「うん！ そうだよ」「清澄な花だね」と簡単な會話が續けられた。これは五月雨降る明るい午後、一中の前を歸る私達三人連の朗かさであつた。右手には宮城がかすんでゐる。

〔力行熱とサ行熱〕讀唇先進主義、發語自然主義、言語中心主義と名古屋の學校で唱へられ、普及に力めて居たことは私にも大きなショックを與へ、向上心を燃やさせられたのであるが、口話教育といふ字義に捕へられた私は、口話教育即發語教育といふ氣持を尙取去ることが出來ずに、其の結果カ行音やハ行音を指導するときは發熱さへした。其の指導が全部過つてゐたとは今でも速断しないが、過勞を伴ふ指導であつたことだけは考へられる。併しこの吾々の尊い體驗が、この苦しみが、五年後に主張された當校の單文主義を基礎づける或一部面であつたことを考へるときうたゝ今昔の感に堪えない。

〔日比谷の花祭〕四月八日、入學後間もなく、東京にも生徒にも慣れない私が、充分な注意をしたつもりだつたが

生徒二人をあゝの混雜な花祭の中に見失つてしまつた。私の困却した顔。それでも附添父兄の眞摯な探索振で、間もなく探しあてたが、附添といへば、今程整つた學校からの要求はなかつたのだが其の頃の附添も考へれば考へる程眞剣味があつたことに自ら涙ぐまれる。

移轉とともに赴任して

小川先生

赴任したのは七年前、現在の學校で日比谷から移轉して來たばかりの四月です。

同期の大野君と一緒に一年生を受持つたのですが、大野君が大きい生徒で椿學級、私が小さい方で葡萄學級でした。入學テストは日比谷で受けたのだそうですが、授業はこちらで始めたのでした。

その頃の校舎といへば、扉など、今もきたないが、もつとひどくて廢家そのものゝ様でした。運動場には、草が一面はへてゐて、夏休暇あけなどは、それが生徒の背たけ位にのびて、バッタがビョン／＼飛び出すといった具合でした。

生徒も少く、先生も少く、學校といふよりも塾といった風で、實になごやかな温味のあつたものです。

七年前といへば長いといへば長いし、短いといへば短い様なものであるけれども、これでふりかへつて見ると、なか／＼變つて來てゐます。

七年前を顧みて

大野先生

今から七年前を顧て當時の感想を何か記せとの事である。もう考へてみると大分古い昔であるから淡い記憶でしかない。吾々指ヶ谷同期生三人が此の學校に赴任した當時は、今の裁縫室、木工室に充てられてゐる増築校舎など勿論ないし、校庭も舗装がしてなかつた。冬になると霜柱が庭一杯立つて、丸で雨あがりのぬかるみに等しい状態であつた。生徒數も百を超える僅かで、學年も初等部五年？が最上級であつたかと思ふ。從て先生の人數は吾々の先輩諸氏が顔を列べてゐたのみで現在の何分の幾つか、とに角、こじんまりとした、一寸大きい家族位のものであつた。今の楠學級教室が職員室であつたかと思ふ。そこで吾々三人が歓迎會を開いて貰つて先づ職員の間に入れて戴いた。今の中一人は初等部三年を、他の二人は初一年を受持つた。私はその後者で、子供と一緒に先生も初一年である。第一學期は夢の様に過ぎて、體て夏休みが来る。今とは大分變つた雰圍氣であつた。それ等を仔細に記述することは紙數に制限があるから止めるが、大分休暇課題の謄寫版印刷に没頭して、各組とも相當分厚なものを拵へたやうだつた。そこらに此の教育の一特色(よい意味かどうかは別として)がある様な風の感もないではなかつた。教授法では名古屋校の何々主義とか云ふものが先づ大事な常識の一つであつた。あれこれとまあ一箇年が過ぎたのであるが、今から思ふと隔世の感がある。

手話を口話へ！

風間先生

校長として、大池先生を迎へた市立校が、日比谷小學校から分離して、こゝ巢鴨の養育院跡へ引越したばかりの昭和三年四月——けれどももう七年も前のことです。大野先生、小川先生と御一緒に赴任して廿四人の生徒を受持つことになりました。校長先生はおやさしいし、當時既に有名であつた石黒先生をはじめ、横田先生やその他みんな好い先生ばかりだしなど、そんな事を臆げに感じつゝ、それを嬉んでゐた程香氣なものでした。而し、私は、上野時代に三年間、半口話、半手話で培はれて來たこの廿四人をなんとかして微力乍ら自分の努力で純口話に改めてやりたいと念じ、全父兄を集めて方針を述べ、一ヶ年を殆んど準備工作の爲め人知れぬ喘ぎをつゞけて夢の如く過しました。職員會の度に石黒先生から、斯教育に於ける凡ゆる方面の基礎教育を受ける様になつて、段々聾教育の理念を知る事が出来る様になりました。

矢張、あの當時にお聞きした事は一番忘れられぬ様です。

赴任當時の感想

神林先生

私が此の學校に赴任致したのは、昭和三年十一月の事で只今の中等部一年生が丁度初等部一年生の時で、先生

の御口を見る事よりも、父母の膝にもたれて甘えて居る事に餘念もない可愛い盛り頃でした。従つて當時の上學年生たる三四年生とても何れ劣らぬ腕白盛りの事とて、雨上り後等には運動場や島の廻りを一目散に駆け廻り其泥靴の儘にて玄關や廊下の別なく、小さな靴の模様をつけて、實に清潔検査等は思ひもよらぬ事の様で御座いました。扱て亦一つは式日の際等、校長先生のお話の有る場合、手話學級の生徒の爲めに必ずや受持教師が公然と其れを手眞似を以て譯してやつて居た事でもあります。全く其度毎に一種言ふべからざる暗さを感じさせられました。而して何卒して讀話のみにても出來得る様に努力してやらねばならぬと、其のみが来る日も来る日も考へやられる事で御座いました。

古 壺 新 酒

大 石 先 生

「改めらるべくして未だ古きものに校舎がある」さて「古壺に古酒 之がボルドーの葡萄酒だつたらいいですね。新樽に新酒、灘の生一本だつたら上戸が喜び相ですね、虚子の俳話ではないがこの學校は古き壺に盛つた新しき酒とも言ふ所でせうか！」

唯古壺に新酒を盛ると言へば何となく趣向のあるのを感じますが、物が校舎であつてみれば骨董的價値は段々低下するばかりですね、ましてお古の譲りものに接はざらけと來て居ては愈々です。そこであの頃の運動場は「補裝される迄」之でも學校かと思はれる位、夏は丈なす雜草にかくれんぼが出來たり、バッタや秋蚕の良き住家であつたり。そして雨時や霜解時は何時も運動場からK・Oされたものでした、野趣に満ちた親しみはありましたけれども、

裏からまつすぐ大塚公園に遊びに行けた頃はのんびりして便利でした。

その年初めの國語初歩が出來ました。大へん幸だ幸だと言はれましたが、やる事は下手な事ばかりで、一つも快適な思出はありません。ぐんぐん進んで行く學校と言ふ船の中で、先へ先へと押進められて居る様なものです。私自身は船の軸と艫とを行つたり來たりして居る様なものです。虫の良い他力本願とでも云ふべきでせうか。船長さん、船頭さんまかせでもきつと良い所へ連れて行つて下さる事でせう。

出來るならば早く新しい船に乗りたいたいものです。

奉 職 當 時 の 私

吉 信 先 生

私が此の學校に參つたのは今から六年前の事でした。其の頃大塚病院は建築中で其の仕事場の横を通りぬけて學校の庭に一步を踏入れました。校庭には枯草が残つて居り隅々には建築材料は散らばつて居り、これでも市立の學校かと思はれる程でした。

いよ／＼子供達と楽しい勉強をする事になりましたが、用具としては何一つ揃つたものはなく、其の上技倆の足りない私、來る日も／＼何物かに追はれて居るやうで忙しくて何も思ふやうに運びませんでした。あせつては失敗又失敗と失敗ばかり繰返して、それを考へると淋しいと言ふ氣持より罪でも犯した様な氣持になりました。努めよう、全身を投げ打つて子供の爲に、いや自分の爲に、高嶺の月を見るまではと自分を打立て々々きたものゝ、今になつてそれら一つ一つを取り出すならばつまらぬ事に苦しんで居る。しかし又いつか現在の自己を笑ふ時も來るだらう。

赴任當時よりの感想

小竹先生

校舎の狭いは別として、この舗装せられた運動場が今から五六年前私の赴任して来た其年頃には、夏休みの終りになると運動場一ぱいに身丈程の雑草が茫々と生えて、バツタがとんでゐたとは誰が今ほんとうにしゃう。日本一の大都市の學校の運動場がそれとは。

驚いたのはそればかりではない、當時日本全國の豐學校はまだ斯教育の確固たる方針立たず、手話口話の何れを取るべきか迷つて居られた。其時に着々と理想に向つて進み、理論的實際的に研究に研究が積みなされてその実績は日毎に向上し、理論は實際化され、實際は理論を生み、茲に今日を觀るに至つた其欣びは願みて驚異そのものである。かくてこそ私も十年間の任地を後に潔きよく去つて、當校に奉仕する事を此の世に於ける最後の光榮と思ふて參つた次第である。

赴任頭初を想ふ

美素先生

昭和四年四月十二日南足立郡伊興小學校教職を止めて本校の書記として赴任した。當時は職員も児童も今日の半分に充たぬ位のものであつた。十數名の職員が校長の下にあつて眞に和氣藹々たるなかに諸事を研究し、執務をする愉

悦、児童は之を他の學校と比較して見る時、彼等の姿勢及動作に最も意を引かされた。それは本校の児童に姿勢が普通通兒を見做れた眼に悪しく、動作も活潑ならざる點にあつた様に思ひ、私は先づこの姿勢に就ては出來得る限り矯正されん事を職員會の度毎に希望して居た。

事務以外に書方圖畫體操と三科目を一週に二十數時間受持つて居た。

小學校教育には十年近くも従事して居たけれ共、嬰兒に對しては何等の豫備知識もなく亦斯教育の教養も無く經驗もなく始めて教室に向つた時は寸分の見當もつかなかつた。而も専任書記としての事務も相當に多くあつた。市關係の事務は規定に従つてなさねばならない。此の規定を一通り知らねば満足なる執務は出來ない。自分の腦裏には唯事務に關する事項あるのみである。事務室には學校の一切の庶務、會計、管理を只一人で執務しながら一方に於ては授業をなす等、他に或は今後餘り其の例を見る事が出來ないであらう。

夫れ丈に私の受持つた児童は可愛相な氣がして、絶へずその爲めに惱みつつも自分としては如何とする事も出來なかつた。その當時を思ふ時、實に感慨無量である。

赴任當初の感想

佐々木先生

生徒に接して見て、御指導なさつてののを見せていたゞいて、私の様な肝癪で短氣者が長い事つゞきそうもないと言ふ事を強く感じました。にも拘らず同じ者が短氣のまゝで五年も過して今に至つて居ります。これは御親切な諸先生方のよい御指導によるものと深く感謝いたして居ります。

赴任當初の所感

三 上 先生

昭和五年、もう丸四年前の事である当時の印象も、うすれかけた。指ヶ谷時代三四度参観のその度毎の學藝會の時には、只々感激してゐるばかりだった。又時にふれ伺ふうわさ、それ等の事が先入觀念となつて居つたためか、先づ學校全體すべてが生氣溢ふるゝ様に感じられた。

あのくだけた態度、お言葉、出勤簿までが無雑作にお茶の机の上に置かれてあつて實に親しそうな氣分に思はれた。そして一致して事に當られて居るのにも驚いた。

お晝食が校長先生を初め揃つておそば。旅行にも皆一しよ、ほんとに何から何までまるで家族の様なゆかしい情緒ゆたかな學校、流石はとつく／＼身にしみた。二十人の先生方は實によくまとまつて居ると思つた。そして大へん質素に思はれた。職員會議のノートも反古紙を綴ちて使用していらつしやつた程だったから、心から頭の下る様な事ばかりに思はれた。

寸 感

清 水 先生

昭和六年六月×日(日誌の一節より)

湧き出づる水は自ら最良の流れをたどる。

學校は、勿論人間の本當のすがたとすがたとの觸れ合ふところでなければならぬが、その個々の人が反映する流れの歸するところこそ、眞に人を作る環境であり、頭のさがる雰圍氣である。

誰か云へり、「他人事に非ず」と。

自分も亦、斯の流れに副ひて、俱に明日の流れを拓きたし。

——今日も初夏の空は晴れてゐる。

足 跡

佐 藤 先生

教壇に立つて曲りなりに、今年で四年目になる、一九三〇年學窓を出た。

「やるぞ」のかけごゑばかり大きくてとう／＼まいつた。

世は非常時で明け、非常時で暮れ、當校も此の時勢と共に、日進月歩して來た。

四年前の入學兒童に對する準備、教材の選擇、實に寒心に堪へないものが多い。

四年一昔として、飛躍に飛躍、躍進に躍進して來てゐる。十年一昔は最早、本校では通用出來ぬ、嬰兒の幸福はいやがうえにも、たかめられて行く。

四年の足跡を回顧する時、健康そのもので暮らしてゐる吾等同期生、只一人淋しく此の世を去つた〇君の事を追憶する。

赴任の年

小室先生

「貧乏長屋に子澤山」手足をのばすゆとりもない、雑として整頓の仕様もない。勿論よい玩具もない。本校へ赴任した最初の印象はこんなものであった。時は昭和六年四月、破れ垣根を背にしてはいても開いた櫻、伸びた柳、花も緑も元氣一つばいに見えた。子供等の姿も又！

「あばら屋でも、設備が少しでも、栄養をよくすれば發育は充分である」これが學校のモットーらしい。なる程モットモだ。栄養研究の爲全校協和一致、夜を日についての努力ぶり、頭が下つた。僕に與へられた役割は栄養の一部（圖畫、手工）に關することであつた。特殊の子等に何を與へるか。如何にして與へるか。完全な發育を念とする故になやみも尠くなかつた。

食堂のまどのぞき、メニュー調べに類すること、雜駁ながら中味を分析し子等を見つめながら、あれこれ考へ試る中長い短い一年は終つた。

與へ得たものはオヤツの程度であつたかも知れん。けど決して無駄ではない。たとへば栄養價が少なかつたとしても、オヤツを手にした時の子供のよろこび、（それだけでも充分の價値があつた）と考へる。

一九三一年

廣田先生

記憶すべき、一九三一年！

四月一日こそ、冒險を敢て斷行した——かの感あり。

熱と愛とを、モットーに

口話の發展を願ひつゝ。

赴任したその年の感想

井手先生

偶然にも校長先生の御招きにより赴任いたしましたものの、當時はあの不幸な子供達を如何に教育するかと云ふ事に心を痛めました。それにはまづ内容の充實こそ、最大の關心事であるを思ひました。

勿論、設備も教辨物も大切であります、それよりも何はさて置き強い意志と深い信念がなければならぬと考へました。技術に於ては普通人に優るとも劣らぬ成績を擧げると同時に『好かれる人』にこの氣持が一ぱいで日夜それにつけ左の歌の意を繰返し自己の修養につとめました。

古の道を聞いても唱へても我が行ひにせずば甲斐なし。

偶 感

田 引 先 生

思ひ返せば三と瀬の昔、彌生中旬の或日の朝、美艷にモーニング、どう見ても颯爽たる紳士姿と、色黒の瘦形の元氣な男の二人づれが、當校門を訪れた。それが何しに來たのやら噂仕合ふ暇も無く、眞黒なインキを両手から鼻先までぬりつけて、謄寫刷に早替り、恐らく天地開闢以來、日本廣しと雖も、モーニング姿の印刷屋は此奴が開祖様だらう。

この紳士こそは、新任挨拶に出掛けるや、すぐに入學テスト問題の印刷にこき使はれねばならなかつた哀れな今の俺だつたのだ。他の一人は、云ふまでもない同期の鈴木君。「我等出でずんば天下の塾教育を如何せん」と非常な意氣で乗り込んだ俺達だ。噫あの時分の氣概が懐しい。純な無邪氣な若かりしあの時分が戀しうてならぬ。

僅か三年に、この老筆振り、十も二十も年取つて氣概も何も抜けはてた今の自分が情無い。でも今日からは、本校の十週年記念を紀元としホルモン注射に若返り、生れ變つて大活躍、皆さんの御期待に添ひませう。

偶 感 一 束

鈴 木 先 生

顧みると三年も経過してしまひ、赴任當時の感想とて今更に無い。「忘却」と云ふ事が大きな役目をする様になつ

てしまつた。思ひを當時に走せれば

人間に種々な性格が有るな、と

「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ」と(草枕の一節)

塾教育も教育だ、と

その頃としては色々な考を持つてゐたが、何時の間にか忘れてしまつた。忘れたのではない。忘れ様としたのかも

しれない。

今日はとても鬱陶しい日だが私の考も陰惨である、さて何時になつたら梅雨も晴れるだろう。

赴任當時の考では無くて今の考ではあるが、實踐と云ふ事を考へる。それには矢張若さが無くてはだめだらう。さて自分は今その若さが有るだらうか？

赴 任 し た そ の 年

飯 高 先 生

飄然と然も大膽に斯教育に携た私、見るもの、聴くもの、味ふもの、總てがただ一種異様の感激にうたれるのみでありました。時は恰も口話法による種々な工夫研究の折とて一入敬慕の念に抱かれました。然しそれにつけても無智な自己を顧みては人知れぬ寂寞と憂鬱はつきき、焦慮のあまり窓の櫻に、銀杏にまで自己の不覺さを訴へた事が幾度かありましたものゝ、こうした苦しみはむしろ感謝によつて始めて自己は淨められ深められる様になりました。そしてせめて『間に合ふ人に』との念願はより以上に築かれて倦まず努力する様になりました。

奉職當時の感想

山内先生

聾學校聞いてはゐたものの、子供等の前に立つた事はない。唯不安の念にかられながらも御世話になる事になり、中等部木工科の一二年の生徒達と、一緒にあの教室で、ベツタリ板間に腰をすえる事になつたのは、丁度今から二年前の事でした。

子供の技能を見た時に普通児より劣つて居るとは思はれないが、説明をする時なか／＼理解が出来ず、仕事は抄取らず、氣がせくばかりである。しかし子供達の一心に、務目もふらずに働く様を見た時、何としても、この子供の爲に、自分の技のありたけ傳へ、卒業するまでには、立派な職業人となるやうに教育してやりたいと言ふ一念のみであつた。

最初感じた事二つ

芳賀先生

- 一、普通児より大變體操が下手な事。
- 一、口話法が實際役に立つか何うかを疑ひました。

雑感

兵藤先生

廿有五年、我を育てしなつかしき母士、何物かを求めてさすらひ出でしより幾星霜。情意と共に深く體驗せし山川草木。今また思へば盡きざる想像的對話。噫忘れんとして忘る能はざるなつかしき母士。

凡ゆるものの上に立つ聖なるべき力。至高至尊の價值創造に努むべき人。時間空間を超越しえぬ人の姿。汲めども涸れぬ文化の價值。噫一元にならんとしてなり得ぬ人の世か。

教育的良心は一切の方法を生む。人生の眞價はその人の死後。教育の成果はその子の社會生活。純粹生命の素なる接觸。靈肉に憐む人の子と人の子。二元の聖戰文化の源泉。噫至難なるかな育英の道。

我れ老いたれどもなほ希望あり。我れ愚なれどもなほ陶冶性あり。よりよき人生の建設にこの地この學園。大器晩成の意氣にもえて出發す。

赴任當初

小西先生

東京市立聾學校に赴任したのは去年のこと、その當時、庭が狭い、校舎も、設備も大したものではないと思つたことは偽らざる告白だ。けれ共本校の教育は、貧弱な校庭・校舎・設備と云つたものにびつたり來てるものではないことを第一に感じさせられた。

校庭・校舎・設備、それは教育にとつて重要視されるものに相違なからうけれど、それ、より以上のもは、教師と父兄の他にはないと云ふことをしみ／＼と實感させられたことである。

それは教師も、父兄も共に、子供を見つめた愛、熱、努力、この眞剣さを見せつけてくれたのは、小生の経験して

来た範囲では、本校より他には未だかつてないことである。

たゞ一條に

岡先生

昨年四月に奉職致しました。

當時の事毎に就きまして、いろいろ記憶を辿ってみますと、新しさと緊張さが、つい昨日の様に甦つて参ります。その心持は「どうしても一心にならずには居られない。」ただこれだけであります。

張りつめた緩みのない生活——私達にとりまして、これほど相應しい言葉はないと信じます。至らぬ自分では御座居ますが、幸ひにも、皆様の御指導を得て、希望に生き乍ら、可愛い子供さん達と共に、校門をくぐることを歡ばしく思ひます。

蓄積する力

上田先生

赴任した頃最も大きい感じを興へられたのは何か。「驚き」の一語に言ひつくせるかと思ふ。赴任して来たのは暑

さが漸く陵夷し朝顔の蔓に秋を知る十月中旬であつた。

丁度此の年正月、他校の參觀者として一通りを見、大體を知つてゐた自分の前に、サツとくり展げられた學校の空氣!! 教授面に表れた長足の進歩、この十ヶ月といふ時が如何に有價値に、如何に無駄なく利用され費消されたかに驚畏の眼をみはつたわけである。

成程+10ヶ月=努力=研究と實行

私をして刮目せしめた除數のそれに比して被除數の偉大さ、商の大と除數の小と……田舎から駈け出しの自分にとつては驚畏そのものであり且、「山は峻しいぞ、だが道は先達によつて踏み開かれた。大勇猛心もて邁進しなければならぬ」と深く肝に銘じた。

健實な歩み

山下先生

志を斯の教育に立て、一年、指ヶ谷で大體の外廓だけは見て来たものゝ多分の不安と期待に似た緊張とに胸を躍らせ乍ら校門を潜つた。コの字型に建つ校舎、餘り立派ではないなあと思つた。勿論教育は設備によつてなされるのではない。本校も外觀はとに角、統一された理論と高邁な理想を着實な手法と児童愛とによつて一歩一歩児童を育てられつゝある諸先生の態度に教育の眞諦を教示されて建物の不足感を消すことが出来た。

愈々兒等と相接する様になつて彼等の性情が明朗なことは意外であつた。

如何にもスク／＼と伸びてゐるな。と想つた彼等には特殊者の持つイヂケた暗さが微塵もない。

こんなに育てられてこそ社會人となつた將來も幸福であらう。これだけでも教育の任務の大半が出来てゐるのではなからうか。

信念を抱いて明朗に

山田先生

豊教育に志してゐる者誰しもの憧的であらう。本校へ圖らずも本年四月より奉職の榮を賜はり不肖私に取り全く夢にボタ餅の感。只總べてに感謝したき心で一杯、而し靜かに自分を見つめた時あまりにもみすばらしいその姿に淋しくなる。立派な先生方のお仲間入り出来るかと不安を感じずにはゐられない。だがこの教育に對する熱と意氣とは決して誰にも負けぬとうぬぼれてゐる。それだけに心から興味を持ち眞剣に研究してやつて見たいといふ希望は私の心から離れなかつた。その時來れりといつた今こそ諸先生方の御指導を仰ぎ研究に勉強にと兼ねての目的希望に向つて勇敢に突進し、及ばずながらも此道のためお手傳出來ればこの上もない幸だと念じてゐる。どこまでも元氣に朗かにかたい信念のもとに大きい希望に向つて精進しやう。いつも心に誓つてゐる。

就任一ヶ月の感想

兼子先生

特殊學校の圖畫手工教育それは面白いだらう。特殊兒童にはきつと普通兒童とは異つたよい素質を持つたものが多

いだらう、大いにやつて見やう。

こうした教育には全く白紙であつた私は、自分だけの何等根據のない推量だけで就任した。そして初めて教壇に立つた時今迄意識さへしたことの無い言葉の不自由さに面喰つた。

漸く就任後一ヶ月を経た、此の方面の教育は容易な仕事ではないぞと痛切に感じる。日毎にその感を益々深くさせられる。此頃は餘程馴れて來た。要領を得た授業が出来る時もある。こうした時間の終りは實に愉快だ。初等部中等部を通じて生徒は實に純真であり従順である。この點一般普通學校ではとても味へないことだらう。學校の教育方針宜敷きを得て居る爲め總ての訓練は誠によく行き届いて居る。

今後は自分の努力次第で愉快な授業が出来さうだ。諸先生及び父兄諸君に御後援を願つて、將來かならず成し遂げて見る決心だけは持つて居る。

赴任の所感

中野先生

大東京！

東京市立豊學校！

未だ經驗足らず、研究心に乏しい私が、此の學校に奉職し得た事を欣快とする次第であります。こゝに來任して可

憐な嬰兒に言語を通して普通教育を人間教育を、如何に施行して來られたかを、まさしくと視、その實績を目のあたりに見た時、大きな欣びと確信が出來た次第であります。智的教育丈に流れ易い斯教育に於て、智、情、意の三位一體となつて進む本校を、衷心より感謝し喜ぶ次第であります。

感想

山下異先生

聾教育に對して全然無理解だつた私は、就職が聾學校に決定しさうになつた時、一寸おもしろい氣がしたが、校長先生に種々御話しを承つた時、非常な興味を覺えた。これこそ尊い職業だと、努力の結果が、明らかに反映する事は決して氣持の悪いものではないだらう。

次に事務室へ案内された。恐ろしく狭い。こんなところで仕事が出来るか知ら？と思つたその顔つきを御覽になつたのか、それとも偶然か「今年の夏は増築します、しばらくこゝで辛抱するんですね」とおつしやつた。

學校事務つて、何んな事をするんだらうと思つて居たが、思つたより仕事は忙しかつた。然し美素先生が懇切に教へて下さつたのでこの頃では、おぼろげながら解つて來た。

仕事につかれた時、児童と他愛もない戯れにふけると、無邪氣さに引づられて子供の心に返る。未知の世界へ一歩々々進んで行く樂しさと、純真な児童の感化によつて、落付いた幸福が僕に迫まつて來るのが感ぜられる。成程教育は相對的なものだ。異つたものゝ有機的結合によつてこそ、眞の目的は達せられるのだと今更乍ら感じ

た。

感想

指原先生

本校へ御引寄せ頂いた最初の日、校門をくぐるとフット後からかけぬけた一人の生徒が後を向いてオハヨーと挨拶して、如何にも人懐こい明るい表情で近よつて來るのでした。

一歩足を校庭に踏込んだ刹那の感で、その學校の評價がなされると言ふ事をよく聞きますが、そうした意味に於てもこの『明朗』が児童先生學校全體を徹しての姿だと思ふ時、なぜともなしに嬉しくなつて來るのでした。それがいろんな意味で新任者であるだけに、それから生徒同志の會話の自由さに先づ驚の目を瞪るのでした。

思ふ存分意發表が出来る自らの力が言はんとするその人の全部を生々させる。表情がよく生きて居る。確に聾者としての域を脱した洗練さだ。それに語調が整つてゐる。ユーモアが極めて自由に表現されて居る。聾教育の重大な問題が斯くもハッキリと解決されて居る如實の姿に、これから打ちつ打たれつ磨きつ、磨かれつ、同行同志として共に價値の世界をみつめて生き様と念する、私のひそかなる念願に益々拍車をかけられて來るので御座居ました。

吾等の學校生活

十年の點景

0 學校行事
1 入學當時
2 花祭り
3 汐干狩
4 小運動會
5 日光へ修學旅行
6 夏休みの思ひ出
7 映畫會

8 遠足
9 餅つき
10 學藝會
11 雪合戦
12 高松宮殿下をお迎へして
13 鎌倉、江の島へ修學旅行
14 亡き恩師
15 十週年を前にして

學校行事

期 學 一 第					期 學
九	七	六	五	四	月
					日
<p>始業式 神武天皇祭 花祭(釋尊誕生) 天長節 靖國神社祭</p>					行事
<p>八十八夜(節分) 端午節句 海軍記念日</p>					行事
<p>時の記念日 入梅 夏至 本校創立記念日</p>					行事
<p>七夕祭 お盆 やぶ入 夏季休暇</p>					行事
<p>始業式・震災記念日・二百十日 乃木神社祭 氏神祭 秋季皇靈祭</p>					行事
<p>回顧展覽會・研究發表 身體検査・組長改選 後援會總會・幹事改選 職員參觀出張・父兄座談會 (隨時兒童誕生日のお祝)</p>					學校豫定行事曆
<p>學藝會打合會・研究發表 春季校外遠足・組長改選 クラス會 學業成績物廻覽</p>					學校豫定行事曆
<p>校外教授・研究發表 學藝會・組長改選 母の會・鍛練遠足 休暇課題打合會</p>					學校豫定行事曆
<p>定期成績測定・研究發表 大掃除・組長改選 諸帳簿整理 身體検査</p>					學校豫定行事曆
<p>休暇課題展覽會・研究發表 クラス會・成績測定物廻覽 校外教授・組長改選 運動會打合會</p>					學校豫定行事曆

期 學 三 第			期 學 二 第		
三	二	一	二十	一十	十
雜祭 地久節 陸軍記念日 修業式・春季皇靈祭	節分 紀元節	四方拜 新年宴會 ヤブ入	義士祭 冬至 大正天皇祭 クリスマス・冬季休暇	明治節 體育日 新嘗祭	東京市自治記念日 戊申詔書御下賜記念日 神嘗祭 靖國神社祭・教育勸語御下賜記念日
定期成績測定・研究發表 大掃除・組長改選 父兄會・諸帳簿整理 入學テスト・新學年準備	成績測定物廻覽・研究發表 母の會・鍛練遠足 入學テスト打合せ 組長改選	兒童新年會・研究發表 休暇課題展覽會 クラス會・組長改選 校外教授・風揚げ	定期成績測定・研究發表 大掃除・組長改選 諸帳簿整理 餅揚	校外教授・研究發表 休暇課題打合せ 雙啞教育會部會 組長改選・鍛練遠足	運動會・研究發表 職員參觀出張 學業成績物廻覽 組長改選

入 學 當 時

中・東 正 田 重 子

あまりよくおぼえておませんが、母から話されたのです。入學試験の日は、母に連れられて始めて學校へ参りました。母が「この子は、言葉を少しおぼえておます」と、ひげをはやした先生に話しました。そして先生が、お日様をさして、あれは何といひますか」と、いふ様に手眞似でやりました。私は初めの中は「いやだア、いやだア」といつたら、母が「そんなことが出来なければ、學校へあがけませんよ」としかりました。私は長くだまりこくつてゐた。先生は、もどかしさうに「何んですか」と、お尋ねになりました。それでやつとのことで「のさま」といつた。先生はうなづきました。今度は母をさして「これだれ?」「母ちゃん」といつた。それから目、耳、口といつたが、鼻だけはどうしても「ハナ」といはないので。始め先生は「これ何?」と自分の鼻をさすと、私は「オヂちゃん」といつたので、先生始め見てゐらつしやる先生まで、お笑ひになりました。勿論母まで……そして先生は私の鼻をさすと「シゲコ」と又いひました。それで先生は、花びんにさしてある花をさして、「これ何?」「ハナ」「さうさうよろしい」とおつしやつて、自分の鼻をさしてから、花をさして「これとこの鼻と名が同じです」と教へて下さつた。私はだまつてうなづくだけ。その時のひげの先生は、川本先生と平松先生だつたさうです。ついこの頃のやうに思ひましたが、もはや十年になりました。

今頃平松先生と、小松先生はどうなさつたでせう。一度お目にかゝり度いものです。あの頃の日比谷小學校のお友達は、皆大きくなられたことせう。私たちを、しんせつにして下さつたことを、今でもおぼえておます。

花まつり

初五・櫻 佐々 周

昨日はたのしい花祭りでした。私達の學校では、かわいい一年生から中等部の生徒まで、先生につれられて、花祭りの一行院と植物園に出かけました。父兄方も一しよに行かれました。少し勉強をして皆仕度をして、一年生から出かけました。途中には、まつしろな木蓮の花が所々に咲いてゐました。私達が並んで行くと、人が出て来て、遠足に行くのだらうといつて、見てゐました。だんく行くとい一行院につきました。

一行院では花祭りで、きれいにかさつてありました。造花の家のまん中に、おしやか様が右の手をあげて、立つていらつしやいました。誰もあま茶を三べんかけておがみしました。そしてあま茶をのみましたら、甘くてにがいでしたあまりおいしくありませんでした。はじめてあま茶の味が分りました。

一行院のそばに、相原先生のお家がありました。姉さんが出ていらつしやいました。皆あいさつをしました。姉さんは、お父さんがなくなりましたから、さびしさうな顔をしていらつしやいました。私はお氣のどくに思ひました。それからまもなく植物園につきました。

皆少しつかれてゐたので、芝の上で休みました。櫻の花はまだ咲きませんが、二三日たつと花ざかりになります。それから小鳥くじやく、七面鳥さるなどを見ました。子ざるはおせんべいを食べてゐました。人がたくさんゐるのでおどろいてこわがつてお母さんに、だかれてゐました。大ざるは外へ出たいのでせう。おりをゆすぶつて、らんぼうをしてゐました。

汐干狩

初六・椿 三間 績子

十二日はよい天気になつてくれる様にと思つて、五時に起きました。お母さんのお手傳ひがすんでから、私は支度をすまして、芳江さんのお父さんと四人で圓タクに乗つて、品川驛に集りました。それでちよつと待ちました。三番目の電車に乗りました。窓からくる風に吹かれながら、よい景色をながめてゐるうちに、向ふから美しい海が、かがやいて見えましたので、みんなよろこびました。

まもなく穴守驛についたからそこで下りました。それから穴守神社におまゐりしました。そして、つり堀のそばを通つて、茶屋に行きました。茶屋でおべんたうを食べてから、白い洋服と着かへて、汐干狩の支度をしました。

蛤を取りに行かうとして、浅い水たまりに入ると、足がぬるりとしきました。熊手で、砂をほると、蛤やあさりが出たので、取つて網に入れました。午後二時頃までとりました。旗の合圖を見てから、集つてみんな一しよにかへりました。

きたない足を洗ひました。又辨當を食べました。穴守驛でまたしばらく待つてゐました。電車が走つてきたので、すぐ電車にのつて、品川驛へかへつた。

それから、皆様と別れて、又圓タクに乗つてかへりました。家で蛤が澤山あるから、近所の家へわけて上げました。夜になつて、葱と蛤を煮ましたから、皆がおいしさうに御飯をたべました。少したつて、お風呂に入りました。大へんくたびれましたから、すぐねました。

小運動會

中・ゴブラ 高柳和子

毎月きまつて廿五日頃に、お晝から小運動會をやります。それは皆が體を丈夫にするためです。昨日は、その小運動會がありました。小さい生徒達は、大へんうれしさうな顔をして、元氣よく遊んでおりました。

先づ紅白に分れて、ウォーミング・アップをしました。初等部は三べん、中等部は四へん、運動場を廻りました。けれども小西先生は、大へん早く走りましたから、生徒は後から走つたので、すぐくたびれてしまいました。その次は徒競走でしたが、私は少しつかれておりましたから、困つてしまいました。がまんして走つても、負けて残念でたまりませんでした。

しばらくたつて、小さい生徒が、源平玉入れをやりました。白組の皆なが「白かつやうに、白かつやうに」と、一生懸命に應援しましたが、とうとう紅が二へん勝つてしまいました。紅の生徒は「バンザイ」と叫んで、よろこんでゐた。その様子が、大へんかはいくて、たまりませんでした。

今度、中等部の女は、四列づつならんでプロネードをしてから、「あやつり人形」のおどりをしました。皆なが一生懸命に見ていたのでせう。私もおどつたけれども、下手でした。

すんでから、父兄方の繩飛びが、はじまつた。平賀さんの家の姉さんも、とんで見えた、うまくとんで走られました。終りに芳賀先生の命令で、もとの位置に集つて、校長先生のおはなしがありました。

日光へ修學旅行

六年生 合作

學藝會があつた夜、十一時の汽車で上野驛を立つた。出發をする前に弟が「おみやげを買つてちょうだい」といった。僕はよしと言つた。遅刻をすると大變です。「岡澤真」汽車の中で皆面白そうに話合つてゐた。あまり嬉しいものだから何時迄も眠れなかつた。しばらくたつと眠つてしまつた。「東條尤子」日光へ着きました。自動車にのつて心持がよい。女の車掌さんは、色々説明した。僕は口が早いので困つた。馬返しへ着いた。「佐藤太郎」山をのぼりました。とうとうくたぶれてしまいました。「中の茶屋」でお茶をのみました。僕のお父さんは、とうとうびりになりました。「千葉利夫」道の兩側に白樺がはえております。「堀部庄太郎」白樺の間を通つて瀧見茶屋へ行きました。華嚴の瀧が見えます。「三部つる代」石黒先生が下の方にまだ三分の二あるといつた。つる代さんが「つばめ、つばめ」といつた。みてゐるうちに寒くなりました。「遠藤理夫」中禪寺湖へだんだん行く途中で湖がみえました。赤い鳥居が立つてゐます。「神道光子」水はきれいで、静かな波で（あつた）湖のそばの草の上に坐つてお弁当を食べた（小倉栄子）東に白根山がある。西に男體山がある。足尾銅山は南にある（安藤信次）それから私達は山道を下りました汗が出て呼吸が苦しくて、のどがかわきます（小俣由耶）東照宮へお参りしました。僕等が手をたくと天井が「ころ／＼」となつた（秋田寛二）龍がなきました。先生はきこえましたが生徒はきこえなかつた（太平はる）ゆかには、ねずみが居るでしょう。「遠藤理夫」五重の塔が雨のふつたために、うつくしく見えました（岡澤真）一等美かつたのは陽明門で、珍かつたのは鳴龍です。かわいいのは眠猫でした。参拜がすんでから、今度は神橋をみました（東條尤子）行きは大谷川の水がきれい

でしたが、雨がふつた爲に、にごつていた「倉持利平」それから御土産をたくさん買って皆自動車につつて、日光驛へつきました（家原敏子）僕が眠つてゐた時に「おきなさい」とゆすぶられたので、とびおきました。上野驛です（堀部庄太郎）かいさつ口を、出るとお父さんやお母さんや校長先生がむかへに来て下さいました。大そう寝むような顔をしてゐるねエとママさんがお笑ひになりました。つかれたが楽しい遠足だった（國廣道子）

夏休みの思ひ出

中・ゴブラ 栗本清次

七月廿六日午前七時頃、東京驛で、東京市立豊學校と、東京豊郷學校の生徒と先生が集りました。汽車にのつて横須賀に向きました。途中横濱で、アイスクリームを買つて飲みました。大船を過ぎて、やがて横須賀驛に着いた。

横須賀驛の前には、大きな軍艦が、澤山集つてゐました。私達は、しばらくの間、よろこんで軍艦を見てゐました。それから黄バスに乗つて、馬淵豊郷學校寄宿舎につきました。寄宿舎は大そうきれいであつた。お家の中へ入つて、少しお話をしてゐた。午前九時頃、學校の講堂へ集つて、校長先生の挨拶がありました。校長先生の御話は「七月二十六日から八月八日まで、臨海學舎をします。みなさんは、仲よく遊んで下さい。」といふことでした。みなさんはすぐ寄宿舎の食堂へ行つて、御馳走をいたゞいた。

おひるから、僕等は自動車にのつて、大津海岸へ出かけた。海へ入る仕度をして、よろこんで海へとび込みました。みんな面白く、海の中を泳ぎ廻りました。三時頃終つて、御馳走をいたゞいて、ひるねをした。午後五時頃、黄バスに乗つて、寄宿舎へかへりました。早速、お風呂に入つて、體をきれひに洗つた。夜は將棋をして、たのしく遊ぶ、

床の中へ入つたのは、八時頃、床の中で少しお話ししてゐたが、いつの間にかねむつてしまつた。

映 畫 會

初・五・極 栗野政子

今朝は雪がさら／＼ふつてゐたので、とても寒いでしたけれども、今日は學校に活動があるので、ほんとうにうれしくてたまりませんでした。又おせつくなので、學校の講堂におひな様が、かざつてありました。まもなく講堂で活動がはじまりました。一番はじめにスキーの活動でした。おとなが四人でスキーをしてゐました。すこしもころびませんので、うまいと思ひました。山もたんぼも雪がまつしろですから、大へんけしきが、よろしうございました。それから、日本と支那の戦争の活動を見ました。小學校の教室で、男の生徒が二人で、兵隊さんにおけるお手紙を書いたので、先生は大へんよろこびました。男の生徒は、東京驛に兵隊さんをおむかへに行きました。兵隊さんが「この間お友達の兵隊さんが、戦死しました」といつたら、先生や男の生徒たちは、びつくりしてかなしみました。私もすこし泣きました。活動の中で、一番面白かつたのは、ロイドです。皆が笑ひました。活動が終つて、ろうかに出たら大へん寒いでした。ストーブに石炭をくべましたけれども、中々もえません。べんたうをたべる時、つめたくてたまりませんでした。外はすっかり雪がとけてしまひました。家に歸つてから、母さんに活動のお話をしながら、あられをたべました。

遠足

中・根橋 川野 榮子

五月八日は私達の學校の遠足でした。朝八時半學校に集りました。一同整列して學校の門を出て、辻町で電車をまぢました。しばらくたつてから電車がきました。小さい方の生徒からのりはじめました。一ばん終りの電車にのつたのは、それから十分ばかりあとでした。

上野廣小路であり、萬國婦人小供博覽會まで歩きました。會場にはいつてから、先生の案内で、あちらこちら見物いたしました。それがすんでから、上野動物園に行きました。すぐおべんたうを食べました。お茶もお水もないので困りました。

動物をみてすつかりくたびれました。今日は大分暑いので、涼しい木の下で、お母さんとサイダーをのみました。ほんとうにおいしくのみました。二時二十分動物園の裏門にあつまりました。それから、池の端のはくらん會へ行ききました。ここでも伊東先生の案内で、みせていただきました。みんなめづらしいものばかりでした。足もこしもすつかりくたびれてしまひました。四時半、先生やお友達にあいさつをして、お母さんと一しょに自動車にのつて、お家へかへりました。今日の遠足は目も足もつかれましたが、一ばんゆかいでした。

餅つき

初・六・山茶花 平賀 榮子

今日は餅搗です。朝いそいで學校へ行つて見ると、講堂に餅つきのしたくがしてありました。まはりにまくがはつてあつて、まん中に臼が二つ、すこしはなれたところに、釜が二つならべてありました。そのかまどから、なゝめに煙突が出てゐるので、へんなかつかうでした。臼のまはりに、ごさがしいてありました。このごさの上で、生徒が餅つきをみたり、お餅をいたゞいたりするのだらうと思ひました。

朝禮がすんでから、勉強してゐると、太郎さんがむかひに來ました。先生につれられて講堂に行つて見ると、お餅をついてゐる人や、お餅をもんでゐる人で、にぎやかでした。さつき見たお釜から、さかんにゆげが出てゐます。まもなく中等部二年の生徒がお餅をつきました。大へん上手でした。それを見てゐる時、白いお餅を二つと、きなこ餅を三つづつもらひました。先生は「白いのはなんですか」とおつしやいました。「白いのはおそなへにするのです」と誰かが答へました。

私の組からも搗く人が、三人出ました。はじめ横田先生から、つく形を教はりました。その時は大へん上手でしたが、ほんとうについてみると、あまり上手ではありませんでした。新ちゃんの番です。眞赤な顔で、きねをふり上げたと思ふと、力を入れてうちおろしました。するとうすのふちにあたりましたので、きねがまがつてこねどりをしたるた吉信先生が、びつくりなさいました。新ちゃんはずく、赤い顔をしてゐましたが、又きねをふりあげました。こんどは上手に出来るだらうと思つてゐたのに、又臼のふちをうちましたので、吉信先生が「あぶないからやめて下

「さい」とやさしくおつしやいました。新ちゃんは席へついてからも考へてゐる様なかつかうをしてゐました。「ほんとうにやると、むづかしいのですわ」と、思つてゐるだらう。もうお正月がきます。私の田舎のお家でも、お餅をついたと思ひます。白いお餅をみやげにもらつてお家へかへりました。家へかへつてから、お餅の話をしてねました。

學 藝 會

中・銀木岸 松 山 繁 夫

今朝私は少し寝坊をして驚いて起きた。そして、戸を明けて、空を眺めると、天氣がよくて氣持がよい。僕は思はずニコニコした。それから學藝會へ行つた。兒島さんは學藝會のプログラムを配つてゐて、私もそれをいたゞきました。プログラムは仲々面白さうである。私と飯田さんと二人で色々のお話をした。それから鐘が鳴つて、一同が運動場に集りました。そして校長先生が今日は學校の創立第九回の記念日ですとお話をなさいました。それから大野先生のお話があつて、國旗を掲揚した。國旗はヒラ／＼動いてゐます。私共は日本の國旗は立派である。自分の此の日本人であるのを大層うれしく思つた。それから學藝會が始まりました。

校長先生がお話をして下さいました。皆が校長先生のお話をきいて、手をたゞきました。やがて色々一年の子供の遊戯などがあつて、それから五年の、忠君愛國の西南の戦がありました。大變面白くありました。次ぎは、中等部ボブラ學級の紙芝居で、柏崎さんがしましたが、お話が上手で面白くて皆が大笑ひしました。次ぎはなか休みの挨拶を中等部カラタチ學級の生徒がお話をしました。

お晝のお辨當を皆がいたゞいた。今日は卒業生達が澤山きました。中には僕と仲よしの日比谷君も来てゐたので、色々珍しいお話をして嬉しかつた。それから又午後の學藝會が始つて、六年生の挨拶があつた。その次ぎは三學年の學校に行くまでの劇があつたが、大層上手で大笑ひしました。それがすむと皆が萬歳を三唱して閉會した。皆がニコ／＼してゐます。それから教室で、高松宮兩殿下賀陽宮兩殿下の御寫眞を頂いて、嬉しくかへりました。僕も來年ももつと勉強して、學藝會に出て見たいと思ひました。

雪 合 戦

中三・鈴懸 岡 澤 貞

此の間の朝目をさますと、部室の中が大へん明るいのできつと雪が降るのだらうと思つて居たが、いつかの朝も少し雪が降つたから、今日もそうだらうと思ひだして又ねた。すると弟が「大へんだよ。雪が澤山降つて居るよ」と言つたので、僕は飛び起きてカーテンを明けて見ると、外は眞白な銀世界だ。嬉しくてたまらなかつた。今日が初めての大雪だから嬉し過ぎて顔も洗ふことを忘れてお母さんに注意せられた。あまりいい雪なので窓を明けたまま雪をながめながら、御飯を食べた。まだ雪が降りつづけている。もつと雪が澤山降つてくれるといいのに」と思ひながら學校へ出かけた。来て見ると二三人の友達が「今日は澤山積つたから大塚公園で雪合戦をやるかも知れない」と言つてゐるので、僕も多分そうだらうと思つてやりたくなつて來たような氣がしました。一時間目の授業が終ると間もなく芳賀先生が來て、石黒先生に何か言つた。あつ「雪合戦をやる」と芳賀先生が石黒先生に言つたに違ひないと思つた。芳賀先生が僕の教室から退ると僕が「早く雪合戦をすればいいのに」と獨言を言ひながら思はず手をにぎりし

めました。すると石黒先生が「雪合戦をやる」と元氣よくおつしやつた。僕の希望がやつと叶つたと言つて大へん喜んで用意をして運動場へ出て、初等部から中等部まで長い行列を作つて大塚公園へ向いました。そこで紅白に分れて對陣することにした。雪合戦をやる前に番外として鈴割があつた。兩軍とも必死となつて鈴を目がけて雪の弾丸で割ろうと意氣ほひよく投げた。遂に紅軍の方に凱歌があがつた。今度はいよく雪合戦だ！雪合戦の火ぶたを切ろうとする芳賀先生の開始の號令を今かくと待ちかまへて居たら號令がさつと上つて火ぶたは切られた。兩軍も雪の弾丸をぶつけ合つて、手に持つていた雪の弾丸がなくなると、又雪の弾丸を作ろうとする時に、僕の首に誰かの爲にぶつけられて體の中に入つたので「アッ!! つめたい!」と言ひながら體の中から出そうとすると、又足をやられたころんだ人もあれば、敵のために顔にぶつけられて「ワッ!!」と泣き叫んだ友達も有つた。兩軍も入りみだれて戦つて居るうちに、僕も五六發ぶつけられた。手のつめたさも忘れて夢中になつて、二時間餘もつづけて雪合戦をした。間もなく雪がやんでしまつた。戦は遂に引分けとなつて休戦して別れた。僕の衣服もべた／＼すぶぬれになつて學校へ引上げた。その途中雪の新しい所を取つて丸く固めて空へ投げて見たときは大へん氣持がよい。本當にたのしい雪合戦も無事に終りました。又やりたいがもう雪は太陽のために照らされてとけはじめたので役にたたん。本當に惜しいですね。その雪合戦は今でも思いだして忘れようと思つても忘れられません。

高松宮殿下を迎へて

中・鈴懸 東條 允子

去る十一月三十日、かしこくも高松宮殿下が、私共の學校へお出でくださいました。殿下は大正天皇の第三皇子で

あらせられ、又天皇陛下のお三人目の弟様であらせられて、昭和五年二月四日に、お美しい喜久子姫を妃殿下におむかへあそばされました。

兩殿下がお出になられるときまつた前日は、教室の中をきれいにするやら、運動場や花園をていれするやら、教室をかわるやら講堂のお掃除をするやらで、校内はさわめいておりました。又うわぎを着てゐない先生や、づぼんのすそをはしよつた生徒が、せわしそりに廊下を行つたり來たりしてゐました。翌日の晝になるとどうでせう。まるで別の學校ではないかと、あやしむほどになりました。いよく兩殿下がいらつしやいます時刻になつたので、私共全校生徒は、規律正しく校門から玄關へすりと並んで、しばらく待つてゐる。その待ち遠しさ。まだかく／＼と首をながくしてゐました。そのうちに兩殿下のお乗りになつた菊の御紋の入つた自動車が、先づ校門をすべつて、運動場の中へ入つてきました。其の時の私の心持は、どんなでしたでしょう。

兩殿下の自動車だけでせうと思つてゐたら、後から後からとつゞいて自動車がくるので「一體誰が乗つてゐるのだらう」と思つて、一寸頭を上げて見ると、其れは何時か、華族會館でお會ひした方で御座いました。

兩殿下は自動車から、お下り遊ばされて、先づいらつしやつたお室は休けい室でありました。其所でどのくらひお休みになつたかは、はつきりしませんが、ほとんど五分間ぐらひだつたとぞんじます。それから大池校長先生の御案内で裁縫木工體操とぢゆんぢゆんに御覽になつて、ついに私共の勉強を御覽に教室へ入つてゐらつしやいました。其して私共の勉強を、一生懸命にお聞きになつて、下されましたと思ふと、私はほんとうにありがた涙がながれるほどでした。もう勉強を御覽あそばされてしまつたので、最後に私共の學藝會を御覽下さいました。お歸りはお出でになつた時の玄關ではなく、もう一つの玄關の前へ自動車が待つてゐるので、それとわかりました。皆は前と同じように、ならんでお歸りのあいさつをいたしました。

たが、私は學藝會をしてゐたので、運動場へ出る暇がなかつたので、御あいさつ申し上げる事が出来ませんでした。せめてお歸りにもお目見えして、いつまでもお顔をよくおぼえておきたいと思つたのに、本當に残念なことでした。普通の小學校よりまけてゐる私共の學校へ、特別にこんなえらい方がお出下さいましたのは、本當に涙が出るほどありがたいと思ひます。私達は耳が聞えぬのは不幸です。全く不自由だと思ふ時もあります。けれどもいや／＼本當に、私共はなんと幸福者だらうと、しみ／＼今日は感謝いたしました。

鎌倉江ノ島への旅行

初六・葡萄 金子 悦三

今朝は五時十五分に起きた。お父さんに東京驛まで送つて行つていただいた。小川先生は僕達の遠足にはいらつしやらなかつたが、東京驛送つて下さつた。電車で、鎌倉についてから一番先きに鶴岡八幡宮に参拜した。社の石段の側にある大きな銀杏の木について色々とお話を聞いた。そこで寫眞にうつりました。

それから頼朝公のお墓を参りして、鎌倉宮に行つて、土牢のお話を色々聞かせていただいた。それから昔、武士が使つたよろひ、かぶと、やり、刀など澤山ある國寶館に行き珍しい物を澤山見て大そう嬉しうございました。そこを出て電車にのり、長谷に行き大佛様を見た。大きな大佛様の體の中に入つて見ました。それから片瀬の海水浴場の方へ行き、御晝の御飯を食べた。

それより江ノ島迄歩いて行きました。そして江ノ島の辨天様にお参りをした。いろ／＼な店がありました。暗い長い穴の中を、ローソクをつけて歩きました。面白くありました。しばらく海岸で休んで寫眞をとりました。そこで柿

を買ひました。日がそろ／＼暮れかゝつたので急いで藤澤驛まで行きました。驛で繪葉書やようかんをおみやげに買った。藤澤驛より汽車にのつて東京驛へかかりました。小川先生は又お迎へに来て下さつた。それから元氣な皆とわかれて家へかへつた。

汽車の中でバラ／＼降り出した雨は東京驛で解散する時は、大雨になつて皆困りました。僕は家の人に色々、鎌倉のお話を聞かせてあげました。とてもくたびれました。しかししたのしみの一日でした。

亡き恩師

中・粟 西卷 周文

三月の初めごろまだうすら寒い日であつた。廣田君、中山君、濱野君、僕の四人で、小石川雜司ヶ谷町帝大分院に恩師をお見舞に行つた。そして内科十二號の部屋に看護婦の案内で入つた。

見れば先生はベットの上に静かにねていらつしやる。腕も體もやせて、頭の毛がうづまつて悲しさうな姿をして、いらつしやりました。先生はねたまゝ喜んで「ありがたう」と一言づつ静かに言つて、苦しさうであつた。僕は五分間位だまつてゐた。それからこの部屋を出て、お家へかへつた。

翌日、お家で勉強してゐると、女中さんが先生の死の知らせの手紙を持つて來た。僕は慌てる程驚いた。なつかしい恩師が逝つたのを悲しんで力を落した。

先生の家で、悲しい告別式があつた日、家の前に花輪が、六つ七つ並べてあつた。僕等はいとうをぬいで中へ入つた。先生の亡骸の入つた棺の前の小さな机の上に、線香がゆら／＼と上つてゐる。そのそばに奥さんが、紋附を着

て涙を流して、ハンカチを目にあてていらつしやる。多くの人々が坐つてゐた。僕は悲しい氣持で、黙禮して退いた。それから外で、ズラリと整列して、告別式の終るのを待つてゐた。三時に告別式が終ると、棺は自動車の中に入れられ、上にも花輪がつけられた。恩師の亡骸をのせた自動車は、日暮里へと向つた。後からつゞいた見送りの自動車が五臺程、静かに走つて行つた。

悲しい恩師との別れ、いつも思ひ出すのである。

十周年記念日を前にして

中・鈴懸 東條 允子

若葉かほる初夏の頃となりました。

今から十年前の丁度今頃「おぎやー」とうぶ聲元氣よく私達の學校が生れたのでした。

お七夜の祝をして早もう十年になる、それがすなはち十周年記念日であります。

人間の十歳はやうやくものをおぼへ、自分で自分の事をする事がわかつたような、まだくゝ小さい赤ちゃんぐらひしかないのに、學校の十歳といへばもう立派に成長してゐるのです。我等の學校はこれまでもたびくゝ光榮にあづかり、又今日も代表者が東郷元帥の靈前におもむくことが出来たのをどんなに光榮にしてうれしく思つたことでしょうか。

此れも皆諸先生方のおかげでありますと、同時に自分達も努力したからではないかと思はれます。

いゝえ眞の光榮にあづかるにはまだくゝ遠いのですからこれからもつとくゝ努力せねばなりません。

此のうれしい十周年記念日を皆してお祝ひませう。

「東京市立聖學校バンザーイ」と聲高らかに。當日學校ではお祝の他、學藝會や展覽會が行はれることに決定してゐます。

裁縫科の方ではバザーをひらき多くのお客様をお招きすることとなつてゐますから、今からそのお支度で目のまわるほどいそがしい。

一昨年も去年もつづけて私は賣子の係となりました。

まだこんな仕事になれてゐない私達ですから、お金の計算に時間をかけて大笑ひです。

今度の賣れ行きはどうであらうと今から豫想してゐる。

自分自身でつくつたものを買つてもらへた時のうれしさは口ではいへないほどです。

とにかくうれしいくゝでやたらにうれしい氣がします。

當日は何事もなくただ愉快にぎやかにやつて通すことが出来るように祈るばかりであります。

回顧十年の道標

私ども父兄は吾がいとし子をこゝにお預け致して
その年々の所感を一、二篇づゝ寄せさせて頂き
「十年の想ひ出」を點綴して、全先生への
感激の歌いたします

開校十周年記念祝詞

後援會理事長 後藤 順 一

凡そ世を擧げて何が一番六ヶ敷かと云へば、私はそれは事業の創始であると御答へしたい。特に人文社會發達の上から最も難事中の難事業は、教育方面では雙教育が一番面倒であると思ふ。之れは其創めに方り範を歐米先進國に取らねばならぬための關係もあつたが、兎も角永年の間殆ど顧みられざりしたため、幾百人の可憐なる兒童は等しく聖代に生を享けながら其恩恵に浴するを得ず、不遇をかなしみつゝありしに東京市當局の發意と徳川侯の御激勵によりて本校は創立せられ、早くも茲に十周年を迎ふるを得たるは誠に感謝の至りに堪へませぬ。

本校も其創立にあつては幾多の難問題が山積し非常に御苦心を要された事と御察し致す次第ながら、其間事業を擔任せらるゝ諸先生の一方ならぬ御奮勵御努力によつて、遂に其教育法を完成せられ、模範的な良い學校として一般から認識せらるゝに至り、其卒業生も亦新時代の教育を受け、一般人と變らぬ迄に育成せらるゝに至りし事は實以て驚異に値するものと深く其進歩發達の勞を謝さねばなりません。乍併先途を望見すれば現在は漸く十歳の少年になつた許りで成年に達する迄にはまだく遼遠であります。

従つて今後猶益々容易ならぬ御苦心の存するものある事は御推察申し上げるところですが、教育上の問題は私共の信頼する諸先生をして後顧の患なからしむる様、後援會の事業に是れ没頭して大に盡さねばならぬと覺悟して居る次第であります。

何卒會員各位の御理解と御同情を頼みて其責の一端を果したいと思ひます。

創立拾年の感想

〔創立第一年〕

中・四 馬場 幸七

回顧すると大正十四年東京市立聾學校が創立になつて、爰に十年の星霜を経ました。當時は日比谷小學校内の假の宿で中澤校長が兼任で平松小松伊東の諸先生、下谷の分校には相原先生が主任として入學試験が行れ、合格者が第一期生として、日比谷卅六人下谷が二十四人許可せられました中に私の三男潤之助も加る事が出来ました。當時親として私夫婦の喜びは譬へ様もない嬉しさでありました。昭和二年現校長大池先生が専任校長となられ、續て昭和三年日比谷の校舎から離れて大塚の現校舎に移りまして、校長始め諸先生方の御熱心且つ慈愛のこもりし御教育によりまして、茲に十年無事に中等部四年となり、一通り世渡りに不自由のない程度迄御教養下さいました。其上木工教育を下さいました御蔭で近來親戚知人から後から後から注文がたへない程あります。最も學校の餘暇に造る爲早く出来上りませんが、商賣人が造つたより叮嚀で細工が細かいと云ふ評判で、本人も殊に之れに興味を持って、楽しみに仕事を致して居ります。卒業後は専門家に就て修業させたら此道で世渡りは出来るだろうと思ふ處迄になりました。之れ偏に十年の長い月日先生方の御慈愛あり御熱心な御指導の賜と、茲に十年の祝賀會を擧げるに際し、心底から深く感謝の意を表する次第であります。終に創立當時功勞ある相原先生が昇天せられ爰に居まさざる事を惜しむ次第であります。

回顧

〔創立第一年〕

中・四 濱野 貞子

子供の入學を心配致しましたのも昨日今日の様に思はれましたが最早十年の長い日月は夢のように流れて明年は中等部を卒業させて頂けるやうになりました。丁度長男が十二歳の春本校創立第一の生徒募集が御座いましたので早速入學を申込みましたところ志望者多數の爲入學試験との事に長男をつれまして日比谷小學校へまゐりました。種々試験の後漸く入學を許され車坂と日比谷に別れ長男は日比谷の組でございました。

一週間ほど私がつきそつてまゐりましたが組の中に御二人ほど他の學校より轉校なされた方が御出でになり先生の仰有る事がよくおわかりになるのに驚きました。

當時讀話法と申す事をすこしも存じません私はとても長男は覚えかねる事と心配致してをりました。

嗚呼、あのお子さんのやうに一言でも物が申せたならどんなに嬉しい事かと實に御うらやましく存じておりましたが一ヶ月二ヶ月と通學致しておりますうち、テ、アタマなどゝだん／＼覚えてまゐりました。

其時は實に／＼うれしうございました。もうこの頃では何かと話を致す様に相成り誠に有難く一同よろこんでる次第でございます。これも偏へに先生方の御蔭さまとありがたく存じております。

入學當時よりの想出

〔創立第二年〕

中・三 安藤 はな

想へば今より九年前私共の子供は十歳になつても入學は出来ず、他の子供さん方は七八歳には小學校へ入學されるのを見るにつけても私の心ははりさくる様でした。或日新聞紙上で東京市が舞學校を設立された事を發見致しました。それから日比谷に参り、校長先生にお願ひして毎日の如く學校へ參觀に行き、家に戻つては子供に教へましたがわかりませんので困つて居りました。三月の入學テストを受け學校より入學許可の通知を手にしました時の家庭の喜びは一方ならず、親族他人に至るまで喜びの御言葉を頂戴致しました。

入學後は毎日子供と共に學校へ参り、手に汗を握つて參觀致して居りました。一番最初は聲の出し方、朝は授業の始る前から發音の練習、先生があれだけ御熱心におやり下さるのに親の私としてどうして其まゝで居られませう。家に歸つては子供のいやがるのをただめたり、叱つたり、上手に出来た時は褒美を與へたりしました。ごく薄い布で作つた小形の旗等でハバ行の練習を先生から教へて頂いて來て其の練習、私ばかりでなく時には父とやり、又弟等ともやらせましたが私共の子供はカ、ハ、サ行が殊に出来なかつたものですから、先生はどの位御苦心なされたことか今でも頭の中に其當時の有様がありありと浮んで参ります。私も及ばず乍ら、幾分なりとも先生をお休めしたいと思ひ家では毎日の復習、追々發音も出来る様になりました。學校へは市電で往復致して居りましたが、停留所にて電車を待つて居る間でも、電車或は自動車等が走つたり止つたりしてゐるのを見た時は、今どうしましたかと尋ね、又電車の中でもつりかはとかリンとか電車の中についてゐる物の名を教へて居ますと舞兒と言ふことの知らぬ他人は、變な

顔をして見て居ましたが、私は子供をどうかして他人とお話の出来るようにしてやりたい一心で、他人の笑ふことなど少しも氣に止めなくなつていました。又よいお天氣の時には時々日比谷から青山迄歩いて歸つたことも御座みますその時には道端に咲いていたタンポポ、スミレ等を取つては名前を教へ乍ら戻つたことも度々御座りました。入學致しましてから今日に至る迄の先生方の御熱心は私に取りましては何んとお禮を申し上げてよいか、今こゝで筆にもなにもあらはすことの出来ない程、身にしみこみ一日たりとも先生方の御恩は忘れることは御座りません。

拾周年記念を迎へての感想

〔創立第二年〕

中・三 栗本 吉太郎

御校創立以來拾年を過ぐるとは、月日は流るゝ水の如くとやら、實に年の重なるのには今更乍ら、全く感慨無量であります。

親として子を思ふ心は本當に切なるもので這へば立て、立てば歩めの親心で、齒がはえた。何云ふのかわからぬがあゝあゝといふ子を見て嬉しくて、たまらないのが、子を思ふ親心で、子が親を思ふか思はぬと二つを比べての思ひでなく可愛くて／＼ならぬ切實な情愛であります。その限りなく可愛い子供が生後の過ちとはいへ、言語を發すること不能な状態となつた様を見る親の氣持は何としても、口にも筆にも到底表現することは出来ないであります。そして入學期となると世の中がいかにも、せまくなつた様で、人知れず涙を流し或時は世の中に、いや氣すら生ずる次第であります。かゝる時特殊教育機關の設備があることを知り一段の光明を得て、實に言ひ難い樂みを持つのも親心であるのであります。私の子供も御校の兒童として通學させて頂いて、最早十年近くになります。思ひ返すと勿體な

く深い有難味を感じて校長先生始め、受持先生及諸先生方に一層感謝の意を強め尙學校經營の東京市に對しても、重ねて有難く御禮を申上げ、而して教育の偉大に感泣して居ります。此度十年記念を迎へらるゝに當り眞實勿體なく嬉しく、呉々も御禮を申上る外御座りませんが、顧るに御校は日比谷小學校に併置されしも、世の要求切なるものがあつて、豫定を早められて現今の所に獨立し、少數の兒童ではあるが年齢、智能等、あらゆる點相違する被教育者のため裁縫手工技術の方面等種々なる設備を致されて不完全なる者のために育英して下さいますことは一面世の進歩であらうが、私は人類愛の御思召しを無限に感銘致します。

終りに、校長先生初め創立以來教へ下さいました先生方に、新なる涙と共に御心勞と御骨折を、手を合せて感謝致し、新任の先生方に於かせられてもなんとなく御氣持のすぐれまさは多いことと存じますが、校長先生などの御體験を御聞き下さいまして、特殊人類の向上と社會の進歩の爲、技能發展の爲、どうか萬事萬端よろしく御願ひ申したいといふのが、不憫なる子を持つ親の心であります。

聊か思ふまゝに書かせて頂いて御校の十年記念を心から深く御祝ひ申上げます。

回顧と感謝

〔創立第二年〕

中・三 岡 澤 貞 次

長男の貞が、校長先生の御厚配によつて、入學を許されてから早くも足掛け六年、それは昭和三年九月の新學期でありました。轉校の關係で、初等部の三年から御厄介になつたのでございます。實は前の學校にも、幼児の間から早く調育に預つた恩誼には衷心感謝しながらも、本人の長い生先きを慮つて、敢て當校へ御世話願つたのであります。

した。幸にも、無事に初等科を卒業、去る七年の四月から中等部に進級せしめられて、今日に及んだのであります。が、其間、校長先生初め諸先生の並々ならぬ御薫陶の御蔭で、兎も角同窓の諸君と共に、日々學業にいそしみ得るゝるのは、親として泌み／＼感銘に堪へない次第であります。

一體普通の子供と違つて、嬰兒の調育は全く家庭にとつては容易ならぬ苦勞で、殊に本人の性行を觀察しつゝ、これを善導して行くことは、人並みの母親としては多大の負擔です。

かゝる多大の困難に打克つて、絶えず専門的な御研究と考察の下に多數の兒童の調育に御骨折を願ひつゝあることは、全く其の御苦心に對して敬服と感謝の外はないのであります。かくて追々學業の進境が認められ、讀書の力によつて、あらゆる事物に對する本人の理解が擴がりつゝあることは眞に有難い事です。

今後引續き一層の御調育と御導きに預りますならば、やがて、よし普通の人間には及ばぬまでも、自ら社會の一員として何等かの方面で、自立し得るの素地が作られることゝ、近き將來に於ける希望と樂しみを以て、家庭に於ても及ばず乍ら、一意學校にての御盡力と相俟つて、一層本人の將來を明るくしてやりたいと存じてをります。

十週年の記念に際して回顧と感謝を新たに諸先生の御健康を祈つて筆を擱きます。

入學當時を回顧して

〔創立第三年〕

中・二 長 谷 部 松 子

私の妹が入學した當時は未だ此學校が此處へ来る前の日比谷小學校内に在つた時でした。あの頃は未だ雙學校でなく日比谷小學校の二階の教室で勉強してゐました。

當時は相原先生もいらつしやつて涙ぐましい程先生方が御熱心に教へて下さいましたが、何しろ入學したばかりの妹には可なり無理のやうでしたが、一心になつて共に私も學び教へまして、學校より歸宅しては、他事には構はず妹につききりでアーイーウーエーオーキヤキユチャ等の發音ばかり繰返し、幾月勉強したか、教へる先生も教へられる児童もそれはく、夢中でした。

當時は先生方も少數いらつしやつたのでなか、教へるにも御多忙で御氣の毒でした。

今日の様に校舎も完備し先生方が澤山いらつしやるのに比べてあの頃とは何と云ふ相違でせう。

妹も此頃はあの頃から思ひますと非常に成績も良くなり、最近では、新聞に大きな文字が出ると何であるか教へて下さいと言ひ、お話をすると解るまで何遍となく聞くやうになつて知識慾が盛んになつて來た様です。

只今中學部の二年ですが今後はずつと御世話になる所存です。本當に先生方の御熱心なる御指導による賜であると父母も感謝致し以後も非常に期待してをります。

學校も市立となりお優しい人格者大池先生を校長に戴き諸先生も多數迎へられ校舎も増築され眞實に何と云ふ喜ばしい事です。

創立拾週年記念式を迎へて

〔創立第三年〕

中二 平賀城太郎

我が東京市立豊學校の創立されてより、十年になります。世の中は進んで参りましたが、永い間豊者は手眞似文字にて自分の考へを發表し、生活をしてきました。幸にも我が豊教育に口話法が採用され、同情すべき豊兒達も

話言葉によつて思想の交換が出来るやうになりました。斯る子を持つ親の喜びは、どうして筆舌で表現することが出来るでしょうか。何卒將來とも御愛護御指導の程伏してお願ひ申します。

弟の入學時代を追想して

〔創立第四年〕

中一 金子美代

弟は昭和三年入學目下中等部一學年に居る者で御座います。入學當初より家庭に於て面倒を見て居りますので入學當時を回想し、率直な考を申述べて見たいと存じます。

(一) 少くとも入學一ケ年は事情の許す限り、子供に最も關係の深い者が附添ひ擔任先生の探られる教授法を會得し、是れを家庭に延長して定時の外隨時隨所に復習させる事は能く子供に力付けると相俟つて勉強の美風を涵養する上に必要の事と思ひました。

(二) 學校と先生は、第一に良い所、第一に頼るべき人であるとの考は入學時子供の必然懐く事ではありますが、より以上に此の考を深める様に仕向ける事が緊要と思ひました。

(三) 各性質を異にさせようが、概して此種の子供は我執頑固のもですが、日常怒るとか、威を以つて抑制する事は良くないことで、殊に入學の當初は四圍の事情が變りますので子供の心境に變化も多い事ですから心して聲に仕向けて遣るべき事でした。

(四) 此種の子供は多く偏頗な團結力を持ちます(例へば自分の組は一團に自分の組丈けと云ふ工合)が、此の考を一步進めて學校全體に及ぼすべく普遍的に指導する様に致しました。

以上は大略一學年當時私の試みた方針でありました。茲に最も必須の事柄は子供に就いて不斷の努力下さる先生の御苦心御丹精に對し親であり兄弟である私共家庭の者が、老幼一致多少たりとも先生方の御手助になると云ふ心懸けを忘れてならぬ事であると存じます。

〔附記〕弟は今でも嫁ぎました姉と時々文通致して居りまして、姉より廻送して來る手紙を見ますと文章も相當立派に出來要領を得て居ります。六年の過去を顧みて今日有るを想ふ時先生方御努力の賜大なる事を感じて居る次第で御座います。

眞に偉大なる教育の力

〔創立第五年〕

初六・楠 齋 藤 曉 之 助

去る大正十三年の然も新緑の砌明治神宮に參拜しての歸路、ブラ／＼新宿二丁目に差し掛つた時、フト自分の眼に映じたのは古びたれども立派な玄關構へ某聾啞療院（特に名を秘す）の看板、其の側には「聾が物を言ふ」と題せる見出しの下に、新聞半頁大の印刷物が額に收められて掲げられてあつた。

二つの時に腦膜炎を患ひ、多大の勞苦と物資とを費し、森主治醫と瀬川博士の熱誠なる治療によつて、辛くも一命は取り止めたものの、爾來後天性聾啞者となりし自分の後を相續すべき長男の日出男といふ不具の子供を持つ自分として、何で之が強く感ぜずに居られませうや。當時私はやまと新聞社の販賣部長を勤めて居つた關係上、人を介して調査して貰つて、有力なる確報を得た。自分は早速に此の醫者先生を訪問して熟談を試みた處が、必ず自分が研究せる治療法に依つて、物を言ふ様にして遣るとの事に子に甘い親の常でせう。嬉んで入院治療を受けしむる事にしたのであります。五月六月七月と入院三ヶ月、其間大手術を受けしむる事七回、自分としては凡てを傾注して之に當つ

たのであつた然るに其の結果は遂に何の効果もなく、徒らに貴重なる時日と心勞と數千金を費したのに過ぎなかつたのであつた。其の時こそ私は、世の中に神も佛もないものと、熟々と秋風の身にしみるのを覺えたのであつた。

其れ以來既に自分達は、此の子に對するの前途を悉く諦めて居たのであります。偶々社の文藝記者が、東京市立聾學校は教授方法も進んで居り充分信頼し得らるゝから學期替りに、入學志願をなされてはどうかとの事に總べてを同氏に依頼して其の手續を取つて頂きました。時は昭和四年三月の入學試験に、九十餘名の志願者中、二十八名の合格者中に交りて幸に我が日出男は、入學を許可せられたのであります。

以來自分は、毎日毎日社の時間を繰り合せては、學校に立ち寄り參觀して居ると、受持の小竹先生がいと熱心に、アイウエオ、と母音の發音法や進んでは、イヌ、ネコ、ウマ、トリ、ウサギ、といふ様な具合に、玩具の物體を示しながら、お話の稽古から書き方の教授、第一學年の一學期終了の時分には完全に、オ父サン、オ母サンから今日ハ、オ早ウ、左様ナラまで、片言ながら判明する様に言ひ表はすのみならず、イロハ四十八文字殆ど記憶するに至つた時、私は、眞に偉大なる教育の力、とつく／＼痛感を致しましたと同時に、我が子日出男の手を取り學校の方へ向つて、涙と共に伏し拜んだことが幾度かありました。時に子供の手を引いて、明治神宮に參拜してお禮を申し上げると共に、等しく大日本帝國の臣民である以上は、どうか一人残らず、此の偉大なる教育の恩恵に浴する事が出來、廣い世界に一人の聾啞者も無くなる様御加護あらせ給へと、社前に額づいたのであります。

お蔭を以て、子供は日に月に大人らしくなり、現に六年楠組に御厄介になつて居りますが、其れに引き替へ自分は、永の浪人殊に失敗に失敗を重ね此の有難い教育の恩恵を忘るゝ事はないけれども、何等知恩報徳の途を講ずる事も出來ざる不甲斐なさを、常に遺憾としつゝある次第ですが、攻めては子々孫々に至るまで、永く／＼此の恩恵を忘れざる様家訓として言ひ遺すべく心掛けて居る次第であります。以上簡單ながら全く私の偽らざる感想なり事實なり

の一端であります。

感想

〔創立第六年〕

初・五 服部吉兵衛

想ひ起せば既に六年の昔、子供が漸く學齡に達したので兼て希望の東京市立豊學校へ願書を提出致しました。處が入學試験が豫想外の難關で三分の二以上も飾ひ落されると云ふ有様、モット専門的に勉強させて置けば良かったと悔む處で後の祭りです。子供は見事に落第しました。それから遽に参考書を蒐めるやら経験者の教を乞ふやら爾後一年全く準備教育に専心致しました。次の年首尾よく入學許可書を手にした時の家中の悦び、將又登校後一日毎に、言葉覚えて歸る子供を見るにつけ、喜悅感謝の念は到底筆舌の及ぶ處では有りませんでした。併し其悦びを悦ぶと同時に其陰には尙多數の失望者有るを思ふ時昨年の苦き體驗を追憶して實に感慨無量、世にも不幸なる嬰兒にして而も入學難の惱み有りとは何と悲慘なる事か、其方々に對し同情の念に堪えませんでした。然るに此處數年來斯の教育も長足の進歩を示し、國又は府市各團體の充分認める處と成り、又振興會の活躍も目覺しく、當校の如きは年々收容兒童の數も増加し入學難も稍々緩和されつゝ有る事は實に欣幸の到りです。尙又教育の内容に就ては、校長先生始め諸先生の不斷の研究御努力の結果は、單文主義の大道を見出して口話法のトップを切り、恒に斯界の先驅と成り、今や全國、否世界に其稱を唱へられ、校運彌榮の時、茲に創立十周年を迎へ記念の催しを行はれる事は洵に意義深い事と存じます、今後共愈々益々一層の充實發展を遂げられ多數の嬰兒をして漏れ無く教育の恩恵に浴し得る様夫れくの御盡力を切望致します。入學當初の感想を書けと謂ふ御命令に對し大分脇道へ外れた様ですが聊か所感を申し述べた

次第で御座います。

拾週年に際して

〔創立第六年〕

初・五 神谷清太郎

過去を顧みて、一家に光明を得たことは、實に學校の賜と、深く感謝して居る處で御座ります。幼き時より一言も發し得なかつた不具の子、動作ですらも到底感受し得ざりし、祖母、父母の嘆きも、一年、二年と進級するに従ひ、發音はもとより文字も書けば、常識も發達して來ました事は、偏に先生方の御盡力、御熱心の然らしむるものと感激してをります。

今では荒天、風雨の時など遠方の事故、休んではと云つても、自分から勇んで登校を望んで出掛けます。いかに學校、先生に愛著を感じて居るか嬉しく思ふのであります。

歳を経ると共に益々充實した教授をして下さること存じますが、より良き御研究の上、斯の如き兒童の爲めに、此の上とも御教育を御願ひ申上る次第で御座います。

感想

〔創立第七年〕

初・四 橋本三左衛門

新緑滿面 生氣潑瀾とした六月下旬、目出度き貴校十周年の記念日にあたり、校内の充實、發展にと御多用の事と

存じます。

貴校に拙宅の子供が御厄介になりました最早四年となり。入學當初の頃を回顧致しますと、家庭の者にも相當の進境を見せてをります。これこそ偏に貴校の非常な御熱心の御指導によるものと厚く御禮申し上げます。

家庭に於きましても、子供の學習指導にも内心折に觸れては考へも致して居りますが、兎角日常雜務に追はれ勝ちな爲十分なる事もせず、學校まかせにしてをります。けれども家庭にて獨り目的を立て、何か仕事をもし又自習をもし嬉々としてゐる姿を見る時貴校に於ける教育の徹底を感ずることが出来ます。自分から考へて怠らず仕事をする開發的な精神こそ教育に必要なものであります。

それに尙喜びに溢れて自習する様子は實に先生方の愛の御指導によるものと衷心から深謝致して居ります。この様な子供こそ眞劍に家庭でも又先生方にも慈愛の精神により温く正しく引伸ばして光明の道を打開してやる事が必要だと平常考へて居りますが、貴校の熱誠溢るゝ御努力により、此處まで子供が進んで参つたのを見ます時、親として何とも云へぬ喜びを感じ居る次第であります。

何卒凡愚なる子供ではあります、今後ともよろしく御鞭撻の程御願ひ申し上げ感想の文に代へる次第であります。

感謝

〔創立第七年〕

初・四 樋口文吉

私共も昨日今日と、思ふ内、早や四ヶ年、入學當時の様子では進む事が出来得るであらうかと非常に考へました。

本校先生方の努力あふれる教、さすがのキンの胸に通じてか、此頃會話も上手になり、只今では老母、叔母等もよくわかると申し、殊に親類の人が参りました時の挨拶などもめいせきです。

雨の日風の日たゆみなく教へみちびき下されし先生方の苦心涙のじむ思ひにて、只々感謝致すのみでございます。

入學當時を顧みて

〔創立第七年〕

初・四 星野登利

感想としては色々有りますが、一々述べるのも煩はしいですが、親として、不具なる吾が兒をたとひ幾分でも明るい心持に導きたいと思ふ氣持は朝夕忘るる暇は有りません。こういふ兒童を持たれた御兩親御兄弟は皆同じ御考へと思ひます。幸に聖代の有り難さには聾啞學校と云ふ機關がある爲めに、一生社會に捨てられ、浮ぶ瀬もない、哀れな兒童も救はれると云ふのは誠に有り難い事です。

尙こうした兒童を御導き下さる校長先生始め各先生方の御努力には衷心から感心して居ります。今更ら乍ら教育の力の偉大さには驚嘆致して居る次第であります。聊か一言述べまして感想といたします。

ふりかへり想ふ

〔創立第八年〕

初・三 松原市太郎

私は現在本校三年と一年に、在學の兒童を持つ親です。

世界中の何物にも換へ難い愛しい我が子が嬰兒である事を初めて知つた時の驚きと落膽はなく、筆舌に盡せず、恐らく此等不具者を持つ親御様方の等しく味はふ悲哀であります。生れてから入學適齡まで全く人の言語を解せず、其の不自由を見るにつけ煩悶の種でありました。

幸にして選擇を誤らず、本校に入學して早や三年、諸先生の御熱心なる御研究、御指導に従ひ、家庭の犠牲的努力と相俟つて、今日では人の言語も解し、又自らも朗かに語り、耳の不自由を補ふ事の出来たのを喜んで居ります。そして今年入學した二番目もやがて三年後には、長男の様に自ら語りあふ事の出来るのを楽しみに、絶えざる努力を續けて居ります。

世紀革まるの感

創立第八年初・三 松 浦 泰 子

若し附添づれのしたとでも云ふおかしな言葉が許されるとしたら、さしづめ、それは私かも知れません。自分は何一つ出来ないくせに、大分長い間何人かの子供の後から先生のお教へになる事を拜見させて頂いたものが、一ぱし分つた様な氣持になつてしまひ、今三年の子供をこちらへお世話になる時もすっかり呑込んだ様な顔をしてついて来たものです。

然し四日五日十日と附いて来るうちに、私のみこんでゐたものが、見當違ひである事に氣が付きました。私は一年生は單語を習ふもの、そして唇で讀めた單語を少し後から言はせて行くものと思つて居りました。

分らない事を分らせ様とする。言へない事を言はせ様とする努力は、まるで大きな石を坂に押上げる様な氣持だと覺悟してゐたのです。處が先生はすらすらと文としての言葉を御教へになりました。十日目位には「センセーノマエ エシンブンオモツテ オイデナサイ。」

「オカーサンニ エンビツヲ アゲナサイ。」

などと先生がおつしやる。實際それは驚異に價しました。然し子供は二人のうち一人は智慧のおそい八歳の中以下の子供でしたが、私の「これが分るかしら」と云ふ心配をよそに、どんどんやつて行きます。一月、二月、私は大きな石を坂に押上げる苦痛をわすれました。子供も明るくのんびりとのびて行きます。後から伺つたのですがこれが單文主義と云ふのださうです。私はむづかしい理論は分りません。たゞ母として子供を見つめる時、先生が普通の聲で進めて行かれる毎日の授業、嬉々と學ぶ子供達、それは實に嬉しいもので御座います。

とてもむづかしいと思ふ事が、やすやすとこなされて行くのは、子供の生活にふれたものであるからでせう。それから毎日まる二年。近頃毎日かく日記にゴハンオタバルトキ、ワタクシガ「カミサマ、ゴハンオ クダサイイマシテ アリガトー」トイーマシタ。などと書く様になり又「ママサン、クツシタガ ヤブレマシタ。ヌイマスカラ イトオ クダサイ」と言ふ様になりました。そして何よりも氣のつく事は、大きい子供が此の位の時「テニオハ」の間違ひで大分困つたのですが、この二人の子供達は、日記に短い文を二十、三十位書くうち、あつて一つか二つ、ほとんど「テニオハ」の間違ひがないのは、そのお蔭ではないかと思ひます。

私の心持

〔創立第九年〕

初・二 兒 鳥 み き

千萬の寶も何かとさしたるくちびる聞く力たふとし

是が先生に對する私の家の者が眞心からの感謝の言葉です。此口話教育こそ誠に聖者の爲に何にもたとえない有難い教育です。私の四男ノリヲは只今二年生ですが、御蔭様で大分片言ながらお話の出来るやうになりました、家中の人氣者です。

あどけなき言葉のはしも家人は喜しき事と涙してきく

又此頃は何かと物の道理も少しわかり餘り理窟ばいと思ふ時も折々あります。此間も「ノリヲ明日のお天氣はどう思ひますか」と尋ねましたら、新聞を見なさいと持つて來ました。又讀話の方は餘り不成績ではありませんが、發話の方が上手に出来ないものですから、ノリヲは上手な生徒のやうにどうして言へないのかと私に時々たづねます。自分でもどうかして早く上手にお話が出来たらと思ふて居るらしいです。

日日のわざをし見れば夜のとばりしづあくる心地こそすれ

私も、ノリヲが此學校へ入學するまで何一つ知らなかつたのを是れまでにして下さいました先生の御恩にむくゆるやう一生懸命努力致しませう。何の教育でもですが殊に此聖教育は先生家庭兒童が一人にならなければ駄目だと痛感いたします。

終に先生方に厚く感謝し益々聖教育の發展を祈ります。

見たま、感じたま、

〔創立第十年〕

初・一 平 原 實 道

學校へ通學する様になつた。しかし聖學校つて、どんな教へ方をするのであらうと、今日は父に代つて行つて見ようと連れて出た。電車内で嘔特有の聲を出してなにか言ふので車内中の人が見るので一寸てれた。だが途中三四人の通學生が乗つたので助かつた様な氣持がした。やがて學校に來て見て驚いた。實に美しい別天地である。自分の豫想以外である。皆、樂しそうに嬉々として喜び騒いでゐる。幼ない生徒も、中等部の生徒も男女生徒入り亂れてあそんでゐる。私は又一つ美しい事を見た。それは二人の生徒が、なにかの間違ひで争ひをしてゐるのを見つけた大きな生徒が仲裁を取つて裁判を初めた。良く私にはわからなかつたけれども、二人の生徒は晴れやかな顔をして、二人でこめんなさいくと、十二三回頭をさげてあやまりあつて、にこ／＼して別れた。わづか二三分の出來事であつたけれど、私には實に美しく強く感じた。これを見て全校の美しいなごやかさを感じる。

始業になり先生の教へぶりを拜見するだに實に涙ぐましいものである。わからない所はわかる迄くりかへす。後についてゐる私の方が氣がもめて／＼すみませんと頭をさげたくなる。實に熱と力と慈悲のかたまりの教へぶりであるかく迄も一生懸命に教へて戴く生徒は普通小學校生徒よりも幸福なる生徒であると痛感した。それと同時に未だ學校へ來て見ないお父さんでもお母さんでも、一度は見學する必要があると思ふ。それが親として我が子への義務であらうと思ふ。

歸りの電車内は力強かつた。嘔者を笑ふ者は哀れな者よと。

柏
蔭
隻
語

- 1 校旗・徽章・校訓・國旗掲揚
- 2 學級名・柏新聞
- 3 校務分掌
- 4 研究部の組織に就て
- 5 言語學・音聲學參考書
- 6 特設時間割とA・B・Cクラス
- 7 讀話・發語テスト方法と處理方法
- 8 入學テスト問題抄
- 9 父兄講習要項

徽章・校訓・國旗掲揚

學校の徽章 (昭和三年三月制定)

本校の徽章は、かしはの葉六枚と其の中心にロウガッコウのロ又は口話學校の口字を白エナメルを以て配したものである。

柏葉を徽章に取り入れたのは、一高の徽章にヒントを得、日本古來の數多い紋章の中から選んだもので、主として形の美を望んだのであるが、その中に多少の意味を含ませてある。

「かしは」の漢字は、本來榊であるが、日本では柏の字が用ゐられてゐる。(漢字の柏は松柏とならべて常盤木である。) 柏は西洋では勇氣又は勇者を象徴し、日本では神事に關係ある目出度い木として紋章に用ゐられてゐる。柏の葉は古代食器として用ゐられ、轉じて饗膳や、食膳を掌る人を「かしはで」と言つた。今日でも神嘗祭や新嘗祭には柏の葉を用ゐさせ給ふ由である。西宮惠比須神社の紋も三柏である。

我が校では、柏の徽章によつて一は堅忍不拔の理想を表徴し、一はその材も皮も葉も一として棄てるところのない効用にあやからせ、食膳の聯想から、卒業後生活の安全を祝福したいといふ考をもつてゐる。

校訓 (昭和五年制定)

我が校に於いては、校訓として左の三つの徳目を選定した。

一 勤 勉

二 親 切
三 儉 約

何れも、學校生活、家庭生活、社會生活に要求せられるところであり、直に實行し得る事であり、又兒童、生徒の將來を考へて、此等の三つの徳を體得してゐるならば、世人に愛せられ、敬せられるであらうと思ふたからである。私共は、此等を更に左記の如く學年にそれ／＼適當な標語として與へることゝした。

一學年	二學年	三學年	四學年	五學年	六學年
ペンキヨシマス	なまけてはいけま せん	一しようけんめい に勉強しましょう	勉強しましたか	勤勉	
ナカヨグシマス	けんかをしてはい けません	人にしんせつにし ませう	親切にしましたか	親切	
ガイジニシマス	むだなことをして はいけません	けんやくしませう	節約しましたか	節約	

爾來四年、兒童も生徒も、よく之れを守り漸く校風とならんとしてゐることは、實によろこばしい次第である。

國 旗 掲 揚

兒童保護者嶋津治助氏が大國旗と大旗竿を寄贈されたので、昨昭和八年明治節から始めて、祝祭日その他國家的記念日には、國旗掲揚式を行ふことゝした。

國旗掲揚の目的は、言ふ迄もなく、

- 一、國民の國家に對する意志を簡明に標章し、
- 二、國家意識を喚發し、

三、國民精神を作興するためである。

國旗掲揚式は、職員生徒一同整列、訓練部主任の指揮により、初等部及中等部の最上級の組長をして掲揚せしめ、掲揚後宮城に向つて一同最敬禮を行ふことゝしてゐる。式日には學式後、同様にして國旗を下ろすのである。尙十二月二十四日朝 皇太子殿下御降誕を祝して第二回の掲揚式を行つた。

學 級 名

學 級 名

吾校の徽章は「柏」である。家に夫々の紋所がある様に「クラスの家」を代表する學級名は毎年、新一年の誕生母に各學級に命名される。凡て草木の名から選ばれるのであるが、受持は勿論他の先生も、父兄も生徒も、今度はどんな名前がつけられるかと心待つのも楽しみの一つである。

學 校 新 聞 「 柏 」

長年の懸案の「學校新聞」も昨年帽章「柏の葉」にちなんで「柏」と命名發刊される様になりました。

第一號 「發刊に就いて」	昭和八年 六月發行	第四號 「新年を迎ふる感」	昭和九年 一月發行
第二號 「暑中休暇に際し」	七月發行	第五號 「學年末に際し」	三月發行
第三號 「童話號として」	十一月發行	第六號 「十年記念式と新學期」	六月發行

第一號より第五號迄小川先生、第六號より鈴木先生にその編輯主任をお願いして居ります。

校務分掌一覽

(昭和九年度)

部	組	分	掌	事	項	大	要	部	員
研究部	主任 一名 部員 若干名 教務部員兼任ス	研究分團ノ連絡統一(第四部) 一、二、三、五各部研究發表ノ豫定作製 各研究ノ結果ノ處置 研究題材及擔當者ノ選定						主任 大小横石大 野川田黒石	
教務部	教務主任 首席教員之レニ 任シ中等部初等 部ノ連絡ヲ關ス ル事務ヲ扱フ 中等部主任 初等部主任 教務部主任 研究部主任 後援會係	職分掌事 ノ學校活動ヲ促進又ハ統制スルモノトス ノ學務部長ノ教育方針ニ本ツキ各部ノ連絡統一ヲ圖ルト共ニ一切 ノ事務ヲ掌シ 入學、退學、及落、卒業 學級、編級、及落、卒業 學級經營方針 時給、給食、給費 學費、給食、給費 週スケールテスト 賞罰 職員出張 補缺、配當 參觀、日配當 父兄會 行回、願、會 事、月、曆 教務會：每週月曜日 各部主任會：月末月曜日						初等部主任 石田黒 中等部主任 大石 後援會係 野川	
訓練部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 生徒自治制 朝訓、看護式、國語番 會、練習標當						主任 飯上佐小田 高田木竹引	
體育部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 身體檢查 朝會、急練ヲ主トスル遠足(每學期一回) 衛學生一般會 小運動會(每月十五日) 看運動會(當番具)						主任 吉上風 信田間 芳岡小兵 賀西藤	
學藝部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 學校行事(體育ニ關スルモノヲ除ク) 陳列棚 休暇課題 兒童月曆						主任 兼三廣小 子、上、田、川、任 山、岡、山、小 內、下、室	
圖書部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 圖書購入、貸出整理 兒童文庫 學校新聞(柏)(年五回發行) 參考用圖繪畫蒐集保管						主任 兼廣指風伊 子、田、原、間、東、任 井、山、小、阿、鈴 手、田、西、部、木	
管理部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 帳簿整理保管 備品調査 校地、校舍ノ改善修理 消耗品代理請求 兒童用机腰掛、黑板、鏡等						主任 兼三井中神 子、上、手、野、林、任 山、飯、吉、山、佐 內、高、信、下、藤	

部	組	分	掌	事	項	大	要	部	員
研究部	主任 一名 部員 若干名 教務部員兼任ス	研究分團ノ連絡統一(第四部) 一、二、三、五各部研究發表ノ豫定作製 各研究ノ結果ノ處置 研究題材及擔當者ノ選定						主任 大小横石大 野川田黒石	
教務部	教務主任 首席教員之レニ 任シ中等部初等 部ノ連絡ヲ關ス ル事務ヲ扱フ 中等部主任 初等部主任 教務部主任 研究部主任 後援會係	職分掌事 ノ學校活動ヲ促進又ハ統制スルモノトス ノ學務部長ノ教育方針ニ本ツキ各部ノ連絡統一ヲ圖ルト共ニ一切 ノ事務ヲ掌シ 入學、退學、及落、卒業 學級、編級、及落、卒業 學級經營方針 時給、給食、給費 學費、給食、給費 週スケールテスト 賞罰 職員出張 補缺、配當 參觀、日配當 父兄會 行回、願、會 事、月、曆 教務會：每週月曜日 各部主任會：月末月曜日						初等部主任 石田黒 中等部主任 大石 後援會係 野川	
訓練部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 生徒自治制 朝訓、看護式、國語番 會、練習標當						主任 飯上佐小田 高田木竹引	
體育部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 身體檢查 朝會、急練ヲ主トスル遠足(每學期一回) 衛學生一般會 小運動會(每月十五日) 看運動會(當番具)						主任 吉上風 信田間 芳岡小兵 賀西藤	
學藝部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 學校行事(體育ニ關スルモノヲ除ク) 陳列棚 休暇課題 兒童月曆						主任 兼三廣小 子、上、田、川、任 山、岡、山、小 內、下、室	
圖書部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 圖書購入、貸出整理 兒童文庫 學校新聞(柏)(年五回發行) 參考用圖繪畫蒐集保管						主任 兼廣指風伊 子、田、原、間、東、任 井、山、小、阿、鈴 手、田、西、部、木	
管理部	主任 一名 部員 若干名	〔部會及記錄〕 帳簿整理保管 備品調査 校地、校舍ノ改善修理 消耗品代理請求 兒童用机腰掛、黑板、鏡等						主任 兼三井中神 子、上、手、野、林、任 山、飯、吉、山、佐 內、高、信、下、藤	

庶務部	主任 一名	會計	職員 明住 所書	〔主任〕美素
部員 若干名	宿直、日直ノ配當、宿直日誌	復文書計		山下

研究部の組織

一、組織

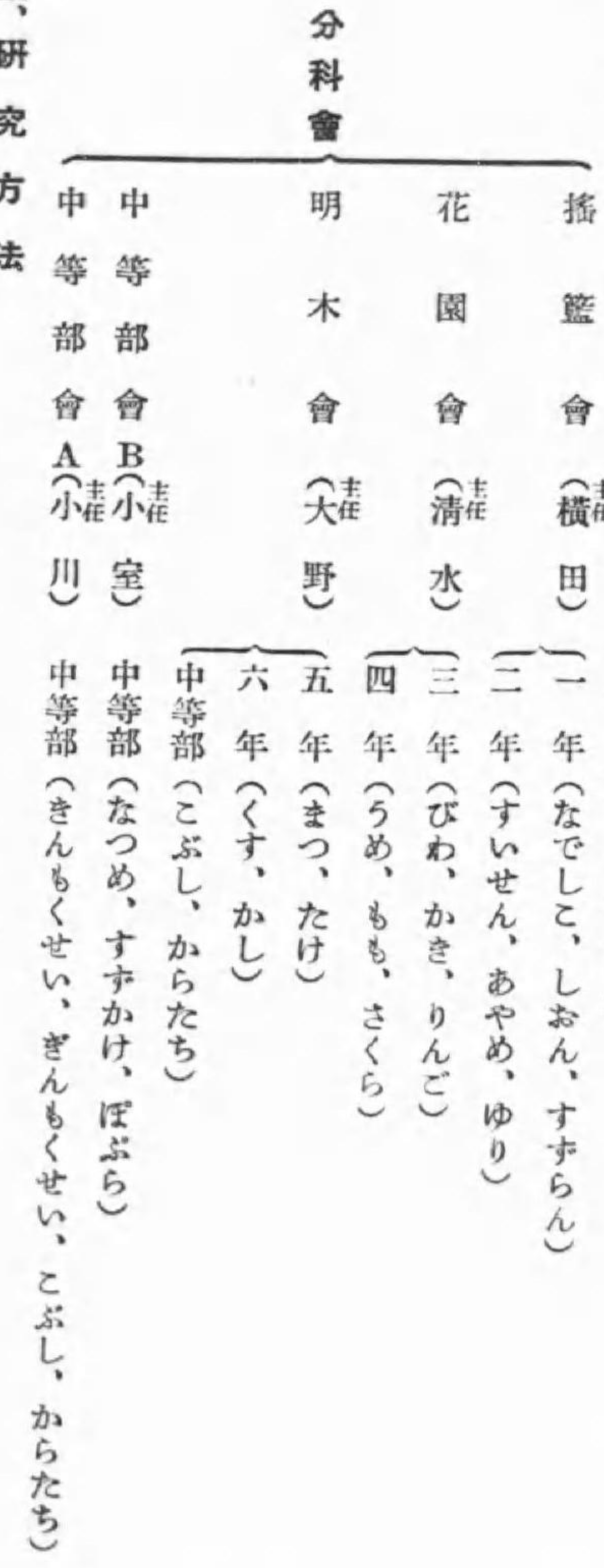
- 1 研究部を分ちて五部とす。
- 2 第一、第二、第三、の各部は數人を以て一組となし、學科の實際問題につき協同研究をなす。
- 3 研究員は校長の指名とす。
- 4 第四部は學年單位の協同研究分團とし之を一二三四五六の各學年及中等部を以てする四分團とす(後章詳述)
- 5 特に指名又希望による或る教材の研究は別に研究をなし、(2)の研究員と協力す。
- 6 教科課程によらざる別種の研究は第五部の研究とし、研究部主任へ通告の上適宜の時機にその發表をなすものとす。

二、目的

- 1 教材の本質の認識と本質觀の確立。
- 2 學習要綱の確認
- 3 學校教育活動の發展と精練。

三、分野

- 第一部 修身、讀本、發語、國語初步、讀話、綴方、算術、觸話、聽話
- 第二部 國史、地理、理科
- 第三部 書方、圖畫、手工、體操、裁縫
- 第四部 分野〔分科會〕(和昭九年度)
- 第五部 1 學校協同研究 2 自由研究 3 指名研究 4 特別學級



四、研究方法

- 1 各分科會には分團主任をおき研究部主任之れを總括す。
- 1 期日、毎週一回所定日に開く(當日開催出來るときは土曜日)

- 2 時刻、所定日午後一時三十分より四時半まで（当日は掃除を一時までに終り児童は帰宅せしめること）
- 3 場所、應接室（使用中の時は主任の教室を之に當てること）、職員室掲示板に記載す）
- 4 座長、研究分團主任（主任は司會者となり、豫定、實施をすすめ、記録をなす、會を代表して發表をなし研究に關し會員を指名す。）
- 5 研究分野
 - a 實地授業及テスト並びに輪讀研究を主體とすること。
實地授業は毎月二回
 - 但し 搖籃會は毎週に十五分授業を一齊に行ふを本體とし、一年、二年交代に行ふ。
花園會は毎週に二十分授業を一齊に行ふを本體とし、三年、四年交代に行ふ。
 - b 褒賞スケール・テスト、毎學期末一回。
 - c 輪讀研究は所定日の限餘の時間を利用すること。
 - d 其他、分團學藝會（搖籃會を除く。第一學期、第二學期各一回）。兒童座談會、父兄會、研究發表、家庭訪問、小遠足、見學（年一回、二學期を除く、中等部二回）等。
 - e 細則は主任之を定む。

6 毎週土曜日帳簿提出。

五、研究發表表

- 1 隔週火曜日職員會後引續き研究会を開く。
- 2 實施發表（目的の3）（測定）。
- 3 調査發表（目的の1、2）。

言語學・音聲學參考書

題名のごとく言語學音聲學に關するものを主とし、更らに一步を踏み出して、それに聯關をもつよき參考資料となる文献をセレクトしました。然しお詫びして置かねばならぬ事は寧日なき中を病んだため、自分の書架にある邦文藏書の中から何の整理もなく分類もせずに雜然とこゝに列記したにすぎないことです。

他日、之を類別整理して、圖書館に調べ、人にも訊き、充實した一覽表を作製したい。（石黒記）

1	日本音聲學	佐久間鼎	六、五〇	京文館
2	國語音聲學	神保格	二、九〇	明治圖書株式會社
3	科學研究法	フランス學會編	三、〇〇	刀江書院
4	通俗言語學	宮田修	絶版	博文館
5	發音學	遠藤隆吉	絶版	博文館
6	言語學原論	小林英夫	五、五〇	岡書院
7	國語教育の爲めの音聲學	石黒魯平	一、〇〇	目黒書店
8	英語發音明解	大西雅雄	一、〇〇	研究社
9	國語の發音	大西雅雄	一、〇〇	大學書林

28	音聲の研究 1
29	音聲の研究 2
30	音聲の研究 3
31	言語學概論
32	言語學概論
33	日本語原の心理的解釋
34	國語アクセント講話
35	日本語學
36	言語觀史論
37	言語哲學と言語共和國
38	A B C は口の形
39	日本語發音の創生
40	國語音聲學講話
41	言語の本質及機能
42	國語音聲學概説
43	隋唐音圖
44	國語の發音とアクセント(一巻―六卷)
45	岡倉先生記念文集

興文社	興文社
井口丑二	岩波書店
金子健二	早稻田大學出版部
保科孝一	岡文書院
森正俊	同文書院
東條操	刀江書院
二宮哲三	同文書院
小林光茂	目黒文書館
田澤嘉聲	平凡書社
岡倉由三郎	文化生活研究會
蘆川忠雄	同文書院
大矢透	同文書院
神保格	同文書院
新村出	同文書院
中村烏堂	同文書院
市村神保	同文書院
金田一京助	同文書院
金田一京助	同文書院
大矢透	同文書院
神保格	同文書院
佐久間鼎	同文書院
松岡靜雄	同文書院
安井洋	同文書院
安藤正治	同文書院
神保格	同文書院
井節三	同文書院
金子健二	同文書院
石黒魯平	同文書院
井節三	同文書院
小林光茂	同文書院
佐久間鼎	同文書院
今泉浦治郎	同文書院
佐久間鼎	同文書院
大矢透	同文書院
神保格	同文書院

10	日本語原
11	言葉の研究と言葉の教授
12	言語學大意
13	音聲學の話
14	簡約方言手帖
15	國語聲音小解
16	聲の教育
17	田澤式吃音矯正法
18	發音學講話
19	日常の言語
20	韻鏡考
21	話言葉の研究と實際
22	東方言語學史叢考
23	元始日本語
24	言語(その本質發達及び起源)
25	言語學研究
26	國語音韻論
27	音圖及手習詞歌考

井口丑二	平凡社
金子健二	寶文館
保科孝一	教文館
森正俊	伊勢新聞社
東條操	郷土研究社
二宮哲三	執行文庫
小林光茂	文化生活研究會
田澤嘉聲	主婦の友社
岡倉由三郎	實業の日本社
蘆川忠雄	實業の日本社
大矢透	實業の日本社
神保格	明治圖書株式會社
新村出	岩波書店
中村烏堂	元始日本語刊行會
市村神保	岩波書店
金田一京助	岩波書店
金田一京助	河出書店
大矢透	刀江書院

46	國語發音の學び方	小林光茂	〇、三〇	興文社
47	日英佛獨音聲學入門	石黒魯平	〇、八〇	中興文社
48	國語音調論	高橋龍雄	二、八〇	英語研究社
49	發音綴字の話	加茂正一	〔絶版〕	文友堂
50	萬國發音記號手ほどき	加茂正一	〇、七〇	研究社
51	こばの講庭(第一輯)	音聲學協會編	一、二〇	開拓社
52	英語發音圖表	大西雅雄	一、二〇〇	大日本圖書株式會社
53	現代の國語	日下部重太郎	二、〇〇	厚生
54	國語教育の科學的研究	波多市松	二、三〇	實業之日本社
55	こどもの研究	波多市松	〔絶版〕	文化書房
56	新入學兒童語彙の調査	波多市松	二、〇〇	文化書房
57	言語及讀方の基本的研究	橋本進吉	〔絶版〕	岩波書店
58	國語學概論上(岩波講座日本文學)	橋本進吉	〔絶版〕	岩波書店
59	國語學概論下(岩波講座日本文學)	時枝誠記	〇、一五	岩波書店
60	國語學史(岩波講座日本文學)	兼常清佐	一、八〇	岩波書店
61	日本音字()	土居光知	一、八〇	岩波書店
62	基礎日本語	加茂正一	一、五〇	岩波書店
63	國語問題十講			文友堂

64	日本語化する外國語	山縣源四郎	〇、一五	〔非賣〕 岡山縣西大寺高等女學校英語研究會
65	基本日本字抄	山縣源四郎	〇、一五	〔非賣〕 岡山縣西大寺高等女學校英語研究會
66	發音カナ遣要求の聲	上野陽一	〇、五〇	カナモジ會
67	發音式カナ遣論の理論的根據	鳥谷部陽太郎	各〇、一五	カナモジ會
68	國語國文の將來	福永恭助	二、〇〇	聚英會
69	國語國字問題文庫(一一六)	安藤正次	一、八〇	廣文堂書店
70	國語國字問題	小幡重一	三、二〇	內田老鶴團
71	小さい國語學	伊澤修二	〔絶版〕	大日本圖書株式會社
72	音樂愛好者のための音聲學	伊澤修二	一、五〇	大日本圖書株式會社
73	吃音矯正の理論と實際	伊澤修二	〔絶版〕	大日本圖書株式會社
74	音韻新論	淺井春榮	〔非賣〕	京都吃音矯正學院
75	早期吃音矯正法	大場健兒	〔非賣〕	東亞書房
76	どもり矯正の實驗	安藤正次	三、五〇	六文館
77	國語學通考	新村出	三、五〇	岩波書店
78	言語學概論(日本文學岩波講座)	安藤正次	三、二〇	岩波書店
79	國語音聲學()	佐久間鼎	三、二〇	岩波書店
80	一般音聲學	小幡重一	三、二〇	岩波書店
81	應用音聲學(岩波講座物理學及化學)			岩波書店

117	實用英佛獨露の發音
116	最近の心理學と國語教育
115	國語の語根と其の分類
114	和聲學要義
113	外來語學序說
112	日本語になつた英語
111	國字問題の研究
110	大阪に於ける兒童の言語
109	ふるさとの
108	假名と表音能力
107	五十音圖改正私議
106	日本音樂史
105	アクセントと方言
104	言語學概説
103	國語音聲學
102	音聲心理學
101	朝鮮語と日本語
100	應用音聲學(國語科學講座)

大西雅雄	二、五〇	厚生閣
小倉進平	二、〇〇	文泉堂
佐久間鼎	〇、二〇	泉生閣
神保格	〔非賣〕	文泉堂
神保格	〔非賣〕	文泉堂
服部四郎	二、八〇	文泉堂
田邊尙雄	〇、四〇	文泉堂
福田芳之助	〇、二〇	文泉堂
武上辰男	〔非賣〕	文泉堂
澤田四郎作	〇、二〇	文泉堂
菊澤季生	二、〇〇	文泉堂
荒川惣兵衛	一、二〇	文泉堂
荒川惣兵衛	〔限定版〕三、三〇	文泉堂
荒川惣兵衛	二、八〇	文泉堂
大島正健	三、〇〇	文泉堂
リマスキイ・コルサコフ	二、五〇	文泉堂
ブレイトネル	一、八〇	文泉堂

82	國語發音アクセント辭典
83	言語の機能と讀方教育
84	人類と言語
85	東洋語學の研究
86	日本語原學
87	實驗英語音聲學
88	英語音聲學
89	佛語の發音及文法
90	生話表現の言語學
91	國語教育の基礎とその言語學
92	國語學概論
93	音聲學概論(國語科學講座)
94	言語史講話
95	音聲物理學
96	國語音律論
97	標準語の問題
98	言語社會學
99	國語純化と基本語

常深・神保	二、五〇	厚生閣
本庄録次郎	二、〇〇	文泉堂
イエスベルセン	四、〇〇	文泉堂
林 蕪 臣	五、〇〇	文泉堂
兼弘正雄	三、八〇	文泉堂
神保格	二、三〇	文泉堂
松井知時	一、三〇	文泉堂
小林英夫	四、六〇	文泉堂
石黒魯平	二、九〇	文泉堂
小林好日	三、二〇	文泉堂
佐久間鼎	〇、二〇	文泉堂
石黒魯平	〇、二〇	文泉堂
小幡重一	〇、二〇	文泉堂
相良守次	〇、二〇	文泉堂
石黒魯平	〇、二〇	文泉堂
田邊壽利	〇、二〇	文泉堂
土井光知	〇、二〇	文泉堂

154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136
言葉の魔性神秘性に徹する國語教授へ	日本音楽の調子の話	一般文法成立の可能性について	漢文音讀論	現代國語精説	國字論批判	國語の新研究	朗讀法精義	スラヴ語比較文法(音韻及語形論)	ニホンジ・ダイガク	第二國語國字問題と世論	國語・國字問題と世論	文法論と國語學	唱歌法及發聲法	國語の方言區劃	萬國音標文字	英語アクセント心得	英語新教授法の實際	バンクチュエイシヤン
金子彦二郎	三條商太郎	小林英夫	岡田正三	日下部重太郎	菊澤季生	三矢重松	日下部重太郎	久保田滿年				三矢重松	草川宣雄	東條操	市河三喜	石川、國府田	南石福次郎	
二、八〇	二、五〇	〇、四〇	一、八〇	四、五〇	〇、一〇	四、八〇	二、五〇	一、五〇	〇、四〇	〇、一五	〇、一五	四、八〇	三、〇〇	一、三〇	〇、二〇	一、二〇	〇、七〇	
昭和出版	厚生書院	刀江書院	政經文館	中日本ローマ字館	中日本ローマ字館	中日本ローマ字館	中日本ローマ字館	研究社	ニホンジヒロメカイ	教育會	教育會	中京文館	京英書院	育英書院	光風館	興文社	開拓社	

135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118
語學研究の原則	音聲學	アクセントとは何か	國語のアクセント	兒童語彙の研究	新言語學	言語發達論	言語學十回講話	五十音圖説	發音學講話	國語音聲學	國定讀本發音辭典	韻鏡音韻考	小學發音指南	國語のため第二	國語のため	ことばのいのち	ストロング氏言語史綱要
加茂正一	新村出	佐久間鼎	澤柳、田中、長田	金田一京助	保科孝一	岡倉由三郎	龜田鶯谷	岡倉由三郎	平野秀吉	高橋龍雄	大島正健	遠藤隆吉	上田萬年	金澤庄三郎	八杉貞利		
一、八〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇
文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂	文友堂

特設時間割・ABCクラス

發 語 (特設時間割)

口話法に於て發語の地位が如何なるものかは、今更喋々する迄もない。當校は發語成績の向上に全幅の努力を拂つてゐるが、その實現の第一着手として三年前より全校一齊發語練習の時間を時間割面に特設し之が實施を續けてゐる。即ち毎週火曜日第一時限を之に充て、基本練習の時間とし、その結果相當見るべきものあるに依り、昨年度より更に其の増加を見るに至つた。各學年の配分並に主眼とする取扱の概要を記すれば凡そ次の通りである。

初等部一、二年

一年發語の取扱は本校『入學第一學年の經營案』の『發語』の項に示す通りである。二年になつて凡そ發語の取扱領域が非常に擴大されて來る。

初等部三年……一週六時間

更に三年に至つて本格的に發語の基礎工作が愈々固められなければならぬ時期となる。言はゞこの階梯に充分なる發語の礎石が確立されるが故に、特に一週六時間を最低基準として實施してゐる。

初等部四、五、六年……一週三時間

各學年夫々の段階と取扱上の差を認め得るが、時間割の上には、一週三時間を特に發語の時間と定め、火曜第一時

限は新教材の取扱を一齊的に、他の二時間は個別的に矯正指導を主とした取扱を爲す。

中等部……一週三時間

初等部の繼續として火曜第一時限を發語指導矯正の時間とし、他の時間にも隨時必要に應じて發語中心の取扱をなす。

A・B・Cクラス

教育効果の終局が各個のより善き發達を期することにあるなら、夫々の能力に應ずる對策は必然的に生れるであらう。

A、B、Cクラスは各學年を單位として、同一年級を優、中、劣の分團として其の取扱をなさんとするに外ならない。

我校は三年前より之が實施を繼續し、目下は毎週毎曜第三時限を、算術讀方に限り、之を全校一齊に、各學年共學級擔任交替に行つてゐる。

組分は平常の考査と隔週テストとを斟酌して關係學年擔任協議の上定め、同一教材をA、B、C各クラス共取扱ふことになつてゐる。優、中、劣各クラスには、自ら取扱上差異を生ずるは勿論、優組には應用的發展的取扱を、中組は偏に優組への進歩を目指し、劣組は基本的、基礎的方面の取扱に注意し遲進兒の救済を圖らんとしてゐる。

尙毎回の成績考査の結果により優組より中組へ、逆に中組より優組への異動があり得る譯である。以上は初等部一年(一年生だけは六月から實施)より同六年迄であるが、中等部は前者とは自ら特異の立場を持つてゐるが故に、現在科目による交換授業を以て前者に對し試みてゐる。

讀話並に發音テスト

讀話並に發音テストは何がためにあるか？ それは幼年時代に定期或は臨時に醫師の健康診斷發育測定をするのと同じ様に、教育が必要とする基礎の強固さ、その度合を知るのために缺くべからざる一つの診斷であることは論を要しない事であらう。

今その方法について實際に吾校で試みて來た事を簡単に述べることにする。

先づ讀話の部門について

一、テストを行ふ單位

- イ、全校一齊にやるもの
- ロ、研究分團單位のもの

- ハ、同學年單位のもの

- ニ、學級丈を單位のもの、等が數へられる

二、テスト問題の提出とテスト方法問題について

- イ、教材として前もつて渡したものについて行ふもの（問題及練習期間はその都度定む）

- ロ、常識として知つてゐるだらう、知つてゐなくてはならないといふ様なものを、まとめて提出する場合

- ハ、校長が適當に提出する場合

- ニ、學級で應用の意に於て提出する場合

ホ、研究分團で選定するもの、尺度テスト等の方法によつて提出するもの
尙、そのテスト方法は調査者が被テスト者對つて一回丈（普通之を原則としてゐる）發話してやつて、動作或は發語筆答させてその可否を判定するのである。

三、調査者

- イ、受持教師

- ロ、附添父兄

- ハ、他學級の先生

- ニ、全く關係のない人等が單一に、或は共同に、或は交代して之を行ふのである。

大體如上の如き方法によつて行はれた結果にもづいて、同一學年三學級の全兒童をABCクラスに分け、毎日第三時限に於て一時間各々の程度に應じて力をのばし、特に劣生には課外の指導等について考へるのである。これは平常の健康法に留意してゆくと云ふ様な適切な方法と信じてゐる。

續いて發音の部門については、一、材料 二、方法 三、調査者 四、結果の順序で述べる

一、材料

- イ、單音（清、濁、鼻、拗各音韻）

- ロ、單音を無意味に排列したもの

- ハ、單語（或る特定の音を語頭、語中、或は語尾に含むもの）

其他單なる發音のみでなしに發語を含めて見る場合、a、單語、b、單文等があげられる、この部分は主として語

調や渉りの關係をテストする場合である。

二、方法

- イ、發音させようとする素材を調査者の或る一人が發話し模倣させる場合
- ロ、材料を假名、或は發音記號にて書きたるものを示してこれを發音せしむる場合
- ハ、其他として問答の形式をもつて發表せしめ之をきく場合もある。これは材料の「ハ」及び「其他」の場合に行はれるものである。

此の時調査者は聞き取つたものを顎音化、頭聲化、濁・清音化、直・拗音化、鼻音化、母・子音の脱落等より訛音の傾きまで詳細に記入しなければならぬ。この記録は貴重なるものである。

三、調査者

發音テストに當る者は、正しい聴力の保持者である事を條件として誰でも可能ではあるが、大體音の高低強弱、音色、調音等位は音について理解を持ち、且文字の書ける程度を限度としたい。

斯ういふ限定の中に立つと、教師か、その他若干でも音聲に關係を有する仕事に従ふものが適當であるわけで、その人員は二人以上數人を限度としたい。

調査者は平常普通の場合學校では教師の誰かゞこれにあたつてゐる。

四、結果

結果は列間、行間、列、行別等に或は直、拗、清、濁別に統計され、それによつて誤音の矯正をなし、明朗な發語への出發點とするのである。

入學テスト

毎年、入學テストを行つて居ります。二月始めから願書受付を開始し三月上旬(中旬)に、テスト(考査)を致します。第一日には智能テストを行ひ、次の日には身體検査を行ひ二日間で終ります。そして合格、不合格の通知は一週間内に夫々通達します。昭和九年に行ひました。考査問題は次の通りです。

テストの種目と方法

1 動作

- a 指 兩指を揃へること及屈伸
- b 圓の周りに添つて走る(逆行する)
- c 直線上 兩足をきちんと揃へて躍ぶ

2 色 彩(A・B)

- a 色合せ 五色のカードを五色の箱に分類しつゝ納める
- b 畫と色 コツキ、バナナ、ナガゲツの繪を示し同じ色のカードを拾はせる
- c 實物と繪カード 幾色かの繪カードの中から、實物と同じ色の繪カードを一枚拾つて合はさす。

3 模 倣(A・B)